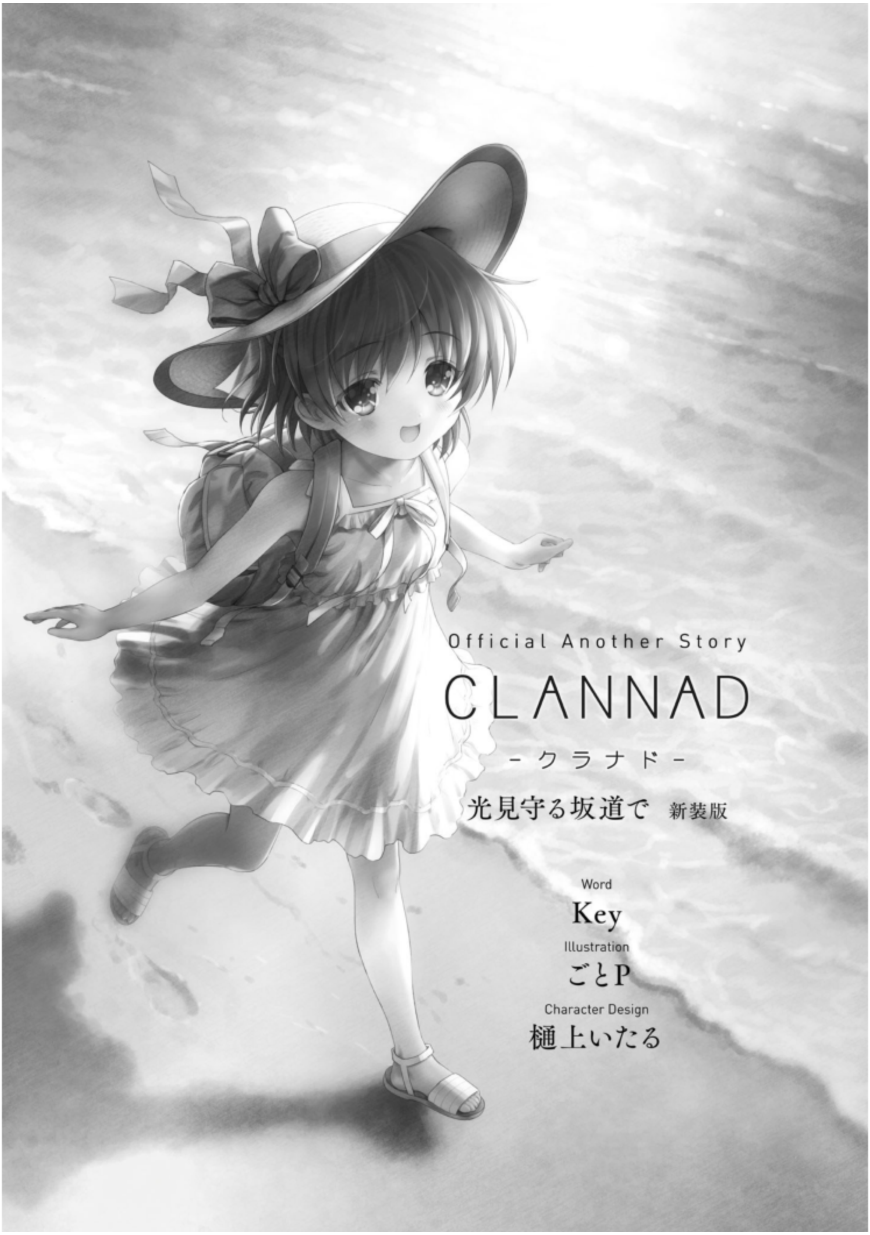

Word
Key
Illustration
ごとP
Character Design
樋上いたる
Official Another Story
CLANNAD
-クラナド-
光見守る坂道で　新装版


Official Another Story
CLANNAD
-クラナド-
光見守る坂道で 新装版
Word
Key
Illustration
ごとP
Character Design
樋上いたる

本電子書籍を示すサムネイルなどのイメージ画像は、再ダウンロード時に予告なく変更される場合があります。

本電子書籍は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。

CONTENTS

01

勇気を出して

文：麻枝准



　三年生に進級した、その日の朝。

　職員室の前に張り出された、クラスの割り当て表を見上げる。

　新しいクラスに話ができる人はひとりもいなかった。

　その日の放課後、下校生徒でにぎわう廊下。

「こちら木村さん。新しいクラスで、前の席になった子」

　友達の子に、ひとりの女の子を紹介される。

「はじめまして古河渚です……えへへ」

　精一杯の笑顔で挨拶する。

「木村さんとわたし、このまま服みにいくけど渚ちゃん、どうする？」

「ええと……」

　考える。迷う。

「道草いけないので、帰ります」

　結局そう答えた。

「そんなの気にしてる子、今時いないって」

「ほら、いこうよ」

「んー……」

　迷う。考える。

「大丈夫だって」

　その言葉がわたしの背を後押しする。

「それでは……今日だけつきあわせて頂きますっ」

　目をつむって、そう答えた。

「あはは、そんな力入れて、古河さんって、おおげさだね」

　木村さんという子がわたしを見て笑う。

「おもしろい子なんだよ、渚ちゃん」

　わたしのことを話題に歩き出す。

　すごく照れくさかった。

　デパートの中を三人で見て回る。

「ああもう、ドキドキします……先生に見つかったら、ぜったい怒られてしまいます」

「他にもウチの制服の子いっぱいいるじゃん。ほらこのワンピース、絶対渚ちゃん似合うよ。試着してみて」

「試着までするんですか……すごく、ドキドキします……」

「試着もせずに買えないでしょ。ほら着てみて着てみて」

「わたしは見るだけでいいです」

「いいから」

　胸にワンピースを押しつけられる。

「はぁ……」

　情けない声をあげて、試着室へ。



　服を着替え終えてカーテンを開けると同時。

「先生きたっ、早く逃げるよ！」

「え、わぁ」

　値札がついたワンピース姿のままデパートの中を走る。

　結局、それはわたしをだます嘘だったのだけど。

　だけど、楽しかった。

　トンカン、トンカン。

「で……俺たちは何をしてんだ……」

　俺はベニヤ板を押さえながら訊いてみる。

「入学式の準備だねぇ」

　金槌で釘を打ちながら春原が答える。

「なんでそんなことをしてんだ……」

「それは罰ですねぇ」

「なんで罰受けてんだよ……」

「それは僕が授業中、カーテンにくるまって隠れてるのを先生に見つかったからだねぇ」

「おまえ、アホだろ……」

「違うっ、僕は完全に気配を消して隠れることに成功していたんだ！　けど、あいつが……杏の奴が……『先生、なんかカーテンの下から足が出ていますけどぉ』ってチクリやがったんだよぉっ！」

「おまえ、まぬけすぎるからな……」

　トンカン、トンカン。

「で、どうして俺まで」

「おまえも授業サボッてたんだから、同罪」

　こっちは中庭で日向ぼっこしてただけだってのに、カーテンに隠れていた奴と同罪……嫌すぎる。

「ああー、もうやだっ、なんで僕のようなアウトローが新入生歓迎の手伝いなんてしてんだよっ」

　春原が金槌を投げ捨てる。

「でも、生活指導の大口が仕切ってるからな……逃げ出すとやっかいなことになるぞ。後、自分でアウトロー言うな」

「そうだ、岡崎。ひとつ罠を仕掛けておいてやろうぜ」

「罠……？」

「ああ、新入生をぎゃふんて言わせる罠。この学校は甘くないんだぜっ、僕たちみたいなアウトローが居ることを覚えておきなってな挨拶さ。どう？」

「いや。まーどーでもいいけど」

「よしじゃあ、とっとと自分たちの仕事を済ませちまおうぜ！　ほらちゃんと押さえておけよ！　気合い入れていくぜ！」

「律儀なアウトローだな……」

　日もとっぷり暮れた帰り道。

　木村さんも別れた後。

「渚ちゃんも早く、クラスで遊べる子見つかるといいね」

　そう彼女はわたしを振り返って言った。

　□咤。

　うん、と小さく頷いた。

　彼女と木村さんは、これから仲良くなっていくんだろうな。同じクラスなんだから。

　そう思いながら、ひとり家路についた。

　家の敷居をまたぐ。家はパン屋。今は店じまいの最中だった。

「おかえりなさい」



　お母さんが手を止めてそう迎えてくれる。

「ただいまです」

「おかえり。どうだ、親しい奴と同じクラスだったか？」

　くわえたばこのお父さんが足を止め、訊いてくる。

「いえ……やっぱりクラス別れちゃってました」

「じゃ、新しい友達は。席、近い奴と話さなかったのか」

「ぜんぜん話せなかったです」

「くわ……なんでそこでつっこんでいかないんだよっ！　自己紹介していけよっ！　オレだよ、オレオレ、そう、渚！　あんたの孫の渚だよっ！　事故っちゃって困ってんだよ！　ってつっこんでいけよ！」

「それなんかちがいますっ」

「まあ、それぐらいの勢いが必要だってこったよ」

「二年の時も、同じクラスの子と親しくなるのにすごく時間かかったんです。今回も時間かかりそうです……」

「てめぇ奥手だからなあ……」

「話すきっかけがほしいんですよね」

　お母さんが助け船を出すように言ってくれる。

「あ、はい……そういうのがないと話せないです……」

「じゃあ、とっておきの作戦を伝授してやるか……」

「え、そんなのあるんですか」

「ああ、先生を間違えて、おかあさん！　って呼んでしまって恥かくことあるだろ。それを応用してだな、先生を間違えて、ウルトラの母！　って呼ぶんだよ」

「……もういいです」

「最後まで聞けよっ、そうするとだな、みんなが噂し始めるんだ、古河さんって……もしかしてウルトラ関係の人？　変身できるの？　聞いてみようか？　古河さ──ん！」

「……夕飯つくりますっ」

翌日は土曜。

１時間目が終わった休み時間。

前の席の子が、隣の子と話している。

何かのマスコットキャラクターの名前を忘れてしまったようで、思い出そうとしている。

わたし知ってる……。

でも、結局、隣の子が思い出してしまった。

「はぁ……」

小さくため息をつく。このままじゃいけない。

きっかけ、きっかけ……。

必死に考える。

……ウルトラの母。

……古河さんって……もしかしてウルトラ関係の人？

ぶんぶんと首を振る。

え？　と斜め前の子がわたしを振り返っていた。

えへへ……と愛想笑い。

不思議そうな顔をした後、また隣の席の子との会話に戻った。

「はぁ……」

次の授業の準備をしよう……。

結局その日も誰とも話すことができず、終わってしまった。

　ザクザク、ザクザク。

「なんで、こんなことしてんだ俺は……」

「ん？　紙吹雪」

「んなことはわかってるよ……」

　春原と俺は向かい合って、色紙をハサミで切り刻んでいた。

「どうして、入学式の準備が終わったのに、俺たちはまだこんなことしてんだよって意味」

「そりゃあ罠を仕掛けるためだよ。おっと、くす玉の張りぼてが乾いた頃かなっ」

「むちゃくちゃ心優しい先輩になってる気がするんだが……」

「ばぁか、体裁を整えもせずにドッキリが面白いかよっ！」

「ドッキリなのかよっ！」

「いや、間違えた……挨拶、挨拶。行儀いい先輩ばかりじゃねぇぜっていうさ」

「あーもーなんでもいいよ、とっとと終わらせてくれ」

「後は、中から出てくる垂れ幕だな」

「ものすごい懲りようだな……」

「なんて書こうかなぁ。『春原・岡崎仲良しコンビ ｂｙ 夜露死苦』とかどう？」

「ツッコミどころがいくつかあるが、とりあえずやめてくれ」

「じゃあ『陽平＆朋也ふたりは最高！ ｂｙ 夜露死苦』」

「さっきよりツッコミどころが増えた。とりあえずｂｙの前後、逆だからな」

「文句ばっか言うんじゃねぇよっ、なら、てめぇが書けよっ」

「なんで俺が……」

「じゃあ、『春原・岡崎仲良しコンビ＆オメガトライブ with J-WALK featuring サザンの原坊以外 ｂｙ 夜露死苦』にしよう」

「むちゃくちゃ暑苦しいからやめてくれ……」

「じゃあ、原坊は譲るよ」

「いや、それ譲られても変わらないからさ……」

「だったら、おまえが書けよ」

「ちっ……わかったよ……」

　俺は渋々筆をとる。なんかいいように乗せられた気もするが……。

「この幕が垂れ下がった後に、アレが落ちてくるんだな？」

「ああ」

「じゃあ、俺が言えるのはこれだけだ」

　書き上げた垂れ幕と紙吹雪をくす玉に詰め、封をする。

　それを春原が体育館二階席の手すりに取りつけるのを俺は下からじっと見上げていた。

「つーかさ」

「ん？　なんか言った？」

「これ、ひっかからないだろ……」

　俺の目の前には紐が垂れ下がっている。そこには、

『誰か引いて お願い おもしろいよ』

　と書かれたタグ。

「よーしっ、準備万端、明後日の入学式が楽しみだぜぇっ！　ふふ……ははは……はーっはっはっ！」

　春原の笑い声だけが館内にこだまし続けた。

　月曜。今日は入学式。

　朝のＨＲが終わると、すぐ体育館に移動。

　移動の時は、ひとりが目立って見えるからなんとなく好きじゃなくて……。

　かといって、自分から一緒に行こう、とも言い出せず。

　ああ今日の夕飯は揚げ物ならコロッケか、対するはなんだ、レンコンをすって揚げたの、どっちにしようかうんうんと必死に考えながら、体育館へ。

　しめやかな入学式の空気だけど、生徒側の席はざわついた感じもする。退屈なのか、ときどき口を押さえながらあくびをしてる一年生もいた。二年前にわたしが入学式に出たときは、緊張でそれどころじゃなかったんだけど。

　長い校長先生の話が終わって、眼鏡をかけた女生徒が一年生総代で挨拶をしていた。


誰か引いて
おもしろいよ
お願い

やがて、一年生が花道を通って退場していく。

父兄にまじってそっと拍手を送る。

入学式が終わる。

またひとりで戻る。

二階ギャラリー席、そこには未だ球形を留めるくす玉。

「誰も引っかからなかった……」

隣の席で春原が呆然としている。

「……あんなもんに引っかかるやつなんているかよ……そいつアホだぞ」

「くそぅ……あいつらは僕の頭脳を上回っていたってことかよ……」

「おまえがその一番底だからな」

「いや……待て、誰か立ち止まってるぞ」

春原の視線の先を追う。言葉通り、ひとりの女生徒がくす玉の真下に立っていた。

「一年か？」

「いや、さっき解散した三年じゃない？」

女生徒が正面に向けて手を伸ばした。

まさか引くのか……？

……引いた。

ぱかっとくす玉が割れ、紙吹雪が舞う。

俺の書いた垂れ幕と、そして……

　ごんっ！

　金だらい。

　女生徒はそれをまともに受け、その場に卒倒した。

「おい、岡崎……」

「ああ…………アホな子がいた……」

　目覚めた時、わたしはベッドに寝ていた。そばには、見覚えのあるクラスメイトの顔。クラスで前の席のふたりだった。

「ええと、古河さん……だっけ。大丈夫？」

「あっ、はい……ちょっと首が痛いですけど、大丈夫です……」

「誰かの悪戯いたずらだったんだって。金だらい。すぐ後ろにいたんだけど、なんかドリフみたいで笑っちゃった、ごめんね」

「あ、ぜんぜん気にしないです」

「古河さん、おもしろいよね。前もひとりで子犬みたいにぷるぷる首を振ってたりして」

　顔が紅潮していくのがわかる。

　でも、今は話さないと。難しい漢字の人がくれた、大事なきっかけなんだから。

　わたしは話し始める。

　くす玉から出てきた垂れ幕の言葉に背を押されて。

『この先の困難に負けずがんばれ ｂｙ 夜露死苦』



02
ワンピース

文：涼元悠一



　六月なかば、雨の土曜日。

　一時間ぶりに書店から出た時、雨は変わらずに降り続いていた。

　濡れた歩道を、ことみとふたりで歩く。

　買ったばかりの本でいっぱいの鞄は、俺が代わりに持っている。

「きっと、今日から梅雨入りなの」

　ことみはどこか嬉しそうに言う。

「梅雨を『つゆ』と呼ぶようになったのは、雨粒の露から来ているという説と、梅の実が熟して潰れる時期だからという説があるの」

「ふーん」

　得意げな解説に相づちを打ち、ことみの歩調に合わせる。

「五月雨さみだれ、霧雨、小こ糠ぬか雨あめ、氷雨ひさめ、時雨しぐれ、白はく雨う、驟しゅう雨う、雷雨、喜き雨う、篠突く雨、天気雨……」

　お気に入りの玩具のように言葉をならべながら、ことみは雨粒を斜めに仰ぐ。

「とってもたくさんの雨があるの」

　幼い形の髪飾りが揺れ、何となくいい感じだなと思う。

　いつも通りの、当たり前のふたり。

　俺はまだ、少し照れくさかった。

「あれれ？」

　ショーウィンドウを眺めていたことみが、不意に声をあげた。

　閉ざされたシャッターの店、『長らくのご愛顧ありがとうございました』の貼り紙。

「このお洋服屋さん、やめちゃったんだ」

　たしかここのショーウィンドウには、白くて子供っぽいワンピースが飾られていた気がする。

「この辺の商店街だって、ずっと同じってわけにはいかないだろうからな」

「……うん」

　俺の何気ない言葉に、ことみがそっと頷く。

　子供のような純粋さの中、時々浮かぶ大人びた表情。

　俺は思い出していた。

　五月の連休、最初のデート。

　ことみが着てきたのは、黒いワンピース。

　最初はただ、意外に大人っぽい趣味なんだな、としか思わなかった。

　今考えれば、あれは……。

「??」

　珍種を見つけた博物学者のような顔で、ことみがこっちを覗き込んでいた。



「朋也くん、考えごと？」

「まあ、そんなところだ」

「なにを考えてたの？」

「おまえって、休みの日はいつもあの服着てくるよな、って思ってさ」

「あの服って……あの黒いワンピース？」

「ああ」

　俺が頷くと、子供っぽい瞳をくるんと動かす。

「朋也くん、黒い服、きらい？」

「いや、そういうわけじゃないけどな……」

　最近のことみは、自分の気持ちを素直に表せるようになってきた。

　だから俺は、もっといろいろな姿のことみと一緒に歩きたい、そう考えてしまう。

　たとえば、真っ白な服を着たら、どんな感じになるだろうとか……。

「事情はわかったわ」

　振り向くと、そこに藤林姉妹がいた。

「……毎度毎度、最初からいたかのように会話に入ってくるのはやめろ、杏」

「こっちもさっき本屋にいたんだからね。気づかなかったあんたたちが悪い」

　もっともらしく答えつつ、長い髪をふわっとかきあげる杏。

「ええと……」

　ようやく親友ふたりの存在を認識したことみが、いつもの挨拶をはじめる。

「杏ちゃん、こんにちは」

「はいはい。雨の日までお熱いわね〜」

　この物言いが、乱暴でおせっかいな姉。

「椋ちゃん、こんにちは」

「はい……ことみちゃん、こんにちはです」

　妹のほうは、杏と双子だが内気で優しい。

　俺をそっとうかがって、『いつもすみません』と視線で伝えてくる。

「で、あんたいくら持ってるの？」

　そんな妹の気づかいを完全放置し、何かの密売人のように言い寄ってくる杏。

「いきなりなんだよ？」

「ここで売ってたみたいな服、プレゼントするんでしょ？　ことみに」

「なんでそんな話になるんだよ？」

「いいから見せなさいよ、ほらっ」

　放っておくと無理矢理強奪されそうなので、しぶしぶ財布を開き、中身を確認する。

「一六五〇円」

「……あんた、人生ナメてない？」

　速攻かつ理不尽なダメ出しを食らう。

「そんなんで彼女に服プレゼントしたいなんて、よっく言えるわねぇ……」

　ひと言たりとも言ってない。

「……ほっとけよ。だいたい、例のアレで金がないのはお互い様だろうが」

「その辺の事情はちょっとこっちに置いといて……」

　俺に合わせて声をひそめてから、意味ありげに笑う。

「要するに、布地が少なければ安く済むってわけよね？」

「ほらことみ、予算一六五〇円以内で好きなの選んでいいわよぉ♪」

　高らかに杏が言う。

　商店街でいちばん大きな洋品店の一角。

「杏、おまえここ……」

　たしかにそこは商品で溢れていた。

　洒落しゃれたブティックに比べればはるかに手頃な値段で、種類もたしかに豊富だった。

　大勢の女性客で賑わっていた。

　というか、男の客は俺ひとりだけだった。

　壁のポスターには『婦人下着売場　初夏の大セール中』と書いてあった。

「ほらほら、彼女と一緒に選んで選んでっ」

「ってできるかあああああっっ！！！」

「またまた照れちゃって〜」

　完全に杏の独壇場だった。

「えと……岡崎くん、すみません」

　姉の凶状を見かね、藤林が耳打ちしてくる。

「今日はもともと、お姉ちゃんとここで買い物するつもりだったから……」

「そんなことだろうと思ったけどな」

　深く深くため息をつく俺。

　そしてことみはといえば。

　未知の惑星に到達した探査ロボットのような動作で、辺りをきょろきょろ見回している。

「？」

　明らかに売れ残りであろう品揃えのワゴンに、わけもわからず引

き寄せられていく。

「??」

『ウルトラＴバック』とタグに書かれた怪しげな商品を、恐る恐るつまむ。

「？？？」

　目の前でぺろんと広げてみる。

「………………ただのひも？」

「いや、途方に暮れた顔で、俺に訊かれても……」

　仕方なく、俺は藤林に耳打ちした。

「悪いけど、選ぶの手伝ってやってくれるか？　あいつら任せだとロクなことにならない」

「えと……わかりました」

　ぺこっとお辞儀して、売場のほうに行った。

　壁際の椅子に座り、待つことにする。

　他の客の視線が痛くて、目を上げることができない。

　下着の森の向こうから、時々にぎやかな声が聞こえてくる。

「セットだと予算がちょっときびしいわね。でもブラだけっていうのはアレだから……」

「ええと……」

「……これなんかかわいいです、この黒猫のバックプリント」

「……おしりがとってもくろねこなの」

「あ、これ安い。谷間メイクでショーツとセット……っと、サイズがダメか。あんた見かけによらないもんねぇ」

「ええと……見かけによらないの」

「このフリルづかい、すごくかわいいと思います……それか、こっちの水玉とか……」

「とってもフリルで水玉なの」

「適当な感想でごまかそうとしてる子は、さっきの紐みたいなやつ強制着用だからね」

「………………いじめっ子、とってもいじめっ子」

いきなり降りかかった下着探索クエストに、早くもいっぱいいっぱいなことみ。

まったくいつもの調子だった。

壮絶な場違いを感じながらも、何だかんだで聞き耳を立て続ける俺。

「……ことみちゃん、いつもはどこで買ってるんですか？」

「近所に行きつけの下着屋さんがあるの。そこのお姉さんに、ずっと選んでもらって……」

「って、いきなりランジェリーショップで、しかも店員任せでフィッティング!?」

「ええと……」

「それであんなオトナっぽいのつけてたんだ」

「えと、あの……ことみちゃん、おとなっぽいんですか？」

「そりゃもう、えろえろよ〜」

「………………」

椅子から立ち上がり、無意味に屈伸運動する俺。

三人とも試着室のほうに行ったのか、そのうち声は聞こえなくなってしまった。



　そうなると余計、耳を澄ましてしまう。

『ほら、子供じゃないんだから、早く脱ぐ脱ぐっ』

『……でもでも、とっても恥ずかしいの』

『お姉ちゃんお姉ちゃん、声が外まで漏れてるから……』

『いいから椋も入ってきてよ、脱がせるの手伝って』

『でも、三人で試着室に入るのは、ちょっと……』

『ふたりで確かめたほうがいいでしょ？　早く』

『もう……やっぱりこうなるんだから』

『ほらことみ暴れないっ、今ホック外すからね〜』

……ぱちん。

たゆんっ。

『……じかに見るとやっぱりスゴいわねぇ』

『恥ずかしいの、恥ずかしいの……』

『腕で隠さない。ちゃんと大きさ見ないとダメなんだから』

『お姉ちゃんが持ってきたのだと、ちょっと小さすぎるみたい』

『……どうせあたしのがいちばんちっちゃいわよ』

『またその話でいじけるし……』

『いいわよいいわよ。こうなったら乳牛みたいにおっきくしちゃうからぁ』

がばっ。

『!?!?!?！』

ふにゅふにゅふにゅふにゅ。

『〜〜〜〜!!　〜〜〜〜〜!!　〜〜〜〜〜〜！！！！』

「……いや、さすがに妄想入りすぎだから」

心の耳で聞いた試着室内実況想像に、自分でツッコミを入れる。

とにかく、ここにいるのは色々な意味でまずい。非常にまずい。

「場所を変えよう……」

　つぶやいて、心持ち前屈みのまま振り向く。

「………………」

　思いっきりことみがいた。

「ええと……」

　固まっている俺を見たまま、何ごとか考える。

「見ちゃいやあん、えっち」

　ほとんど棒読みで、体をくねっとさせた。

「……杏にそう言えって言われたんだな？」

　こくり。

　素直に頷くことみ。その胸に、ビニール袋に入った商品を抱え持っていた。

「で、それでいいのか？」

　俺はもう破れかぶれで訊く。

「ええと……」

　頬を染めながら、俺にそっと差し出してきたものは……。

「っておいこれ……」

　思わず絶句した。

　目が痛いほどに真っ赤な下着だった。

「丹田のツボを赤い布で覆うことにより、身体のエネルギー効率を高めるの」

「いや、自慢げに解説してもらっても……」

「腰痛、冷え性、更年期障害に効果抜群、還暦や健康長寿の贈り物に最適なの」

「つーかおまえ、もっともらしい宣伝文句にその場で感化されまくっただけだろ？」

「かわいい巣鴨の刺繍つきなの」

「いや、何がどうかわいいんだかさっぱりわからないし」

「とってもとっても高機能なの」

「………………」

　かわいい下着を前に照れまくる初々しいふたり、なんて図を一瞬でも思い描いた俺が馬鹿だった。とっても大馬鹿野郎だった。

「ことみちゃん、それはあの……わたしたちにはまだちょっと早い気が……」

「そうね、いくらなんでも過激すぎるわ」

　藤林姉妹も来て、助け船を出してくれた。

　ことみは少しだけ残念そうだったが、過激な健康長寿下着を元の場所に戻した。

「ほらことみ、選び直しましょ」

「……いやそれ以前に、下着を買うってとこから考え直してくれ、頼むから」

「そうねぇ……」

　わざとらしく考え込む杏。『今日はもう充分楽しんだ』と顔に書いてあった。

「ことみは何がいい？　気をつかわなくていいから、はっきり言うこと」

「ええとね、私……」

　俺たち三人に見守られ、しばらくの間考える。

「あの黒いワンピース以外、似合わないかもしれないから」



「そんなことないわよ」

「そんなことないです」

　藤林姉妹が同時に言い切った。

　絶妙なハモリっぷりに、さすが双子と妙な感動をしてしまう。

　困ったような、恥ずかしいような顔で、ことみは親友ふたりのことを見た。

　それから、俺の方をそっとうかがって……。

「あのお店にあったみたいな、白いワンピースが着てみたいの」

　少し小声で、でもはっきりとそう言った。

「よしよし、いい子いい子〜」

　若すぎる母親みたいな顔をして、杏がことみの頭をぐしぐしと撫でる。

「でも、あの服は店ごとなくなっちまってるしなあ……」

「おまけに予算も最低レベルだしねぇ」

「ほっとけ」

　俺と杏が考え込んでいると、藤林が切り出した。

「それなら……えと、ことみちゃんがよければ、なんですけど」

　夕方の商店街を、四人で歩いていた。

　雨は変わらずに降り続いている。

　ことみは胸に、新しい荷物を抱えている。

　さっきの洋品店の紙袋。

　中身は真っ白な木綿の生地、ミシン糸、それに初心者用のワンピースの型紙。

「材料だけ買えば、そりゃ安いわよねえ……」

　感心したように、杏が言う。

「それでも、予算ギリギリだったけどな」

「ちょうど安売りしてて、よかったです」

　微笑みながら、藤林が答える。

「お洋服を縫うのは、前からやってみたかったの」

　幸せそうに、ことみも笑う。

「みんな、とってもありがとう」

　新しいことに向かう好奇心で、瞳が輝いている。だから俺も嬉しくなる。

「でも、まずは型紙通りにつくること。いきなりヒラヒラなのに挑戦したら、失敗するのが見えてるから」

「うん。まずは型紙通りなの」

　杏に釘をさされ、素直に頷く。

「まあそれでも、前途多難だけどねぇ……」

　と、藤林が声を落として俺に訊いてきた。

「えと……ことみちゃんの家のミシン、今も動くでしょうか？」

「俺が今から見に行ってみるよ。つっても、油注すぐらいしかできないけどな」

「いえ……岡崎くんなら、きっと直せると思います」

　藤林の言葉に、俺は何となく照れてしまう。

「そうと決まったら、お茶菓子買ってかないとね」

「……やっぱり、おまえらも来るわけな」

「当然でしょ？　ねぇ、ことみ」

「うん。お茶は私が淹れるの」

　歩道が途切れた。

　めいめいが傘を広げ、雨の中に踏み出す。

　俺はことみの服が完成した時のことを想像していた。

　例えばそれは、よく晴れた夏の日だ。

　真っ白なワンピースに身を包んだことみが、みんなが来るのを待っている……。



03 男友達

文：魁



　男子としゃべることなんて、普通だった。

　一年の時も仲のいい男子はいた。

　呼び方もお互い下の名前で呼び合っていた。

　でも、どこか変な勘違いをされていたみたいだった。

　気があると思われていたらしい。

　あたしはそんな気なんてなかったのに。

　だから、いきなり「付き合おうか」と言われた時は驚いた。

　返事は当然「ＮＯ」。

　そしたら次の日から距離ができた。

　男と女の友情は成り立たない……そう思った。

　その時からかもしれない……。

　男子に対しては名字で名前を呼ぶようになったのは。

「あのさ、岡崎。あたしのことは〝杏〟でいいわよ。名字で呼ばれると紛らわしいし」

「なんだ紛らわしいって？」

「あたし、双子の妹がいるの」

「え?!　おまえみたいなのがふたりもいるのか?!」

　岡崎朋也。

　二年に上がって、同じクラスになった、学校でも有名な不良らしい。

　といっても、茶髪でタバコ吸って喧嘩して、といった絵に描いたような不良じゃなく……。

　進学校と呼ばれるこの学校だから、そう言われてるだけのような気がする。

「どういう意味よ……」

「あ、いや別に。物騒だなと思っただけだ」

「全然フォローになってないでしょ！」

「まぁ、フォローのつもりもなかったけどな」

　……悪く言えば口が悪いだけ、よく言えば裏表のない態度。

「殴っていい？」

「殴らないでほしい」

　気兼ねなく話のできる奴だとすぐにわかった。

　初めはただのクラスメイト。

　次は面倒をかける困ったクラスメイト。

　いつのまにか友達。

　そして――……。

「……まったく……こんな硬いとこで、よくもまぁ熟睡できるものねぇ……」

　人気のない中庭。石垣の上で岡崎は横になっている。

　先生に言われて捜し回って、ようやく見つけたのがここだった。

　あたしが近寄っても起きる気配はない。

　顔をのぞき込んでみる。

「………」



　まぁ……どっちかというと、カッコイイほうよね。

　まつげとか長いし、鼻筋も通ってるし、唇の形とかも……。

　って、なに見とれてるのよっ！　あたしっ！

　ガササ……

　突然の物音にあわてて振り返る。

　そこにいたのは金髪の男子生徒。岡崎といつも一緒にいるウチのクラスのもうひとりの問題児。

「あ……あの……僕、邪魔しちゃったかな？」

「なっ……」

　その言葉に顔が赤くなっていく。

「ば、馬鹿なこと言ってんじゃないわよっ！」

　最悪っ！　見られてたっ！

　確か殴れば記憶ってとんだわよね?!

「ん……ん？」

　と、ここであたしの声に岡崎が目を覚ました。

「あん……？　藤林に……春原？」

「おい岡崎、おまえ今、藤林杏に襲われかけてたぞ」

「……は？」

　眠そうな目でなにを言ってるんだという顔をする。

「な、なな！　なに言ってんのよ！」

「え？　違うの？」

「ち、違うわよっ！　先生に言われて捜してただけよ！」

「ふーん」

　春原が意味ありげな顔であたしを見た。

　なにか勘ぐられている。

　このままここにいたんじゃ……あまりよくない方向にしか話が流れない。

「ほ、ほら！　職員室いくわよ！」

　ぐいーっ。

　赤くなった顔を見られないように、岡崎の手を引っ張って歩き出す。

「あ、おい！　ちょ……引っ張るなって……こら藤林っ！」

　つないだ手が熱くて……胸がドキドキしていた。

　……いつからだろう、こんな気持ちになったのは。

　気がつけば自然とあいつの姿を目で追っていた。

　男と女の友情は成り立たない……。

　その理由が、なんとなくわかった気がした。

「はぁ〜……」

　湯船につかりながら伸びをする。

　今日も岡崎と春原に振り回されて疲れた。

　あのふたりってまるっきり子供よねぇ……。

「保母さんとかってこんなに疲れるものなのかな〜……」

「え？　なにか言った？」

　髪を洗っていた椋が、こっちを振り向く。

「んー、面倒見るって大変だなぁーと思ってね」

「なにかあったの？」

「クラスの子でね、面倒ばっかかけるのがいてさ、毎日毎日疲れるのよ」

「ふーん……」

　椋は不思議そうな顔をした後、洗面器にためていたお湯を頭からかぶって泡を流す。

「でもお姉ちゃん、なんだか楽しそう」

「そお？」

「うん。全然いやな顔してないよ」

　思ってもいなかったことを言われて少し驚いた。

　つい顔に手をやってしまう。

「……ん、まぁ……いやじゃあない、かな」

　とりあえず、退屈な毎日を過ごすよりも断然楽しい。

　二年に上がってから、他のクラスの子達は一年の頃に比べて勉強にカリカリし始めているし。

　そう言う意味では、あいつらと一緒にいるほうが学生らしい生活を送れてる気がする。

「えっと、岡崎くん……だった？」

「え？　なにが？」

「お姉ちゃんが気になってる男の子」

「な、なな、なに言ってんのよっ！　別にあんな奴なんとも思って

ないわよ！」

「え？　そ、そうなの？　最近はいつもその人のことばっかり言ってるから」

「単に面倒かけるだけのえっと……その……も、問題児よっ！」

「そうなんだ。でもめずらしいから」

「なにがよ」

「お姉ちゃん、これまで男の子の話はあまりしなかったから」

「別に……話すような男がいなかっただけよ」

「ふーん。あ、そうだ。あとで占いでもしてみようか？」

「……どんな？」



「相性占い」

「お願いだからやめて……」

　この子の占いはいろんな意味で怖いし。

　それがいい結果であれ、悪い結果であれ。

　椋は占いを断られてがっかりしたように肩を落とすと、スポンジにボディーソープを付け、身体を洗い始める。

「……ところでさぁ……」

「はい？」

　あたしは自分の胸をちらりと見てから言う。

「あんた……また胸大きくなったんじゃない……？」

「そ、そそ、そんなことないよぉ」

朝、椋が笑顔であたしのベッドの横にやってきた。

「……なに〜？　もう起きなきゃいけない時間〜……？」

霞む目で時計を見る。

あと一〇分は寝ていられるはずだけど……。

「えっとね、お姉ちゃんの今日の運勢占ってみたよ」

「ふ〜ん…………えっ!?」

霞がかっていた頭が弾けるように覚醒した。

「ちょっ……！　え？　う、占っちゃったの?!」

「ダメだった……？」

「あ……う〜ん……ダメっていうか……」

どういう結果が出たのか聞くのが怖い……。

「えっとね、スペードの６とハートの８とスペードの９が出たの。６と９の丸がくっつくことで、８が生まれるっていう意味で……。　つまり、えっとね、素敵な人に告白されるみたいだよ」

「……こ、告白……」

驚くあたしを見ながら、椋はニコニコと笑顔を返してくる。

この占い……どうとるべきなのかしら。

告白自体されない、素敵じゃない人に告白される……。

少なくとも……うれしい展開にはならない……わね。

「あ、ありがとね」

頬が引きつっているのがわかった。

休み時間……。

自分の席に座りながら、まったく落ち着かない……。

「あの、藤林さん？」

「は、はひ？」

クラスの男子の声にビクリと肩を震わせて振り返る。

そんなあたしに話しかけてきた子が、一瞬後ずさる。

「あ、えっと、このプリントの提出って今日までだったよね」

「あ、ああ、うん」

クラスの男子からプリントを預かる。

ドキドキする……。

椋の占いを信じているわけじゃないけど。

むしろ信じてるからこそ、周囲が気になって仕方がない。

当たらない占いがここまで怖いなんて……。

―素敵な人に告白される―

ちらりと、とある机を見る。

岡崎は……まだ来ていない。

遅刻はいつものことだけど……。

って、なに意識してんのよあたしっ！

あ、あの子の占いは当たらないんだって！

「うぃーっす」

　ガラリと教室のドアが開く。

　遅刻なのに全く悪びれた様子もなく春原が登校してきた。

　寝癖そのままでネクタイ曲がって……人前で大きなあくびして……。

　あー……こいつに告白なんてされたら……最悪ねぇ……。

「ん？　なに？　僕の顔になんかついてる？」

「鼻と目と口がついてるわよ」

「え？　おかしいなちゃんと顔洗ってきたはずなんだけどな」

　そう言って顔を擦り始める。

　こいつって……本当にバカなのね……。

　春原は自分の席に行くと、辺りをキョロキョロと見回す。

　と、なにかに気づいたように手を叩きこっちに来た。

「あ、そうそう、委員長」

「なに？」

「岡崎まだ来てないでしょ？」

「え？　あ、う、うん、まだだけど？」

　あたしの言葉に春原はニヤリと笑うと、周りに聞こえないよう小さな声でささやいてきた。

「あいつ、中庭で待ってるから」

「……え？」

「それじゃ、確かに伝えたよ」

　春原はそれだけ言って自分の席に向かった。

　しばらくボーっとなっていた。

　頭の中を整理する。

　岡崎ままだ教室に来ていない……。

　中庭で待っている……。

　そのことを春原が伝えてきた……。

　つまり……。

「あれ？　藤林さんどこ行くの？」

「え、えっと、頭痛いからちょっとトイレ」

　ゆっくりと、普通に……あくまで自然なスピードで歩いて教室を出る。

　次の瞬間、廊下を走っていた。

　岡崎が……中庭であたしを待ってる？

　確か椋の占いは……素敵な人から告白される……。

　でもあの子の占いは当たらない。

　当たった試しはない。

　けど……もし……。

　千回に一回……、ううん、一万回に一回くらいは当たるかもしれないわよね。

　もしかしたら、その一回が今回って可能性も……。

　中庭の手前あたりから走るのをやめて、呼吸を整える。

　走ってきたなんてバレたら、恥ずかしいから。

　呼吸は落ち着いてきたのに、心臓のドキドキだけは治まってくれ

ない。

　べ、別に岡崎が待ってるからって……その……告白とかそういうのじゃないかもしれないのに。

　でも……わざわざ人気のないとこで待つなんて……それ以外考えられないわよね……。

　ど、どうしよ……朝、歯はちゃんと磨いたけど、もう時間経っちゃってる。

　平気かな……大丈夫かな……って！　いきなりそんなことならないって！

　……たぶん……。

　それにしても……。

「……どこにいんのかしら……？」

　中庭を見回しても、岡崎どころか誰の姿もない。

　トイレにでも行っちゃったのかしら……。

　それとも……恥ずかしくなって、隠れてる……？

　ちょうどいいから、今のウチにこのドキドキしてる心臓を落ち着かせよう。

　石垣の上に座ってしばらくぼーっとする。

　意味もなく……ううん、十分意味のある、深呼吸もしてみる。

　時間だけが刻一刻と過ぎていった。

　チャイムが……鳴った。

　授業が終わるチャイムだった。

　つまり……、一時間、ひとりで中庭に待ちぼうけ……。

　いろいろな可能性を考えてみたけど……コレはたぶん……。

　あのバカにハメられたという可能性が一番高い。

「ふ……ふふ……ふふふ……」

　石垣の角を力一杯握る。

「さてと……まずは目を突いてから喉でも潰して舌を引っこ抜いてやろうかしら……」

　ゆらりと体を揺らしながら腰を上げると、拳を握りしめてあたしは教室へ向かった。

　と、その途中の廊下。

「ん？　藤林」

　岡崎がいた。

　顔が一気に赤くなったのがわかった。

「え……あ……えっと……あんた……今来たの…？」

　岡崎が手にしている鞄を見ながら訊く。

「ああ、そうだけど……おまえは？　保健室帰りか？」

「え？　な、なんで……？」

「顔、赤いから。それに教室そっちじゃないだろ」

「あ……赤くなんかないわよっ！」

　怒りと恥ずかしさと……いろんな感情が入り交じって声が荒くなる。

「そうか？　まぁあんま無理するなよ」

「………」

　ずるい……。

こいつは……岡崎は、ぶっきらぼうに言い放つくせに、優しい言葉を混ぜてくる。



「それよりも、今からあんたのツレが大変になるわよ」

「なんだそれ？」

　首をかしげる岡崎と一緒に教室に向かう。

　ドアを開けるなり、金髪バカは驚いた顔でこっちを見た。

　まさかふたりで帰ってくるなんて思ってもいなかったんだと思う。

　あたしはニッコリと満面の笑みを浮かべながら、自分の席まで行くと、鞄の中からさっきの授業で使うはずだった英和辞書を手にした。

　あぁ、これっていい感じの重さね。

　次の瞬間、春原は白目を向いて床に倒れていた。

「おまえ、アホだろ？」

　床に正座させている春原に向かって岡崎があきれた顔で言った。

「はい、僕アホです」

「つーか、藤林。おまえもなんで春原の言うことを素直に信じんだよ」

「う……うるさいわね……委員長として出向いただけよ」

「で、一時間も俺を捜してたと」

「え、えっと……そ、そう！　委員長として……その……授業に出席させなきゃいけないでしょ」



「それでおまえがさぼってたら本末転倒だろ」

「っていうか、傍目にはふたり仲よくサボリって感じだね」

『あァ？』

「ひぃっ！」

　軽口をたたいた春原に、あたしと岡崎の睨みがハモる。

　いつもの調子の、いつもの関係。

　中庭にいた時の緊張はもうない。

　どこかガッカリしている半面、ホッとしている自分がいることに気づいた。

そう、少なくとも、今のこの気兼ねない関係を続けることができる。

「あ、ところでさ、岡崎……ずっと気になってたんだけど……」

「ん？」

「あんたが呼んでる〝すのはら〟って誰？」

「本人を前にそれって絶対イジメですよねぇ！」

「……え？　あんた〝はるはら〟じゃないの？」

「ちげーよっ！」

「ああ、〝すのはら〟ってのはあだ名なんだ」

「あんたも当然のように嘘を言わないでくれますかっ！」

「なんか面倒な名前だから下の名前で呼ぶことにするわね……って下の名前なに？」

「なにげに失礼なこと言ってますよねぇ？」

「あ、そうだ、今からあんたも〝朋也〟って呼ぶから。そのほうが楽でしょ」

「はぁ、まあ好きに呼んでくれよ」

「うん、朋也。あ、前にも言ったけど、あたしは〝杏〟でいいからね」

とりあえず、小さくだけど一歩前進した。

今のところはこれでいい。

友達のままでコイツのことを知っていこう。

ゆっくりでいいから、知っていこう。

無理して先に進んでしまえば、大切ななにかを見過ごしてしまうかもしれない。

後悔だけはしないように……。

進むより戻ることのほうが難しいんだから。

04 あのころの私

文：麻枝准



「なにか話をしてくれないか」

　午後の喫茶店でランチ。

　食後のコーヒーを飲みながら、そう彼が切り出す。

　彼とは、岡崎朋也という同級生……いや、先輩だったか。

　まあ、なんでもいい。私が付き合ってる男だ。

「どんな話がいい」

「智代の昔の話がいい」

「それは……いじめか？」

　朋也は不服のため息を漏らす。

「そんなわけないだろう。俺はおまえのことだったらなんでも知りたい。教えてほしいんだ。おまえの全部が好きになりたいんだ。おまえが生きてきた、俺の知らない過去も、全部。未来はいいんだ。これからふたりで作っていくんだから」

　こういう照れることを堂々と言う奴なんだ。

　店員がいないのを確認してから、隠れるようにキスをした。

「なら話してやってもいい。でも、引くな。これは約束だ」

「今更引かないよ」

「うん、じゃあ、話してやる。あの頃は毎日、喧嘩に明け暮れていた」

　私はテーブルの隅で、三角の山になった角砂糖をスプーンで指す。

「ちょうどこの角砂糖のようにだ」

「なにが？」

「不良たちの屍しかばねを積み上げていった」

「………」

「今、引いただろ」

「引いてないっ、引いてない」

「本当か？」

「本当」

　真剣な眼差しが私に向く。テーブルの上では、私の手が彼の手で包まれていた。

「仕方のないやつだな……これは、私が一度だけ、負けを覚悟した時の話だ」

　だむっ！

　鈍い音がして、またひとつ屍が積み上がる。



　他人のことなんて考えない奴ら。

　自分のことしか考えない奴ら。

　自己主張のみで生きる奴ら。

　そんな奴らの骸むくろだ。

「うざい……」

　振り返る……その先。

　尖った月の真下、見慣れない格好をした同じ歳ぐらいの若い女性が立っていた。

　月の形と同じ眼差しで私を射抜いていた。

「あなたが、この町で噂の、月夜に現るという狩かり人びとですか」

「仇討ちか？　やめておけ。おまえのような奴も何度も見てきた。すべて返り討ちだ」

　私は一蹴する。したつもりだった。

　けど、彼女の眼光は変わらない。

「仇討ちではありません。私は悪が許せないだけです。特にあなたのような、絶大な力を誇る悪が」

「相手は選んでいるつもりだがな」

「そんなことは関係ありません。力を失ってください」

　彼女が駆けた。間合いが詰まる。速い、一瞬だ。

　けど直線的で、避けるのは容易たやすい。体を捻ひねる。

　ざっ、と彼女が通り過ぎた後。

　肩に熱さを覚えていた。それはみるみる広がっていく。

　血が流れているんだ。

　彼女は月明かりで手に持つ刃を鈍く光らせてみせた。

「汚いやり方で申し訳ないですが、これであなたに勝ち目はありません」

　腕が動かない。出血は止まらない。彼女の言うとおりかもしれなかった。

「悪はいつか、正義に屈するのです。正しさのほうが強いのです

よ。これは摂理です。覚えておいてください」

　言うが早いか、白い煌きらめきが右上から降ってくる。

　体を反転させる。元いた場所に月の光が。

「……今のを避よけるのですか」

「見えれば避けられる」

「そうですか。では……」

　そう呟くと、一足飛びに私の間合いまで飛び込んできた。

　動く右腕から抜かれる刀。

　右下……速い！

　とっさに刃の方向へ身を投げ出し、転がるように避けた。

　続けざま打ち下ろしの攻撃がくる。

　刃をかいくぐり、そのまま遠心力を利用して両足で蹴りを放った。

　が、彼女はいなかった。体が目の前から消えた──ように見えた。



　ぞく、と背中に冷たいものが走り、視界が一瞬だけ暗くなる……。

　月明かりが遮さえぎられたのがわかると同時に、私は体をひねり、蹴りを横へ変化させた。

　がつ！

　手応え。

　その勢いで後ろに蜻蛉とんぼを切って、間合いを取る。

　どうやら蹴りは彼女の腕あたりに当たったらしい。

　刃先が逸それ、スカートの裾が少しだけ切り取られていた。

「空中で体勢を変えるとは、冗談のような体術ですね……」

「できないことはない」

　ただもう一度やれ、と言われてできる自信はなかったが。

　このままではどうすることもできない。

　一度喰らってしまえば負けてしまうのに、こちらは攻撃の糸口さえもつかめていない。

　せめて一回だけでも、相手の刃を跳ね返せれば……。

　考える暇もなく、次なる刃が降ってくる。

　刃先と動きは辛うじて見えている。腕さえ使えれば、刃の横を叩き、跳ね返せるかも知れないが、斬られた肩口の傷で右腕は動こうともしない。

　仰のけ反ぞるようにして避け、大きく後ろへ一歩飛んだ。

　足首に違和感。気を失っていたはずの不良が足首を摑み、体勢が崩れてしまった。

「不運ですね、覚悟を」

　躊ちゅう躇ちょもなく刃を振りかぶる。

……避けようがない。そのとき、

「これを使えぇぇ────っ！」

　声と共に、視界の端、何かが高速回転をして飛んできた。

　私は藁わらにもすがる思いでそれに手を伸ばす……

「すげー……漫画みたいじゃん」

　朋也が驚嘆の息を漏らす。

「飛んできたのはなに？　剣？」

「そんな都合のいい話があるか。鉄パイプだ」

「それでも十分武器になるな。なるほど、それをパシィッ！　と受け取って、反撃に転じたわけだ」

「いや、それが違うんだ。まさしく漫画のようだった」

　手を伸ばすが、届かない。その代わり……。

　がこ───んっ！　と鈍い音を立て、鉄パイプは相手の側頭部を痛打していた。

「あ、わりー」

　相手は膝から崩れ落ち、しばらく動かなくなる。その隙に、私は不良の手をふりほどく。

「水、差しちまったかな」

　場にそぐわないとぼけた声。

　だらしない格好をした男は、気を失い倒れている不良どもを覗き込んでは、頬を叩いたり、呼びかけたりしていた。

「おーい、蛭子ー。起きてたら返事しろー。死んでても返事し

ろー」

「誰だ、おまえは」

　いささか呆れながら訊いてみる。

「こいつらのダチ。ったくしょーがねぇな、女ひとりにこのザマとは」

　男は振り返りもせずに言った。態度を崩そうとしない。

「うわはははははっ、おまえ、顔に足型ついてっぞ。ちくしょう、カメラ持ってくりゃよかった。面白すぎる」

　どうも勝手が違うように思えた。

　目が覚めだした不良どもは、男の顔を見るとばつが悪そうに肩をすくめて苦笑を浮かべた。

「おらおら、おまえらさっさと退け。ケンカの邪魔をすんじゃない」

　男は嬉しそうに、土手の真ん中に座りこんだ。ご丁寧にも手には缶コーヒーがある。

「見世物じゃないぞ」

「そう言うなよ。可愛い女の子同士が真剣片手に戦ってんだぜ？見なきゃ損だろ」

　そう言って、自分で高笑いしていた。不思議と気は悪くない。

「その邪魔をしたのは誰ですかっ！」

　彼女がようやく立ち上がり、そう怒り出した。気持ちはよくわかる。



「あーあー、わかったわかった。用事、済んだから帰るよ」

「用事ってなんだ？」

「あん？　こいつらを止めに。つーか、迎えにだな。女の子ひとりによってたかってって聞いたからさ。俺、そういうの趣味じゃないんだ。ま、揃いも揃ってブチのめされてるとは思わなかったけどさ」

　笑いながら見渡すと、不良どもはうなだれてしまった。

「気に障さわったら次もするぞ」

「ああ、いつでもやってくれ。貧弱なこいつらが悪いからな」

「貧弱ってなんだよっ」

「カズさん、そりゃないっすよっ」

　口々に不満が出る。

「はぁ？　女ひとりに負けて、貧弱じゃねぇって？」

　男が凄むと、不平はさっと止まった。

「そういうことだ。あと、悪かったな」

「何がだ。謝られるようなことはしてないぞ」

「迷惑かけちまったみたいだしよ。ま、気が向いたらこいつらの話も聞いてやってくれ。そんなに悪いやつらじゃねえからさ」

「そうして男は立ち去った」

「何者だったんだよ、そいつ……」

「さあ、今でもよくわからないが」

　もう一度会えればいいと思っていたが、未だそれは叶っていない。

「……で、戦いは終わったのか？」

　朋也は持っていたグラスを置き、私の方を向いて訊いた。

「いや、彼女は軽く脳しんとうを起こしていただけだ。その騒ぎの間に回復して、また向かってきたんだ」

　何度避けたか、何度やられたと思ったかわからない。

　喉が空気を求めてあえいでいた。緊張で口の中がからからに乾いている。

　……負ける。

　心の隅でそう囁く自分がいる。

　場違いなほど心は平静を保っている。ただ、少しずつ、少しずつ諦めが削っていくだけ。

　これが敗北なのだろうか。このまま心が削られ続けると負けるのだろうか。

　ふっと、気が抜けた。ような気がする。

　斬られた右腕が鈍く痛み、熱さすら感じられた。

　立ち止まり、振り返る。

　彼女は月明かりを一身に浴びるようにいた。当然のように。

　刀を振りかぶり、軽やかな足取りで向かってきていた。

　さっと、風が吹いた。

　気合が、風を、蹴散らした。

　最後の力で、私は抗い、回り込んだ。

高く澄んだ、金属の音。

彼女の肩に桜の花びらが舞い落ちる。

桜の木だった。

躱かわした先に、桜の幹があり、刀は食い込んで離れなかった。

がきっ。

膝で刀身の根元を叩き折る。

「悪に屈した……正しさが……」

折れた刀を落とし、敗者は呆然とした表情で言う。

「善も悪も超越したところに強さはあるというのでしょうか……」

「さぁ……私のほうが強かった、それだけじゃないのか？」

「そんなはずはありません……奇襲にも成功し……その後も一方的に攻めて……私のほうが強かったはず……」

「じゃあ、私が悪じゃないんだ」

にっこりとした顔で言ってやる。

「あれだけのことをしておいて、悪じゃないわけありませんっ」

間髪入れずにつっこみ。なかなか楽しい奴だ。

「最後にひとつだけ聞かせてくれませんか……」

立ち去ろうとしていた私に訊く。

「あなたが求めているもの……それはなんなのですか。支配ですか、さらなる強さですか、それとも乾きを癒しているだけですか」

「そんなのわからない」

私は背中を向けたまま答える。

「ただ今じゃない場所……そこだけだ」

「つまりそれは……未来ですね」

　彼女が要約する。

　そう言われて初めて気づく。

　私が求めているものは未来なんだと。

　今とは違う、未来へ。

「真剣振り回す奴相手に素手で勝つって……どんなだよ……」

「引いてるじゃないかっ」

「いや、引いてないっ、引いてない」

「本当か？」

「本当」

　真剣な眼差しが私に向く。私の手を握る彼の手にぐっと力がこもる。

「仕方のないやつだな……」

　店先で、数人の客が待っていた。まわりを見回すと満席だった。

　朋也がそれに気づいて、さっと伝票を取る。

「そろそろでよう」

「うん」

　鞄を持って立ち上がる。

　会計は朋也に任せる。おごられる、というのが女の子らしいからだ。

　一方的におごられるのは不公平な気がしたけど、休みの日は朋也

の昼食を作ってやったりしているので、まあおあいこだ。

学校に戻る。

校門をくぐるとき、朋也が怪訝な顔をした。

「どうした？」

「中でも腕組んだままなのか？」

「いいじゃないか。全校公認だぞ」

「まあいいんだけどさ……いつから俺はそんな青春キャラに……」

腕を組んだまま歩いていく。

体育館の前に制服姿の生徒が密集していた。

「おい、なにごとだよ」

朋也は足を止め、近くにいた男子生徒を捕まえて訊く。

「去年のインハイ優勝校の生徒がウチの剣道部に交流試合に来てるんだってさ。ウチのあの弱小部にだよ？」

「なんだ、つまんね……いこう智代」

朋也はぷいと顔を背けて、校舎に向かって歩き出す。

私は引っ張られる格好で、ついていく。

こういうのもなんだか女の子らしくて嬉しい。

私を引っ張って歩けるのは、朋也、おまえだけだ。

それは言わずにおく。

ただ抑えきれず頬が緩んでしまう。

きっと馬鹿みたいに幸せそうな顔をしてるんだろうな。

　他校の制服を着た女性とすれ違う。

「ふふふ」

　笑い声。

「そんな未来だったのですか」

　立ち止まることもできず、朋也に引っ張られていく。

　知り合いだったのだろうか。

　まあ、誰だっていい。行こう。

　今は朋也と過ごす時間がなにより大切で、そして私にとっての幸せなのだから。



05

公子の日記

文：麻枝准



〈３月25日〉

　今日からは自分の日記とは別に、私の妹、ふぅちゃんの観察日記をつけることにしました。

　情けないながら姉である私にも、あの子のことがよくわからなくなるときがあるのです。

「藤子不二雄のキャラクターでしりとりです、うなぎいぬ！」

　そう言われた時、人はどう対処すればいいのでしょうか。

　藤子不二雄作品で『ぬ』から始まるキャラクターを必死に探すべきでしょうか。

　それとも、優しく、「ふぅちゃん、それは赤塚不二夫だよね」と諭せばよいのでしょうか。

　そもそも藤子不二雄であれ、赤塚不二夫であれ、作者を限定したしりとりでは到底ゲームが成り立つとは思えません。（水木しげるも可であれば「ぬりかべ」を思いつきましたが）。

　あるいは、そこにあるメッセージを私がくみ取れていないだけでしょうか。

　もし先に何かがあったとして、この日記を振り返ることで、その意図がわかるようになれば。

　そう願って書きます。

〈３月26日〉

　ふぅちゃんがヘンな技を覚えました。「必殺……甘噛み！」といって、耳を噛んでくるのです。

　その後、こう続けます。

「これでおねぇちゃんはメロメロです」

　私は悩みました。どう反応すればいいか。

　突っ込みどころが満載です。

　一体どこでそんな技を覚えたのか、私をメロメロにしてどうするのか、そもそも必殺と甘噛みが矛盾しているのではないのか、どうして甘噛みなのか、思い切り噛んだほうが必殺技としては有効的なのではないか、突っ込みだしたらキリがありません。

　また噛もうとしてきたので、今度はよけてみました。

「う……動けるんですか」

　いや、そんな意外そうに言われても。

「もしかして、メロメロになってませんか」



　なってません、と答えてあげます。

「そうですか……おねぇちゃんは、感じない人だったんですか……」

　なんだかひどい言われようです。

　おねぇちゃん、仕事残ってるからごめんね、と言うと、

「あーもぅ、次の作戦ですっ」

　ぷんすかしながら、部屋を出ていきました。

　そこにどんなメッセージが隠されているのでしょうか。

　我が妹ながら、謎は深まるばかりです。

〈３月27日〉

　ふぅちゃんが眼鏡をかけていました。

「風子、眼鏡っ子になりました」

　そう高らかに宣言します。

　しかしその眼鏡は明らかに、私の物です。

　それ、おねぇちゃんのだよね？　と訊いても「風子のです」と言い張ります。

　嘘よくないよ？　と言ってもききません。

「読書をします」と言って、勝手に私の部屋の本棚を物色し始めます。

　ふぅちゃんにとっては恐ろしくつまらないであろう本を選び出し、それを立ったまま読み始めます。

　上半身が揺れてきました。難しさにくらくらしているようです。

　ふぅ……と息をついて本を元に戻します。そしてこちらに向かって、「読み終わりました」と誇らしげに眼鏡のツルを持ち上げてみせています。本を読んでいた時間は正味三分ぐらいです。ありえません。

　私が仕事に集中し始めると、ふぅちゃんは部屋を出ていきました。

　それで満足したのかと思いきや、奇行はまだ続きました。

　お手洗いへと向かう途中、廊下でふぅちゃんと鉢合わせになりました。

　ぶつかってもいないのに、ふぅちゃんは床にしりもちをついています。

　大丈夫？　と声をかけます。ふぅちゃんは黙って、私の顔をじっと見上げています。

　よく見ると、ふぅちゃんはいつも結んでいる髪を解いています。

　そして、足下には私の眼鏡。

　なんなんだろう、この状況は。

「ときめきましたか？」

　出ました。謎かけです。

　ときめいてません、と答えてみました。

「ショックですっ」

　こちらもショックです。

「おねぇちゃん、眼鏡っ子が趣味じゃなかったんなら最初からそう言ってくださいっ！」



　普通言いません。

「風子、とても時間を無駄にしました」

　そう言って立ち上がります。そして眼鏡を差し出してきます。

「どうもお借りしました」

　どういたしまして。

〈３月28日〉

「風子だっちゃ」

　わけがわかりません。

「ダーリン、風子だっちゃ」

　今回はかなりきています。私が覚えている限りでも、飛び抜けています。

　何かに取り憑かれたのでしょうか。

　背中をばんばんと叩いてあげます。

　痛かったのか、わーっ、と逃げていきます。

　どうどうと落ち着かせた後、もう一度、名前を言ってみて、と話しかけてみます。

「オッス！　オラ風子！」

　別なものに取り憑かれました。

「どっちがよかったですか」

　二者択一ですか、と訊いてみます。

　はい、と頷かれます。

　私は悩んだあげく、前者よりは後者のほうがまだ世間体的にまし

かと考え、後のほう、と答えました。

「だっちゃはダメでしたか。では、オイッスのほうでいきます。オイッス！」

　それは長さん。オッスだったと思いますが。

「そうでした。オッス！　オメェ風子！」

　私は公子です。

「必殺技見せます。きっと痺れます。見っててください」

　はぁ。

　ふぅちゃんは手を合わせて、それを後ろにゆっくりと引いていきます。

「か――……め――……は――……」

　そして、一気に押し出します。

「メェ―――ッ!!」

　ああ、そこで撃っちゃうんだ。

「どか―――ん！　敵は粉々です」

　敵もやりきれない感じです。

「どうでしたか、おねぇちゃん痺れましたか」

　私はもう、返す言葉もなく、引きつった笑いを浮かべるだけです。

「黙ってたらわかりません。いつもの風子より痺れたかどうかご意見お願いします」

　いつものふぅちゃんでいいよ、と答えました。すると、

「ショックです！　ここまでやらせておいてそれはあんまりですっ！」

　怒ってしまいました。

「おねぇちゃがそっちのほうがいいと言ってくれました……だから恥ずかしかったですけど、がんばってかめはめ撃ちました……」

　ああ、やっぱりそういう名前なんだ。間違ってるよ。

　でもそんなところをいちいち突っ込んでいたらキリがないので、ふぅちゃんがどっちかを選べって言ったから選んだんだよとだけ答えました。

「そうですか……いつもの風子でよかったですか……」

　落ち込んだように肩を落として、立ち去りました。

〈３月29日〉

　今日はふぅちゃんが一日中わけのわからない行動をとりました。

　ずっと私の後についてくるのです。

　私がどうしたの？　と振り返ると、近くの壁に顔を押しつけます。

　見えてるよ？　と言っても、無言のままでいます。

　また歩きます。ついてきます。

　ばっと振り返ります。

　すると近くにあった電話の受話器を取り、

「ああ、わたしだ」

　とわけのわからないことを言います。

　また、すぐ飽きるだろうと思って、放っておきました。

　ですが、今回の奇行は、一日中続いたのです。

　トイレに入っている時はこうでした。

　とんとん、とノックし、「誰ですか？」と訊いてくるのです。

「おねぇちゃんよ」と答えると、そこで会話は終わります。

　花に水をやろうと外に出ても、ついてきます。

　どうしたの、ふぅちゃん？　と振り返って訊いてみます。

　それまでと同じように、素早く近くの壁に張りつきます。

　しかし……ざくっと音がして、わーっ！　と悲鳴。

　そこにはサボテンが飾ってあったのです。ふぅちゃんの頬にとげが刺さってしまっています。

　慌てて救急箱を取ってきて、手当てしてあげます。

　消毒の後、大きい絆創膏を貼ってあげました。

　ふぅちゃんは、しばらくその頬を撫でながら、気まずそうに、私のことを見上げています。

　そして突然私の背後を指さしてこう叫びます。

「あ、三木道三そっくりな人が歩いてます！」

　多分、私を振り返らせようという作戦なのでしょうけど、かなり引きが弱いです。

「一生一緒にいてくれやと口ずさんでます！　きっと本物です！」

　えー、それほんとだったらすごいよーサインほしいよーと騙されたふりをしながら振り返ってみます。案の定、三木道三そっくりな人なんていません（そもそも本物であっても私はよく知らないので気づけません）。

　もう一度ふぅちゃに向き直ると、予想通り、壁に張りついていました。

　黙って、水やりをすることにしました。

　夕飯の後、部屋に戻ると、隅のゴミ箱の後ろにふぅちゃんがしゃがみ込んでいました。

　かなり窮屈そうです。

　試しにゴミ箱を動かしてみます。すると、転がりながらついてきます。

　可哀想なので、座布団の前にゴミ箱を置いてあげました。

　すると、居心地良さそうに、座布団の上で丸くなりました。

　それで安心して、仕事をすることにしました。

　10時を回って、振りかえると、案の定、ふぅちゃんは寝ていました。

　その肩を揺すって、ちゃんと布団で寝ようね、と言ってあげます。

　薄目を開けて、んーっ、と頷きます。

　眠そうに目をこすりながら、覚束ない足取りで部屋を出ていきます。

　最後の言葉はこうでした。

「本物でした」

　私は口をぽかんと開けて、一時間ぐらいそのままでいました。

〈３月30日〉

　その日、昼食の場で、ふぅちゃんは私に言いました。

　でかけてきます、と。

　え？　ひとりで？　と訊き返すと、頷きました。

　この春休みは、ふぅちゃんとは一緒に遊ばないようにしていました。

　ふぅちゃんは、いつも私と遊んでばかりで、他に友達がいませんでした。

　このまま姉の私と一緒に遊んでいたのでは、いつまでも友達を作らない、そんな危機感を覚えたからです。

　４月からはふぅちゃんも高校生です。

　この機会にと、私はふぅちゃんとは遊ばないことにしたのです。

　今の寂しさをばねに、高校ではたくさん友達を作ってほしいのです。

　そのふぅちゃんが、ひとりででかけると言ってきたのです。

　私を誘わずに。

　これまでなかったことだったので、驚きました。

　大丈夫？　と訊き返すと、大丈夫です、と言って、箸を置きます。

　ぱたぱたと家の中を走り回り、支度をしているようです。

　ひとりで買い物だろうか。危険じゃないだろうか。そう考えてから、私は自分を笑いました。

　あの子を離せなくなっているのは私のほうじゃないか、と。



　それにもう高校生なんだし。

　私は自分の部屋に戻ることにしました。

　夕方になって、花に水をやりに表に出ました。

　すると、玄関先にふぅちゃんが座り込んでいました。

　バケツの中を覗き込んでいました。

　おかえり、帰っていたんだ、と言った後、バケツの中を覗き込んでみました。

　ザリガニが一匹いました。

　言葉に詰まりました。

　何を言えばいいのかわからず。

　この子は、これを捕まえにいってたんだ。

　そして、ここで遊んでいたんだ。

　ひとりで。

　全部、ひとりで。

　胸が痛みました。

　ただ、ふぅちゃんを抱きしめてあげたかった。

　寂しかったよね、ごめんね、と言ってあげたかった。

　そして、一緒に遊ぼうと手を引いてあげたかった。

　ふたりだったら、もっとたくさん捕れるよ。

　おねぇちゃん、こういうの得意なんだから。

　でも、それはしませんでした。

　両手は両膝に置いたまま、ただ一言、

「すごい、ザリガニ捕まえたんだね」と言いました。

　ふぅちゃんは、ザリガニをつかみ取ると、そのお腹を私に見せてくれました。

　ひとりで捕まえた、という誇らしげな笑顔で。

　そうして、今、この日記を読み返してみて、わかりました。

　それらは、ふぅちゃんが、私を振りきるために必要な行動だったんだと。

　いろんなことを確かめていく過程だったんだと。

私の気持ちを確かめていくためだったんだと。

ふぅちゃんは成長していく。

私から離れて。

寂しいけど、それは大事なこと。

〈４月７日〉

初めてふたり別々に過ごした春休みが終わります。

明日は入学式です。

今書けるのは一言だけです。

どうか晴れますように。

「それではいってきますっ」

いってらっしゃい、ふぅちゃん。



06

ときめく瞬間

文：魁



　目の前には手を伸ばしてもなお天辺に届かないネット……。

　そのさらに上を行き来する白いボール。

　周囲からはこれまで感じたことのない視線……。

　期待されている視線……。

　私はどうしてこんな所にいるんだろう……？

　そんな疑問を抱きながらも帽子を深くかぶり直す。

「杏ちゃん、くるわよ」

　違う……。

「藤林、頼むぞ！」

　それはあってる。でも違う。

「レシーブ！」

　だって私は……。

「はい、トス！」

　私は……。

「いっけー！　杏ちゃん！」

「殺人スパイクをおみまいしてやれ藤林！」

　……私は──……お姉ちゃんじゃないのに……。

　──一週間前……。

　お昼休み、私は教室で同じクラスの人達に頼まれて占いをしていた。

「で、では……、来週、私達のクラスが球技大会でどうなるかです

が……誰か一枚引いてください」

「うん」

　まわりにいた人のひとりが、私の手の中の束から一枚カードを抜く。

「それではカードをしっかりと憶えて、私に見えないように束に戻してください」

「うん」

　トランプが戻されたことを確認すると、札をよくきる。

　そして一番上のカードを手に取り……。

「……あなたの選んだカードはスペードのＪ、これですね」

「すっごーい！　当たってるよ藤林さん……って、これ手品じゃんー」

「あ、いえ、一回目で当たったということは、これは一回戦のことを意味します。そしてＪは11、１が二つに割れることを意味します」

「……つまり？」

「一回戦は突破できます」

　私はニコリと微笑みながら言った。

　が……、まわりの人達の表情がみるみる曇っていく。

「あぁ……結果のわかった勝負ってつらいな……」

「でも参加しないと成績に関わるしねぇ……」

「知っちゃいけない未来もあるんだねぇ……」

「あ……う……あの……その……突破できるんですけれど……」



「あー、うんうん、ありがとうね椋ちゃん」

「占いは占いだし、何とかなるさ」

うろたえる私にクラスのみんなが、ぎこちなさのある温かな眼差しを向けてくれる。

少し複雑な気分……。

ドガシャン!!

トランプを整えていると、突然廊下の方からけたたましい音がした。

みんなは慌てて窓を開け、廊下に顔を出す。

と、そこには見知った顔━……お姉ちゃん……と、……男子がふたり。

「あ━っ！　もうしつこいっ！　本気で殴るわよ！」

「あんたさっき本気で蹴りましたよねぇ！」

ひとりは髪を金髪に染めていて、もうひとりは━……。

「朋也っ！　あんたもしっかりおさえてなさいよ！」

「俺ごと蹴飛ばしておいてなに言ってやがる！」

……あ、あの人が岡崎くん、なんだ。

突然の騒動に、教室のみんなが呆然としていた。

ふと見れば、お姉ちゃんは手に紙を持っていた。

あの紙は……たしか球技大会の参加メンバーの登録用紙。

「つーか杏！　そればっかりはマジで勘弁してくださいっ！」

「ダメ！　あんたは球技大会サッカー決定！」

「三年と試合することになったらどうするんだよ！　僕、途中退部してるんだぞ?!」

「そりゃおもしろい展開だよな」

「あんためちゃくちゃさわやかに言いますねぇ！　めちゃくちゃバツが悪いでしょっ！」

「いいじゃない、もっぺん根性叩き直してもらいなさいよ」

「根性以外のところを叩かれますっ！　って……うわっ！　岡崎放せ！　手を放せ！」

　岡崎くんが金髪の人の腕をしっかりと摑んでお姉ちゃんに言う。

「行け！　杏！　さっさとその紙提出してこい！」

「ＯＫ！」

　お姉ちゃんは生き生きとした笑顔で親指を立てると、踵を返して走り出す。

「放せ──！　岡崎ー！　おまえ騙されてるんだぞー！」

「何を騙されてるっていうんだよ」

「男女混合バレーのとこおまえの名前書いてあったぞ」

「なにぃ?!」

「僕達はあいつにはめられたんだよ！」

「くっそ！　あの女ぁー！」

　ふたりは競うように廊下を蹴って、お姉ちゃんの後を追った。

「なにあれ……？」

「今のって藤林さんのお姉さんだよね？」

　みんなが不思議そうな顔で私を見る。

「え？　あ……えっと……そ、その……まぁ」

　きっと双子なのに全然性格が違うって思われているんだろうな……。

　━球技大会当日……。

「椋ちゃん！　そっちいったよー」

「え？　あ、わわ……わ……」

　ゆっくりと白いボールが私のいる場所に落ちてくる。

「藤林、おちついてレシーブだ」

「あ……う……え、えっと……あう……」

　自分でもわかるくらい、みっともなく慌てている。

　えっと、レシーブは……両手を重ねてボールの落ちてくる場所に……。

　ビシ……

　手にボールの触れる感触がした次の瞬間……。

　ベチッ！

「あうっ」

　額に衝撃がきた……。

　そして、それは試合終了の合図でもあった。

「あ……ぅ……う〜……すみません……」



　完全に足を引っ張る形になってしまい、申し訳なさに私はまともに顔が上げられなかった。

「仕方ないよ、藤林さんそんなに運動得意じゃないしさ」

「そうそう、それに一回戦敗退のほうが、後は自由だから楽だしね」

「うぅ〜……すみません……」

　みんなは優しく声をかけてくれる。

　けれど、それでもやっぱり申し訳ない気持ちでいっぱいで……正直涙がでそうだった。

　と、その時──……

「朋也っ！　そっち行ったわよ！」

　お姉ちゃんの声。

　よく見れば隣のコートで、お姉ちゃん達のクラスもバレーボールしていた。

「くそ……なんで俺は馬鹿正直にバレーなんてしてるんだ……」

　お姉ちゃんの声に、男子生徒──岡崎くんが、面倒くさそうに片手を出し、ボールを弾く。

　岡崎くん、ちゃんと出場しているんだ……。

　ボールはフラフラとネット際に飛んでいく。

「Ｂクイック!!」

　そう叫びながら、ネット際へ走り込むお姉ちゃん。

　それに合わせるように、他の男子が跳んだ。

　お姉ちゃんはアタッカーに向けて鋭いトスを──……出さなかった。

　トスの構えからそのまま手首のスナップだけでネットギリギリの

ところにループボール……、ツーアタックでボールを返した。

「き、きたねぇ！　クイックじゃねぇのかよ！」

「なんだそりゃ──！」

　完全に虚を突かれた相手側がブーイング。

「あはははー、戦いは裏の読みあいでしょー」

　親指を地面に向けながら胸を張って言い切るお姉ちゃん……。

「おまえすっげー姑息なのな……」

「知略的って言いなさいよっ！」

「わりぃ、無理だ。言えね」

「言えるようにしてあげようかしら？」

「つーかさ、おまえの髪、邪魔だ。跳ぶ度、俺達にまでブラインドになる」

「んなっ……ぬっ……む……どうしろってのよ」

「知るか。帽子でもかぶって抑えてろ。それより昼飯の件、絶対逃げるなよ？」

「しつこいわねぇ、わかってるわよ！」

「あ、ボールきたぞ」

「わかってるわよ！」

　お姉ちゃん達のそんなやりとりを、少し離れた場所から私達は見ていた。

「凄いね、藤林さんのお姉さん」

「え？　あ、うん、私と違って運動できるから」

「違うよ、今、岡崎くんと普通に話してたでしょ？」

「あ、うん。よく話するみたいだよ」

「そうなんだ、怖くないのかな」

　怖い──……。

　岡崎くんは、他の人からみたらそういう人に見えるんだ……。

　私には……お姉ちゃんと仲のいい、普通の男子にしか見えないんだけどな。

「椋〜」

　中庭を歩いていると、後ろからお姉ちゃんが声をかけてきた。

　振り返ると帽子をかぶった女の子──……一瞬、誰かわからない。

「………………お姉ちゃん……？」

「あ……あれ？　あんたでもわかりにくい？」

「う、うん、だって髪がないんだもん」

「朋也がうるさいから巻いて帽子の中に入れたのよ」

「そうなんだ。でもそのほうが動きやすそうだね」

「まぁ、ね」

　お姉ちゃんは苦笑する。

「ところでお姉ちゃん、どこ行くの？」

「え？」

「こっちって保健室しかないよ」

「あー、えっとさー、実は足捻ひねっちゃった」

　全然痛そうなそぶりを見せず、あっけらかんと笑いながらお姉ちゃんは言う。

「……え?!」

「たぶん、さっきの試合の最後のアタックの時ね。着地した時になんか変な角度だったから」

「だ、大丈夫なの？」

「平気平気。まぁ、ちょっと保健室で湿布貰おうかなーってくらいよ」

「ついていこうか……？」

「いいわよ、そんな大げさなもんじゃないし。それに変に心配されるのも嫌だしさ」

　お姉ちゃんは照れたように笑いながらそう言った。

「あ、そうだちょっと帽子預かってといて。髪が抑えられてちょっと痛いのよ」

　お姉ちゃんはそう言って帽子をぬぐと、私の頭にかぶせた。

「じゃあちょっと行ってくるね。すぐ帰ってくるから」

「あ、うん。じゃあここで待ってる」

　私はお姉ちゃんの背中を見ながら、中途半端にかぶされていた帽子を、しっくりくるようにかぶり直す。

「杏」

「……え？」

　不意に背中に届く声。

　振り返ると、そこには……岡崎くんがいた。

「おまえ、足平気か？」

　岡崎くん……私をお姉ちゃんと間違えている……？

　って、足……？　岡崎くんはお姉ちゃんの足のこと気づいていたの？

「いつかはわからないけど、捻ったんじゃないのか」

「あ……ぅ……その……」

　どうしよう……お姉ちゃんは足のこと黙っていてほしいみたいだったけど……。

　ううん、その前、私がお姉ちゃんじゃないことを言わなきゃ。

　あ……でも言っちゃったら、お姉ちゃんがどこに行ったか言わなきゃいけなくなる……。

　心配されるの嫌って言ってたし……でも……ぅ〜……。

「……？　おまえ、本当に大丈夫か？」

「あ、ぅ……は、はい」

「はい？」

「い、いえ、うん」

　とっさにお姉ちゃんのフリをしてしまう。

「………………？　実は頭を打ってるとか？」

「ううん」

　すぐに帰ってくるって言ったし、この場さえ乗り切れば……。

「足……大丈夫か？」

「うん」

「足踏みしてみ」

　私はその場で足踏みをする。

「ジャンプ」

　ぴょんぴょん

「反復横跳び」

　シュタっ　シュ……タっ

　シュタ……っ　……シュタっ

「なんか最後のはキレが悪い気がするけど……それだけ動ければ平気か」

　私はコクコクと頷く。

「俺の気のせいだったのか……。まぁいい、じゃあ行くぞ」

「？」

　……あれ？

「もう二回戦が始まる」

　──え?!

「昼飯のおごりの約束は、最低二回戦突破だったからな」

「あ……ぅ……ぇっと……ぅ……その……」

「今更、契約破棄は許さねぇぞ。さっさと来い」

「あ……わわ……わ……ぅ……」

　ど……ど、どうしよう……お姉ちゃん、どうしよう〜。

　目の前には手を伸ばしてもなお天辺に届かないネット……。

　そのさらに上を行き来する白いボール。

　周囲からはこれまで感じたことのない視線……。

　期待されている視線……。

　私はどうしてこんなところにいるんだろう……？

　そんな疑問を抱きながらも帽子を深くかぶり直す。

「杏ちゃん、くるわよ」

「藤林、頼むぞ！」

「レシーブ！」

「はい、トス！」

「いっけー！　杏ちゃん！」

「殺人スパイクをおみまいしてやれ藤林！」

　ぺすっ……

　手の先にかする感触。

　ボールは力無くネットを越え、まるで枯れ葉のようにユラユラとコートに落ちる。

　相手は虚を突かれ、その軌道を呆然と見ていた。

「すげぇ藤林！　勢いある腕の振りなのに力のないボール！」

「ナイスフェイントだよ！」

「髪も帽子の中にちゃんと仕舞って戦闘態勢ばっちりじゃん」

「あ……うぅ〜……」

　ど、どうしよう……お姉ちゃんじゃないってバレたらどうなるんだろう……。

　みんなの視線が怖いよ……お姉ちゃんはいつもこんな視線を受けてるの？

　そんな中、岡崎くんだけみんなとは違う視線を私に向ける。

　訝いぶかしがるような──……心配をするような──……。

　……それでも試合は続いていく。

　そして徐々に……十分予想できたことだけど、私が足を引っ張り始める。

「おい、あそこは穴だぜ」

「みたいだな」

　対戦相手が私のほうを見て言う。

「藤林のやつ、どうしたんだろ」

「杏ちゃん、調子悪いのかな」

　味方の人達も不思議そうな顔で私を見る……。

　どうしよう……このままじゃ私のせいで負けちゃう……。

「杏……まさかおまえわざと負けて昼飯の件なしにする気じゃないだろうな……？」

「う……ぁぅ……」

　岡崎くんが訝しげな目で私を見る。

　けどすぐに頭を掻きながら言った。

「っても、まぁ負けず嫌いのお前がわざと負けるわけないか」

「まぁ、きついの一発決めてやれよ」

「ぁ……う、はい」

　相手のサーブボールがこちらのコートに飛んでくる。



　岡崎くんが両手でボールを受け、ネット際に飛ばしたた。

　他の女子が、私を見ながらそれをトス。

　……私を見ながら……ということは……あ……わわ……私がアタック？？

　ふわりとネットと平行に柔らかく飛ぶボール。

「行け杏！」

「決めて藤林さん！」

　私は飛んでいるボールを凝視しながら体育で習ったアタックの打ち方を必死で反芻させる。

　たしか――……左手を上げながら跳んで……、上げた手を振り下ろしつつ、右手をしならせるように……。

　――振り抜くっ！

　スカっ！

　腕が勢いよくボールの横を通り過ぎた……。

「あ……」

　跳ぶのが……遅かったみたいだった……。

　ボールはこっちのコート内に落ちる。

　そしてさらにその上……ボールの上に私は着地した、

　結果……。

　ずてっ！

　転こけた……。背中から無様なくらいの勢いで……。

　全身を襲った衝撃に、倒れたまま呆然としていた。

「ぷっ、だっせー」

「空振りしてしかも転けてやんの」

　対戦相手の男子が私を見ながら笑っている……。

　泣きたくなってくるくらいみっともない……。

　ドムッ！

　不意に近くで何かを蹴る音がした。

　そして少し離れたところで、バシっと何かが当たる音。

「うわっ！　いてぇな！　なにボール蹴ってんだよ！」

　相手チームの男子の声。

「てめぇら何笑ってんだよ……」

　続いて聞こえたのは岡崎くんの怒った声……。

　辺りが凍ったように静まる。

「……杏、大丈夫か？」

　けど、私にかける声はふつうのものに戻っていた。

「ぁ……ぅ、はい……」

　倒れたままじゃ余計な心配をかけてしまうので、慌てて立ち上がる。

「痛っ……」

　右足首に痛みが走り、体勢を崩してしまう。

　けど、近くに来てくれていた岡崎くんに寄りかかる形になってしまい倒れるまでには至らなかった。

「あ……ぅ……ごめ……」

「タイムでいいよな」

　私の言葉を遮るように岡崎くんが相手チームに言った。

「保健室、連れてくくらい待ってられるだろ」

　相手チームの返事を待たず岡崎くんは私に肩を貸してくれながら歩き始めた。

　岡崎くんの身体に触れてる……。

　……凄くドキドキする……こんなに近くに男の子がいることなんて初めて……。

「杏、おまえ大丈夫か？　動き悪いし口数少ないし……」

　だって……とてもじゃないけどしゃべれるような状況じゃないもの……。

「顔も赤いみたいだし、風邪か？」

　火が出そうなくらい熱いよ……。

「足の方、無理そうだったら棄権しちまおうぜ。たかだか球技大会なんだ」

　岡崎くんて……ぶっきらぼうだけどすごく優しい……。

　これはお姉ちゃんにだからなのかな。

　……それとも……もともとこういう人で……みんなが知らないだけなのかな……。

　ゆっくりと保健室に近づいていく。

　……って、保健室にはもしかして、まだお姉ちゃんがいるんじゃ……？

　考えている間に保健室の前まで来てしまった。

「あ……あの……」

「ん？」

「その……えっと……ぅ……だから……こ、ここまでで……」

「あぁ、わかった」

　ちゃんと言葉になっていないのに、岡崎くんは素直に私から離れてくれた。

　触れていた部分が温もりを失っていき、物寂しさを感じる。

「ここで待っててやるから、はやく診てもらってこい」

　私は黙ったまま頷いて保健室に入る。

　心臓はドキドキしっぱなしだった。

　保健室に入った私を出迎えてくれたのは、慌てふためくお姉ちゃんだった。

「ああぁっ、寝ちゃってたー！」

「お、お姉ちゃん？」

「試合始まっちゃう！　あ、椋、起こしに来てくれたの？　帽子ありがとね」

　お姉ちゃんは私の頭から帽子を持っていくと、そのまま保健室を飛び出した。

『うわっ！　杏?!　もういいのか?!』

『え？　朋也??　って試合は?!』

『タイムとってるから大丈夫だと思うけど……足は大丈夫なのか？』

『え？　あ……あ〜、う、うん、こんなくらい全然平気よ、ありがと』

『そうか、じゃあ行くか』

『あんたもお昼ご飯が食べたかったらきばりなさいよー』

『てめぇこそさっきみたいなヘマ……って、おい！　待てよ！』

　遠ざかっていく足音……。

　お姉ちゃんと岡崎くんが走っていく……。

　一人になって……ようやく安堵の息が吐けた。

　……捻った足が痛みを思いだし、熱く脈打ち始める……。

　でもそれ以上に、胸の奥がドキドキしている……。

「岡崎……くん……」

　名前を口にすると……さらにドキドキした。



07
特別な夜

文：麻枝准



寒い夜だった。

俺はマフラーに深く鼻を埋める。そうしていないと、痛くて歩けない。

通りでは街路樹が電飾に輝き、波打った遠近図を描いていた。

肩を並べて歩く男女は皆そろってスローペースだ。

どこかの店先からか遠くで賛美歌が流れているのが聞こえた。

（クリスマスか……関係ねーや）

そんな連中を縫うようにして足早に抜けていく。

よっ、と歩道に駆け上がったところで、

「うあ？」

子供が倒れていた。冷え切った路面に頬を寄せて。

「おい……大丈夫かぁ？」

……返事はない。

「困ったな……」

別に俺が助けなくても、すぐ別の通行人がやってくる。

顔を上げれば、ほら、正面から歩いてきている。スーツ姿の社会人だ。学生の俺なんかより、大人に任せておいたほうがいい。

適切な処置ってものをわきまえているだろう。

でも、俺は立ち止まったままでいた。

……ここでこいつを助けなければ後悔する。どうしてかそんな気がした。

そんな柄でもないのに……。

俺はしゃがみ込んで、そいつの頬を叩く。目覚めない。息はして

いる。

　その体を背負おうとする。小さいから重くはない。

　だが、気を失っている人間を背負うのは難儀なことだった。

　通行人が何事かと見ていく。

　はあ……なんだって俺は……。

　背負うのは諦めて、抱き上げる。

　病院まで腕力がもつのか……。

「……空腹？」

　医者の言葉をオウム返しに訊く。

「朝から何も食べてないみたいだね」

　それが子供の症状だという。

　今は落ち着いてるのか、カーテンで仕切られた隣のベッドで寝ていた。

「ちっ……人騒がせな……そんなことぐらいで行き倒れになるなよ……」

　腕をだらりと下げる。ぱんぱんに張ってしばらく使えない。

「まあ、事情がある家だからね」

「なんだよ……」

「両親がね、いないんだよ……」

　重々しく息を吐いた。

「父親が仕事場で事故に遭って、入院後すぐ亡くなって……そうしたら母親も後を追うようにして病気でね……」

「ふたりとも亡くなったのか……」

　医者は頷く。

「今は確か、おばさんの家に厄介になってるとか。そのおばさんも夜遅くまで仕事で、かぎっ子なんだそうだよ」

「クリスマスの日だってのにか……」

「まあ起きたら、なにか温かいものを食べさせてあげるよ。君もごくろうさま」

　そう言って医者は俺の膝を叩いた。

　これで俺の役目は終わった。

　この診察室を後にして、稽古場に向かえばいい。

　けど、まだ何か引っかかるものがある。だから訊いてみた。

「何食わせんだよ？」

「ん？　君も食べていくかい？」

「ちげーよ、何食わせんのかって訊いてんだよ」

「まあ近くのうどん屋のカツ丼でも……」

「はぁ？」

　一瞬唖然とした。すぐ怒りがわいてくる。

「んなもん食わせんなよっ、クリスマスだろーが、今日はよっ！」

「いや、それは別に関係ないだろう……？」

「大ありだよ、ばーかっ！」

　俺は椅子を蹴るようにして立ち上がる。

　医者に背中を向けると、ベッドに近づいていって、そこに横たわる小さな体を揺すった。

「おい、起きろ」



「君、どうするんだいっ、乱暴はいかんよっ」

「うっせぇ、あんたみたいな大人には子供の気持ちなんてわかんねぇんだよっ、クリスマスにカツ丼食わされる子供がいるかよっ！　よく考えろぉっ！」

　喧噪の中で目覚める、男の子、あるいは女の子。

「行くぜ、男の子、あるいは女の子」

　その細い腕をつかむ。

「どこに？」

　甲高い男の子の声で訊いた。

「どこに？」

　もう一度男の子は訊いた。寒空の下で。

　俺は考え込む。

　稽古場か？　いや、稽古場に連れ込んだら、さぼるわけにはいかないし、こいつの相手をしてられなくなる……。

　なら家か？　遠い。タクシーでも使わないと帰ってこれなくなる。

　だから俺は答えた。

「ここ」

「え？　なにが？」

「ここが目的地っつってんだよっ」

　寒いのも手伝って、いちいち言葉尻が荒くなる。

「なにもないよ？」

「調達してやるさ……。とりあえず待ってろ。腹減ってんだろ」

「おら、チキンだ」

　ファーストフードのフライドチキンの箱詰めを手渡す。

　男の子は、わぁと顔をほころばせた。

「今夜はクリスマスだからな。遠慮せず食えよ」

　俺たちは閉店した店の前の段差に腰掛ける。

　男の子は３本を、俺は１本を、またたく間に平らげる。

　備えつけのおしぼりで手を拭き、男の子の口を拭ってやりながら思った。

「なんか足らねーな……」

　俺は首をひねる。

「さて、なんでしょう？」

　訊いてみる。

「なんでしょう？」

　訊き返される。

「おら、ケーキだ」

　リボンで飾られた箱を突き出す。すげぇ痛い出費だ。

「ショートケーキなんてケチなもんじゃねぇ。ちゃんとした丸いケーキだ。サンタも立ってる」

　地面で開封して見せると、男の子はまたわぁと顔をほころばせた。

　ろうそくを立て、ライターで火を灯していく。

　電気を消す必要もなく、それはまばゆく光り輝き出す。

　しかも温かい。

　ふたりで冷えた両手をかざす。

「なんか足らねーな……」

　そうしながらも俺は首をひねる。

「さて、なんでしょう？」

「なんでしょう？」

「歌だ」

「うた？」

「そう。ジングルベルを歌わなきゃクリスマスは始まらない」

　俺の声はよく通る。毎日発声練習をしてるからだ。

　けど、遠慮はしない。

　この町の奴ら全員巻き込むぐらいの勢いで歌ってやる。

　男の子も、か細い声で精一杯歌う。

　歌い終えた後、俺はまだまだだな、という顔をしてやった。

　ろうそくを吹き消し、プラスチックのフォークで両端からふたりで食べていく。

　俺が先にギブアップした。甘いものはそんなに入らない。

　男の子はまだまだだな、という顔をしていた。

　三分の一を残し、男の子もギブアップした。

　残りを箱へとしまい、ふたり、親子のように並んで、身を寄せ合う。

「なんか足らねーな……」

　俺はまた考える。

「さて、なんでしょう？」

「なんでしょう？」

　無邪気な顔でそう問い返す。

　その無邪気さは、かつて知っていたのだろうか。

　その温もりを。

　俺は先刻聞いた医者の話を思い出す。

　……父親が仕事場で事故にあって、入院後すぐ亡くなって……そうしたら母親も後を追うようにして病気でね……。

「……母親だ」

　俺はそう口にしていた。

「ははおや？」

「ママだ、おかあさんだ」



「ママ、いないよ」

「知ってる。でもクリスマスなんだしよ、いてほしいだろ」

　俺は立ち上がり、公衆電話を探そうとした。

　けど、すぐやめた。

　誰を呼ぶつもりだ？

　春からつき合っていた彼女とは先月別れたばかりだ。

　男の子はそんな俺を座ったまま見上げていた。少し哀しげな目で。

　またその顔を、わぁと輝かせてみたい。

　ろうそくをたくさん立てたケーキみたいに。

「今日は、特別な夜だからな」

「とくべつなよる？」

「そう」

　にこりと笑ってやる。

「だから、きっと叶うさ」

　俺は通りを行き交う女性に、声をかけ続けた。

　俺とあの子につき合ってくれないか？　少しの間でいいんだ。

　けど、見知らぬ男と子供のために時間を割いてくれる奴はいなかった。

　無視か苦笑いを浮かべるかして、目の前を通り過ぎていく。

　くそ……。

　俺は声をかけるのをやめ、しばらく人の流れを眺めていた。

　その中に見つけた。

　見知った顔だ。二年の時、同じクラスだった奴だ。連れもなくひとりで歩いてくる。

　俺は駆け寄る。足を滑らせ転げそうになるが、不格好に持ちこたえる。

「よう」

　そう声をかける。

「わ、古河くん」

　相手は驚いた顔をして立ち止まった。

「おまえ、なにしてんの」

「これから勉強会。こんな日でも遊んでる時間なんてないからね。受験生はつらいっすよ」

「なぁ……俺につき合ってくれないか。少しでいいんだ」

「え？　今から？」

「そう、今から」

　彼女は思いを巡らせた後、納得顔になる。

「あー、彼女と別れたんだってね」

「知ってんのかよ……」

「うん」

　なにが楽しいのか笑顔で頷く。

「今、あの子、バスケ部の子と付き合ってるよ。古河くんもやっぱスポーツしてたほうがよかったんじゃない？　背も高いし、運動神経だって抜群なのに、もったいないよ」

「なんだよそれ……もてるためにスポーツしろってか」

「いや、してたら、もててたよって仮定の話で。わたしはぜんぜんそんなこと言わないけどさ」

　慌てたように取り繕う。

「言ってんじゃん」

「そう……かな」

「ああ、言ったよ」

「じゃ……ごめん」

　気まずい空気になる。

　なにやってんだろ……。

　あ、そうだ。

　俺は目的を思い出す。こいつを責め立ててる場合じゃない。

「で、付き合ってくれんのか？　少しでいいんだ」

「いいよ。少しじゃなくても」

　やった。子供のように喜んでしまう。

「よし、じゃ、こっちに来てくれ」

　その腕を引っ張る。

「そんなに慌てなくてもっ……」

　先には男の子がぽつんとひとりで待っていた。店の前の段差に座って、手を息で温めていた。

「あいつとクリスマスパーティやってんだ」

「え、わたしと古河くん、ふたりきりじゃないの？」

「ああ、あいつと三人で」

「なんでさっ？」

「なんでって、あいつとパーティやってんだってば。あいつこんな夜にひとりきりなんだぜ？　そんな話ってないだろ？」

　彼女が逆方向に引っ張る。そのまま腕を振りほどいた。

「なんだよ……」

「そんなのあんたひとりが相手してればいいじゃないっ」

　怒った声で言った。

「話を聞けよ、事情があんだよっ、母親役が必要なんだよっ」

「母親役ぅ？」

　呆れたように頬を歪めた。

「勉強会さぼろうとしてたのに、そんなので振り回されるこっちの身にもなってよっ」

「そりゃ悪いと思ってるよっ、でもこんな夜だぜ！　なんでも叶う夜にしてやりてぇじゃねぇかっ」

「なにそれっ……演劇のやりすぎでおかしくなったんじゃないの？」

「はぁ？」

　今度は俺が顔を歪める。

「なんでそんなこと言われなくちゃならねぇんだよっ、演劇馬鹿にすんじゃねぇよっ」

「………」

　もう彼女はなにも言わない。涙目のまま、俺を睨みつけた後、走り去っていった。

　くそ……。

　また心の中でこの状況を罵ののしった。

　どれだけの時間が経っただろう。

　いつしか立ちつくしていた。

　体温が下がっていく。指先は冷たさを通り越して痛く、足の先は感覚がなくなっていた。

　今頃仲間たちと、狭い稽古場で練習に汗を流していたはずだ。

　それをさぼって、なにやってんだ、俺は……。

　ズボンが引っ張られていた。

　振り返ると、男の子が立っていた。

「ね」

「なんだよ……」

「ぜんぶ、かなったよ？」

「まだ途中だよ……」

「とりもたべたよ？　けーきもたべたよ？　うたもうたったよ？」

「まだだよ……」

　まだ残ってんだよ……。

「ありがとう、ぱぱ」

　その言葉は俺に向けて。

「え……」

　俺はしばらく止まっていた。

「ぱぱって……おれか」

　訊き返す。

「うん、ありがとう、ぱぱ」

　俺はその場に崩れ落ちる。

　地面に膝をついて、男の子を抱きしめた。

「ありがとうをいうのは、こっちだ……」

　涙が止まらない。だらだらと頬を伝って落ちていく。

　こんな短い時間でも……こんな無茶なやり方でも……。

　それでも、ぱぱって……。

　なら、俺はやっぱり叶えてやりたかった……。

「ごめん、ごめんな……」

　その首筋にそうつぶやいた。

　叶えてやりたかったんだ、神様。ぜんぶ。

「叶いますよ」

　神様の声が。

「だって、特別な夜ですから」

　違う、人だ。女性だ。

　俺たちは顔を離す。その隙間に降りてくるのは、大きく膨らんだ靴下だった。

「これも、足りなかった……ですよね？」

　男の子はわぁ、という顔をして、それを受け取った。

　俺は濡れた顔を服の袖で拭ってから、女性を見る。

　女性は走ってきたのか、息を切らせていた。

　コートの下に制服が見えた。ウチの制服だ。

　こんな子いたっけか。見覚えがない。

　俺が思い出せないだけか。だから訊いてみる。

「あんた、だれ？」



「ママ」

　男の子の顔が、また、わぁとほころぶ。

　ぜんぶ、叶った。

　残りのケーキを一緒に食べた。俺も無理をして詰め込んだ。

　それは家族の時間だからだ。

　食べ終わると、温かい飲み物を買ってきて飲んだ。

　そして、手をつないで温め合った。

「今日出会ったばかりなのに……」

　その温もりを感じながら、不自然さを口にした。

「一度だけ、演劇をご一緒したんですよ、覚えていませんか」

　意外な言葉が返ってくる。

「あんた、ウチの演劇部だったのか？」

「いえ」

　彼女は首を振る。

「今年の春です。演劇の題材にと、あなたは図書館で、本を探していました」

「へぇ……」

　他人事のように間の抜けた返事をする。

「でも、タイトルを忘れていたんです。図書委員の方を捕まえて、必死に手振り身振りを交え、内容を伝えていました。そこそこ有名な本だから、知ってるはずだって。それを見ていた私はすぐぴんときました。私、その本知っています、と告げました。でも滑稽ですよね。私も内容は思い出せても、タイトルは出てこなかったんです」

　徐々に思い出してきた。その日のことを。

「ふたりで説明しているうちに、あなたは主人公を演じ、私はヒロインを演じていました」

　日だまりの中で、彼女は舞って、俺はその身を抱いた。

　拙つたなかったけど、愛の感じられる演技だった。

「そうか、あんただったのか」

　最後には拍手の中にいた。数は少なかったけど、温かな拍手だった。

「実はさ、本番のヒロインより、ヒロインらしかったと後で噂になったんだ」

「嘘ですよね？」

「ほんと」

　俺がそう答えると、目を線にして笑ってくれた。

「私は演劇、好きですよ」

　冷え切った俺の心まで温かくなる。

「セリフ覚えてる？」

「はい」

「じゃ、ディナーショーにしてやるか」

　立ち上がった俺を、少年がきょとんとした顔で見上げている。

「俺が一番好きなものを見せてやるよ」

「でも、まだなにか足りないですね」

　俺に続いて立ち上がった後、彼女はそう俺の文句を真似てみせた。

「さて、なんでしょう？」

「なんでしょう？」

　俺と男の子が同時に返す。

「雪」

　彼女の答えに俺は眉をひそめる。

「冬の物語ですから」

「いや、いくらなんでも、それは無理だろ……」

「きっと、叶いますよ。だって、特別な夜ですから」

　その無垢な目を見ていると、本当にそう信じたくなる。

　俺はひとつ頷いてから、客席に向く。そして胸に手を添えて、敬礼をする。

　彼女も同じようにした。

　物語の始まりだ。

　彼女の手を取る。

　図書室にできた日だまりの温度を思い出して、俺は思わず微笑する。

　あ、と男の子が一際白い息を吐いていた。

　俺たちも見上げる。

　ああ……本当に……。

　なんでも叶う夜だった。



08

わたしのおにいちゃん

文：丘野塔也



『芽衣、背番号９ってのはエースナンバーなんだ。

　チームの危機を救い、勝利に導く真のストライカーなんだぜっ』

　昔、おにいちゃんから聞いた言葉が頭をよぎる。

　ふだんのおちゃらけた様子だったけど、その時だけは、なんだか頼もしく思えたのを憶えていた。

　学校帰りの通学路。ふと目にしたフェンス越しの光景。夕日に染まる校庭の上空では、カラスが大きく鳴いていた。

　わたしの視線の先では、背番号９がグラウンドに突っ伏していた。

　黄と紺の縦縞は、地元の向陽中学サッカー部のユニフォーム。向陽の９番と言えば、それは──

　おにいちゃん!?

　ランドセルを揺らして、慌てて金網に張りついた。

　そういえば今週と来週、連続で第一中学と練習試合だって言ってた。あの相手チーム、薄紫のユニフォームがそうだよね……。

　昨日は自信満々に、絶対勝つって言ってたけど、どうなってるのかな……というか、なんで試合中断してるんだろう。向陽の人たち、審判と揉めてるみたい。判定に納得できなかったのかな。じゃあまさか、おにいちゃんが原因で……。

「おっぱい見ずに死ねるかぁぁーっ！」

　あ、起きた。

　わけの分からないことを叫びながら、立ち上がる。そのまま主審に歩み寄っていた。

「キミ、怪我はしてないのか？」

「大丈夫っす。おっぱいへの情熱が僕を支えてるっす」

　やめて、おにいちゃん……。

「っていうか、いまのカードっすよねぇ？　僕、こいつに髪引っ張られたんすよっ」

　指差す先は、第一中の２番。あの人、知ってる……有名なディフェンダーで、おにいちゃんと一緒に県代表に選ばれたこともあったはず。名前は確か、梶山さん……。

「言いがかりつけんなよ。チビだから吹き飛ばされたんだろ」

「ああ？　誰がミニマムボーイだって？」



　そこまで言われてないよ……。

「やめなさい、ゲームを続けるぞ。向陽ボールからだ」

　審判の仲裁によって、選手が元のポジションに戻る。おにいちゃんも渋々、前に上がっていく。その後ろにはマーカーの梶山さんがピッタリとくっついていた。にらみつけるおにいちゃんに向かって、不敵な笑みを浮かべる。

（悔しかったら、やりかえしてみろ）

　口元が、そう動いた気がした。

「……上等だよっ」

　お、おにいちゃん挑発に乗らないでよぉ！

　ホイッスルが響く。中盤の選手が大きくボールを蹴って、おにいちゃんの元へ運ぼうとする。一歩早く、それに反応する梶山さん。ダメ、取られちゃう。

　おにいちゃんは必死になってその背中を追って、そして髪の毛に手を伸ばす……？

「死ねやぁぁぁーっ！」

　って、それはもっとダメーッ！

　わたしの心の叫びも虚しく、梶山さんの後ろ髪を引っ張ると、そのまま引き倒す。審判が、バッチリ見ている前で……。

　突きつけられるレッドカード。チームメイトに取り押さえられながら、退場させられるおにいちゃん。わたしが正視できたのは、そこまでだった。

　だって、頭を抱えずにはいられないよぉ……。

「どうしてあんなことしたのよぉ！」

　台所に声を響かせた。机を叩くと、麦茶の入ったコップが揺れる。

「っせーな。おまえにゃ関係ないでしょ」

　おにいちゃんは素知らぬ顔で喉を潤すと、テレビのリモコンを手に取っていた。

「んだよ、ニュースしかやってないじゃん。おっ、そっか土曜日は機動戦士が……あーっ！」

　主電源を切ってやった。

「真面目に話聞いてよ！　もう……チームに迷惑ばっかりかけてどうするのよぅ」

「なんで僕ばっかり責めるのさ。先に髪引っ張ったのは２番なの。審判は見逃すし、あいつらが悪いっしょ」

「なっ……あ、あのねぇ！　そんなこと言ってると、推薦取れなくなっちゃうよ」

「……あん？」

「スカウトの人とか、そろそろ見に来るかもしれないんだよ。おにいちゃんの成績で、まともな高校にいけると思ってんの！」

「そ、それはさ……」

「絶対無理だよ！　おかあさんも心配してるんだからね。サッカーでなんとかするしかないじゃない。監督さんにも怒られたよね。なんて言われたんだっけ!?」

「……しばらく頭を冷やせって。５日間の謹慎だとさ」

「来週もまた第一中と試合があるのに、練習できないんだよ。悔しくないの？」

「……は、はは……」

　乾いた笑いが聞こえてくる。そうだよね、悔しいよね。でもこの気持ちをバネにして……。

「はは……わはははは、イヤッホーゥ！」

「お、おにいちゃん？」

「やったー！　遊び放題だよ！　フリーダム!!」

　飛び跳ねるようにして階段を上がっていく。瞬く間に、私服に着替えて戻ってきた。

「じゃっ、僕、ツレの家に泊まりにいってくるから。母さんにはよろしく言っといて！」

　また奇声を上げると、夜闇に消えていった。

　……だ……。

　ダメだっ、この人はっ……！

　改めて、我が兄の自堕落ぶりを目の当たりにする。

　がっくりうなだれる。しばらくして、わたしの胸には熱いものがこみ上げてきていた。

　……なんとかしなくちゃ。

　わたしが、なんとかしなくちゃ！

「ぜぇ、ぜぇ……」

「ペースが落ちてるよ、おにいちゃん。サボらないの！」

「うるせぇっ。休みだっていうのに、なんで走りこみさせられなきゃいけないのさっ」

「体がなまるでしょー。あんまり文句言ってると、布団の下の本、おかあさんに見せるからねっ」

「なんで知ってるんだぁぁーっ!!」

　日曜の朝、おにいちゃんを市営グラウンドへと引っ張ってくる。

　目を離していると、この人はどこまでだらけるかわからない。ここはわたしが監視して、徹底的にしごかなくちゃ。高校進学も叶わず、どんどん悪の道へ迷い込んでいくおにいちゃんなんて、そんなの……見たくない！

「またサボってるぅ！　本棚にあるビデオ、上書きするよ！」

「それだけは勘弁ーっ！」

　いままで握りためた弱みを武器に、ビシビシしごいていた。



「つ……疲れたっ」

「もぅ、だらしないなぁ」

「僕、昨日試合に出たんすけど……」

「途中退場だったけどね。まぁ……仕方ないかぁ。じゃあ、次いこっか」

「へ？」

「問題はなんにも解決してないんだから。あんなにすぐかっとなっちゃうんじゃ、また負けちゃうよ！」

「だからって、どうしろっていうのさ」

「おにいちゃんに必要なのは忍耐力なの。これから体育館で座禅！」

「はあぁ？　なんで、そんな恥ずかしいことしないといけないのさっ」

「邪念を振り払って、サッカーに集中しないとダメでしょ！」

「はっ。僕の想像力の翼は、何人にも邪魔されないのさっ」

「……机の中に、ポエムノートがあるぐらいだもんね」

「精神統一──！」

　必死な様子で、体育館に駆けていくおにいちゃん。手がかかるなぁ……。

　ともかく、少しぐらいは堪こらえ性を身につけてもらわなくちゃ。

　ファイトだよ、おにいちゃん！

「いてて……すげぇ足痺れた」

　すっかり日も暮れた頃、長い影を引きずりながら帰路に就く。

　結局ちゃんと集中できたのは最初の数分だけで、あとはあちこち気にしたり文句を言ってばかりだった。

　そんなに簡単に、変わるわけないかぁ……。

　でも、少しは分かってくれたよね。むやみやたらと熱くなっちゃいけないってこと。来週の試合に活かされるなら、まぁ、いいか──

「……あれ？」

「どうしたの、おにいちゃん」

　ふと、隣を歩く足が止まる。

　おにいちゃんの顔を覗き込むと、正面を見つめながら、どこか驚

いているようだった。

　そこには、男の人が立っていた。大きな背丈の、部活帰りらしいその人は……。

「てめぇ、一中の２番！」

「梶山だ。いい加減おぼえろ」

　昨日おにいちゃんたちと対戦した、その人だった。

「聞いたぜ、謹慎になったんだって？　ま、無様だったもんな」

「……先に反則したのは、おまえだろ」

「証拠でもあんのか？」

　からかうように笑う。おにいちゃんは悔しそうに、唇を噛みしめていた。

　落ち着かなくちゃダメ……ぎゅっと、その腕を握る。

　しばらく怒りに身を震わせてから、おにいちゃんは視線を逸らしていた。

「はっ。来週の試合で、こてんぱんにしてやるさ。いこうぜ芽衣」

「あっ……う、うん！」

　よかった。我慢してくれた。わたしが言ったこと、ちゃんと分かってくれた。そうだよ、おにいちゃんは、負けないよぅ……。

　わたしの手を引いて、スタスタと歩いていく。梶山さんとすれ違った。

「妹とママゴトしてるようなやつに、負けるかよ」

　その背中に、声が投げかけられた。

「お兄ちゃんは偉いよなぁ。おまえみたいなガキと遊んでくれるんだから」

　あくまでわたしに向かって、笑いながら言ってくる。

「お、おにいちゃんは練習していたんです！」

……つい、ムキになって言葉を返してしまっていた。

「練習？　玉遊びの間違いだろ」

「ち、違います！　わたしと一緒に頑張っていたんです」

「おまえみたいなガキに、なにができるんだよ。胸も膨らんでないくせに」

「なっ……か、関係ないじゃないですかぁ！」

「たくさん牛乳飲まないと、おにいちゃんみたいに発育不良になっちまうぞ」

「す、少しずつ大きくなってるから、いいんです！」

「へぇ、じゃあ確かめてやるよ」

「――え？」

胸元が、すーすーした。

大きな手が、襟元をつかんでいる。Ｔシャツが伸びて、その下の肌が、空気に触れようとする――

「や、やぁ！！！」

恥ずかしさに、体が熱くなる。その手を振り払うと、おにいちゃんの後ろに隠れた。

「ははは、冗談だよ」

「う……ぐす……」

涙が溢れてきていた。泣いちゃダメだと思っても、止まってくれなかった。

「芽衣……」

漏れ出す泣き声。そっとわたしの肩を、おにいちゃんが抱いてくれる。

……なんだか、懐かしい感じがした。

「……てめぇ」

「お、怒るなよ。ちょっとからかっただけで、泣くとは思って……」

「梶山ぁ！！！」

「……う」

「……芽衣を泣かす奴は、絶対に許さない」

低く、重く━頼れる声だった。

威圧感に押されて、梶山さんは目を逸らす。舌打ちして、強引に背を向けていた。

「来週の試合で、叩きのめしてやるよ」

吐き捨てるようにいって、立ち去っていく。

おにいちゃんは涙の止まらないわたしを、いつまでも慰めてくれた。

「勝つよ」

ぽつりと呟いた声。

単純で、小さな言葉だったけど、なにより力強かった。

一週間はあっという間に過ぎて、試合の日がやってきていた。

今度は第一中での試合。知らない町へいくのは怖かったけど、それでも足を向けずにはいられなかった。

ゲームは、向陽中が劣勢だった。

おにいちゃんをスタメンから外して挑んだものの、守備に追われ

る一方。たまに見せるカウンターも、迫力がなかった。

　押し切られるように、１失点。満を持して、後半からおにいちゃんを投入したんだけど……。

「ぐあっ」

　ああ、おにいちゃんっ。

　低いうめき声が漏れる。梶山さんのタックルに、地面に転がっていた。ハードマークにあい、前を向くことができずにいた。



　それに……時折織り交ぜてくるラフプレーも、おにいちゃんを苦しめる。さっきの接触で肘が入ったのだろう。脇腹を押さえている。主審は、前の試合と同じ人。おにいちゃんに悪印象があるのか、ちっともファウルをとってくれなかった。

「悔しくないのか？　ほら、来いよ」

　相変わらずの挑発する様子。

　でも、おにいちゃんは冷静だった。唾を吐くと、またプレーに戻る。何度引き倒されても、黙々とそれを続けていた。

　……安堵感と一緒に、なんだか胸が熱くなるのを感じた。

「頑張って、おにいちゃん！」

　素直な言葉は、とても大きな声だった。

「っしゃあああああああっ！」

　叫びが上がった。右サイドにできたスペースに、鋭く走り込む。チームメイトが必死にボールキープして、ようやく生まれた隙間だった。そのスピードに、マーカーが振り切られる。ボールが通った！　ターンして、前を向く。鋭角にゴールへと向かうコース。一歩遅れてやってきた梶山さんが、その前に立ちふさがる。

　ワンタッチ、ツータッチ……小刻みにボールに触れながら、ジリジリ前へと進む。ディフェンダーは腰を落とし、注意深く後ずさっていく。

　そして、おにいちゃんが仕掛けた。右へ大きく蹴り出す──と見せかけて、左に鋭く切り返した！

「………！」

　一瞬、その巨軀がバランスを崩す。追いかけようとするが、半身差で間に合わない。やった、抜いた。そのままシュート……！

　……え？

　不自然に、その体が崩れた。まっすぐ伸びた背筋が真横に倒れ込む。そのまま、おにいちゃんは砂にまみれた。

—引っ張った！

肩をつかんで、思いっきり引いた。間違いない。確かに見た！

梶山さんも渋い顔をしている。思わず手が出てしまったのだろう。気まずい顔をしながら、審判を見る。他の選手も同様だった。時が止まったような静寂が、辺りに流れる。

主審は、首を横に振っていた。

ノーファウル。オンプレーだった。

「嘘だぁ！」

思わず、声を上げてしまっていた。

だって今のは絶対ファウルだよ。おかしいよ、ちゃんと見てよぉ！

第一中の選手は、安心して息をつく。向陽中の選手は、悔しさにうなだれた。

—弛緩した空気が流れる。梶山さんも、同様だった。

その背後を、影が通り過ぎていった。

緩い空気を切り裂いて駆け抜ける。鋭い矢みたいだった。

おにいちゃん……？

今のはノーファウル。オンプレー。ゲームは続行している……！

「………っ！」

慌てて梶山さんは追いかけるが、もう捕まることはない。

ラインギリギリまで駆け上がると、低い弾道でセンタリングを上げた。後ろからやってきたチームメイトが、それを拾う。フリーだ。目の前にはキーパーだけ。躊躇ためらうことなく振り抜いた。入った。ゴールっ……！

ガコン、と高い金属音が響いた。

　ボールはあと数センチのところで枠を外れ、クロスバーに当たると、高々と宙を舞っていた。

　……そんな。

　耳に残る、無常な音。おもわず顔を突っ伏しそうになる。

　ボールを取ろうと、前へ出るキーパー。飛び上がってキャッチすれば、それで終わり……。

「ぬおおおおぉぉーっ！」

「うおおおおぉぉーっ！」

　怒濤のごとく、二つの姿がなだれ込んできた。

　肩をぶつかりあわせながら、空高く飛び上がる。薄紫の背番号２。そして、黄紺の背番号９──。

　向陽中ベンチから、歓声が上がった。

　ヘディングでボールを捕らえると、キーパーの脇を抜けて、ネットに突き刺さっていた。

　……おにいちゃんの、ゴールだ。

「いよっしゃあああぁぁ──っ！」

　呆然と立ちすくむ梶山さんの横を、小さな姿が駆け抜けていった。

　強く握りしめた拳。大きく飛び上がって、人差し指を高々と突き上げる。チームメイトから手荒い祝福を受ける様子は、本当に誇らしかった。

　１点を許したのをきっかけに、第一中のディフェンスはしばらく混乱する。おにいちゃんはその隙を逃さず、ドリブルからのシュートでもう１点を追加した。

　ディフェンスの踏ん張りもあり、そのまま向陽中は２−１で逃げ切ったのだった。

　試合終了のホイッスルが鳴って、それぞれのチームが改めて顔をあわせる。

　周りの仲間が健闘を称え合っている中で、おにいちゃんと梶山さんは視線を合わせていた。

「１勝１敗だな。次は負けねぇ」

　どこか清すがゝすがしい顔で、梶山さんは手を差し出す。

「はっ、今度も僕たちが勝つさっ」

　おにいちゃんも笑顔だった。

　握手を交わす様を、わたしも笑いながら眺める。

　馬鹿で、いい加減で、単純で……でも、頼れる人。

　わたしのおにいちゃんを、いつまでも見つめていた。



09

いろいろなにおい

文：魁



いっぱいあるいた。

あたたかいニオイがなくなって、ボクとおなじニオイがなくなって……。

さみしくなってから、いっぱいあるいた。

すごくつかれた。

みどりのニオイにつつまれるばしょでころがっていた。

おそらから、ちいさなみずがいっぱいいっぱいおりてくる。

ボクのうえにいっぱいおりてくる。

さむくて、おなかがすいて、さみしくて……ちからがぬけていく……。

みえるものがくろくなっていく。

すごく……ねむい……。

『うわわぁ……めずらしい。ウリ坊ね』

オトがした。

『って……、生きてんのかしら……』

ボクにむけられる、ふあんそうなオト。

そして、さわられるかんしょく。

『まったく、こんな小さい仔ほっぽって親はどこに行ったのよ。よいしょっと』

おこったオトのあと、からだがうきあがる。

『ん、まだ生きてはいるみたいね』

みどりのニオイが、あたたかいニオイにかわっていく。

けど、ボクのしっている〝あたたかい〟とは、すこしちがう。

　このニオイは──なんていうのかわからない。

　あたたかいニオイがなくなって、ボクとおなじニオイがなくなって……みどりのニオイもしなくなった。

　かわりに、おそらのみずのあたらない、あたたかなねむるところができた。

　さみしかったことは、もうわすれた。

　ボクのそばには、ごしゅじんさまがいるから。

『ボタン、ぬいぐるみよ。はいっ』

　ごしゅじんさまが、ボクにオトをむける。

　これはうごいちゃだめなオト。

「ぷっ……」

　だからうごかない。

『んー、良い仔良い仔』

　ごしゅじんさまが、せなかをなでてくれる。

　すごくきもちいい。

『お姉ちゃん、おふろ沸いたよ』

　ごしゅじんさまとはちがうオトがした。

　ちかづいてくるこのニオイは……すごくこわいニオイ。

　ボクを、からだがいたくなるみずにつけたニオイ。

『えっと……平気なのかな、ボタン、お風呂嫌いになってない？』

『だーいじょうぶよ、ちゃんと動かないように言ってあるもん』

　ごしゅじんさまがボクをだきかかえて、あるきだす。

　あまりいきたくないばしょへむかっている。

　にげたい。すごくにげたい。

　でもうごいていいオトは、まだむけられていない。

　ボクはどうしたらいいんだろう。

『お姉ちゃん……なんかボタンの目が虚ろだよ……？』

『んー、まぁ大丈夫よ。お湯が気持ちいい物だってわかれば、この仔だってお風呂好きになるって』

　こわいところにつれてこられた。

　しろいものがゆらゆらしている、へんなみずのあるところ。

　あのみずは、すごくいたかった。

『んー、ボタンおとなしくしとくのよー。綺麗にしてあげるからね〜』

　ごしゅじんさまが、ボクにオトをむける。

　でもこのオトはうごいていいオトじゃない。

　だからボクはじっとしている。

『このくらいの温度なら平気よね』

　ばしゃー

　へんなみずをせなかにかけられる。

　でも、いたくない。かだらのなかにしみこんでいくかんじがする。

　これは……そう、すごくあたたかい。

『猪だけど、人用のボディーソープでも問題ないわよね……』

　きゅうに、せなかにつめたいかんしょくがした。

　けど、すぐにそこを、ごしゅじんさまがなでてくれた。

　いつもよりちょっとつよくなでてくれる。

　すると、ボクのからだはみるみるうちに、しろくおおきくなっていく。

　それにふしぎなニオイ。



『どうボタン、きもちいいでしょ〜』

　ごしゅじんさまがたくさんボクをなでてくれる。

　すごくきもちいい。ねむくなってくる。

『まだ動いちゃだめだからねぇ〜。泡流すわよ〜』

　ばしゃー

　あたたかいみずが、せなかにかけられた。すごくきもちいい。

『うん、えらいえらい。じゃあこのままあとはお風呂の中に……』

　ねむたくなっているボクをごしゅじんさまが、だきかかえてくれた。

　ちゃぽ……。

『うっわぁ……ボタンてお湯に浮くんだぁ……』

　おなかがすごくあたたかい……。すごくきもちいい……。

『あたしも身体洗おっと』

　ごしゅじんさまが、ふしぎなニオイにつつまれてしろくなっていく。

　まだうごいていいオトはない。

　じっとしていると、ゆっくり、ゆっくりとあたたかいみずが、からだをつつんでいく。

　きがつけば、ボクはあたたかいみずのなかにいた。

　いきができない。

　こまった。でもがまん。

　まだうごいていいオトをきいていない。

　たくさんがまんすると、たくさんせなかをなでてもらえる。

　だから、がまんする。

　でも……くるしい。

『わわわああーっ！　ボタン！　ボタンが沈んでるーっ！』

　あたたかいみずは……すごくくるしいものだとわかった。

　ぼくはごしゅじんさまがねむるところで、ころがっていた。

　ここはごしゅじんさまのニオイがする。

　でもごしゅじんさまはいない。

　このごろ、おひさまがでているじかんは、いつもおなじすがたになって、そとへいく。

　このじかんは、すこしせなかがさみしい。

　なでてもらいたい。

「……ぷひっ」

　ごしゅじんさまをさがしにいこう。

　どこにいるかわからないけど、みつけることができたら、きっとせなかをなでてくれる。

　このじかんは、そとにいけるところがあるのをボクはしっている。

　すこしおおきいごしゅじんさまが、みずのニオイのするものをかかえて、そとへいったり、かえってきたりしている。

　だから、いっしょにそとにでることができる。

　ボクはおきあがると、からだをのばした。

『んー、あまりお天気よくないわねぇ。洗濯物乾くかしら』

　おおきいごじゅじんさまが、そらをみながらふあんそうなオトをだす。

　ボクもそらをみる。そらはあおくなかった。

　それにすごくすごくたかいところから、みずのニオイがする。

　きっとこのみずは、おちてくる。

『あら、ボタン？　杏が学校に行ってるから退屈なの？』

　おおきいごしゅじんさまが、ボクになにかオトをむける。

『またお散歩にいくの？　車には気をつけなさいよ』

「ぷひ」

　よくわからない。でもとりあえずうなずく。

　ボクはとおくをみた。

　あっちのほうに、ごしゅじんさまがいる……、ようなきがする。

　いこう。

　トテテテテ～

　うっすらとじめんに、ごしゅじんさまのニオイがのこっていた。

　くろくてかたいじめんを、ボクはゆっくりあるく。

　ごしゅじんさまのニオイをおいかける。

　すぐよこを、おおきなものが、はしっている。

　みんなボクよりおおきい。ボクよりはやい。

　おいしくないくうきをだしながら、おおきなオトではしっている。

「ぷひ……」

　そういえば、おなかがすいた。

　ボクはごしゅじんさまのニオイからはなれた。

　おきにいりのところがある。

　おなかがすいたときにいくと、たべるものがもらえるところ。

　ボクはくろいじめんをはしった。

　たくさんきたところ。とうめいのかべのあるところ。

　そこには、こわそうなオスのごしゅじんさまがいる。

　よく、たかくつみあげられた、おいしそうなニオイを、じっとみている。

『ん？　また来やがったな』

　こわそうなオスのごしゅじんさまがボクにきづくと、とうめいなかべをおして、こっちにやってくる。

　ボクはじっと、こわそうなオスのごしゅじんさまをみる。

『また腹が減ったか？　てめぇはウチの常連様だからな』

　こわそうなオスのごしゅじんさまは、おいしそうなニオイのものをもっている。

『ほれ、新作だ食ってみろ』

　めのまえに、おかれる。これはボクがたべていいもの。

「ぷひ♪」

　しっぽがかってにゆれた。

　こわそうなオスのごしゅじんさまは、おいしいものをくれる、いいごしゅじんさまだ。

　ボクはたべる。

『かっ、相変わらず良い食いっぷりだな』

　ふしぎな……おいしくないおいしさのたべものをたべる。

　ぜんぶたべるということは、いいことということだから。

『おぉ……食いきりやがったな。もう一個食うか？』

　またためのまえに、おなじものがおかれる。

　ボクはたべる。

『へっ、てめぇ大物になるぜ』

　こわそうなオスのごしゅじんさまが、ボクにむかって、てをのばす。

　おもいだす。はじめて、ここでこのオスのごしゅじんさまに、たべていいものをもらったときのことを。

　ふしぎなあじのせいで、からだがふるえた。

　でもぜんぶたべた。

　そしたら、ごしゅじんさまとちがって、このオスのごしゅじんさまはボクのあたまをなでてくれた。

　せなかとはちがう、とくべつなきもちよさ。

　オスとして、せいちょうしたきになれる、きもちよさ。

『しかし、人間に理解されねぇが、猪には理解されるんだな、あいつのパンは』

　こわそうなオスのごしゅじんさまが、おおきくいきをはいていた。

　すると……。

『秋生さん……』

　きゅうに、めからみずをだしているごしゅじんさまがあらわれた。

『わたしのパンは……人に理解されないんですね――っ!!』

　そして、そのまま、はしっていってしまった。

『しまったっ！　くそっ！　俺は理解しているぞぉ――っ！』

　オスのごしゅじんさまは、ボクにくれたものをじぶんでたべると、おなじようにはしっていく。

　とてもひっしなオト。よくみることだった。

「ぷひっ」

　かべにからだをこすりつけて、ボクのニオイをのこす。

　おなかはふくらんだ。ボクはまたごしゅじんさまのニオイをおいかけた。

　くろくてかたいじめんをあるく。

　ごしゅじんさまのニオイに、いろいろなニオイがまざってきた。

　たくさんのニオイが、おなじところにむかってあつまっている。

　すこしこわくなってきた。

　ニオイがたくさんすぎて。ごしゅじんさまのニオイがみつけにくくなる。



　ごしゅじんさまじゃない、たくさんのごしゅじんさまがあつまっているところ。

　はじめていくところ。すごくドキドキしてきた。

「ぷひ……」

たどりついた。

たくさんのニオイがあつまっているところ。

ぼくのしらないところ。すごくふあん。

とりあえず、ちかくのかべにからだをこすりつけた。

なにかしないと、ふあんだったから、ニオイをかべにつけた。

キーンコーンカーンコーン……。

「ぷひっ?!」

おおきなたてものが、オトをだした。

あのたてものは、オトをだすふしぎなたてもの。

あのなかにごしゅじんさまがいる。

でも、こわくて、これいじょうははいれない。

ドキドキしながら、うろうろしていると、オスのごしゅじんさまがふたつやってきた。

にげたほうがいいのかな。でも……きになるニオイがする。

このニオイは……。

『なにか探し物なの？』

『そういうわけじゃないんだけど……』

ぼくはオスのごしゅじんさまのそばにいって、ニオイをたしかめる。

『おい、岡崎……？　それなに？』

『さ……さぁ……??』

　ごしゅじんさまのニオイがまざっているオスのごしゅじんさまだ。

『触っても平気かな？　噛まないかな？』

『とりあえず、すり寄ってきているから敵意はないと思うぞ』

『じゃ、じゃあ触ろう、撫でよう、抱こう』

　もうかたほうのオスのごしゅじんさまがボクにてをのばす。

　とてもふあんなニオイのごしゅじんさまだ。

『逃げんなよー……』

　からだがふるえる。

『こらぁ──っ!!』

　オトがした。とてもあんしんできるオト。ごしゅじんさまのニオイ。

　すごいオトがして、ふあんなニオイのごしゅじんさまが、たおれる。

「ぷひぷひ♪」

『ふぅ。ったく……ウチの仔になにする気よ』

『……ウチの仔……？』

　ごしゅじんさまがのこったオスのごしゅじんさまとオトをかわしている。

　おこったオトが、こうごにだされている。

　でも……ふしぎ。ごしゅじんさまはふしぎなオトをだしている。

　おこっているのに、あたたかいオト。

　いままでみたことのないごしゅじんさま。

　……このオスのごしゅじんさまは、ごしゅじんさまにとって、と

くべつなごしゅじんさまみたいだ。

　オトでわかる。とくべつなあたたかいオト……。

　ごしゅじんさまがボクをみる。

『あのね、ボタン。あたしまだ帰れないの』

　ボクに、なにかをなっとくさせるようなオト。

　どうやらいっしょにはいれないみたいだ。

『大丈夫。家まではこいつがちゃんと付いてってくれるから』

　ごしゅじんさまは、とくべつなごしゅじんさまをみながら、オトをだす。

　よくわからないけど、このとくべつなごしゅじんさまとなかよくすればいいみたいだ。



　またごしゅじんさまたちがオトをぶつけあっている。

『つべこべ言わない。行ってくれたら今日のお昼おごるから』

『まかせとけ』

　とくべつなごしゅじんさまが、じぶんのからだをたたいて、うなずいた。

　なかよくしてくれるみたいだ。

『よし、いくぞウリボウ！』

「ぷひ！」

　ぼくは、とくべつなごしゅじんさまといっしょに、はしりだす。

『おっと、待ちやがれ俺の昼飯！』

　こわいオトがむけられたきがした。

　ボクははしる。とくべつなごしゅじんさまといっしょにはしる。

　でも、はしりながらかんがえる。

　ごしゅじんさまは、このとくべつなごしゅじんさまに、すごくきになるオトをむけていた。

　あたたかくて、すこし……ほんとうにすこしだけはずかしそうなオト。

　ときどき、ボクにだけおしえてくれるとくべつなオト。

　そうか、だからとくべつなごしゅじんさまは、とくべつなんだ。

「……ぷひ？」

　きがつけばボクだけだった。とくべつなごしゅじんさまのニオイがなくなっている。

　はやくはしりすぎたみたいだ。

　ボクはあわてる。あのとくべつなごしゅじんさまは、なかよくしたほうがいいごしゅじんさま。

　とおったところをもどる。よくおぼえていないけど、ニオイをおいかける。

　そらにあるみずのニオイはちがづいてきている。はやくみつけないと、ニオイがきえてしまう。

　いっぱいあるいた。

　とくべつなごしゅじんさまのニオイがなくなって、みたことのないところにきてしまって……。



　おそらから、ちいさなみずがいっぱいいっぱいおりてくる。

　ボクのうえにいっぱいおりてくる。

　つかれた。

　けはいがした。しらないごしゅじんさまのけはい。

『だいじょうぶですか？』

　ねむくなってきたボクにむけられるオト。あんしんしたようなふあんそうなオト。

　どのごしゅじんさまだろう……いろいろなニオイがまざっている。

　でも、ボクはねむい。めをとじる。

　からだが、ういたきがした。あたたかい……。

　…………。

　……。

「……ぷひ？」

　めをさますと、ぼくはやっぱりういていた。

『ん？　起きたか』

　あきれたようなオトがボクにむけられる。

　おぼえのあるニオイ。ボクはとくべつなごしゅじんさまにだかれていた。

『さっさと行くからこんな目に遭うんだぞ。ほら、杏の家まで道案内しろよ』

　とくべつなごしゅじんさまは、ぬれたボクを、みずからまもりながらオトをむける。

　みずのニオイだらけのなかに、なつかしいニオイがした。

　そう、これはボクがごしゅじんさまにはじめてあったときのニオイににている。

　オトにはかくされている、ごしゅじんさまのほんとうのニオイ。

　あたたかいとは、すこしちがうニオイ。

「ぷひっ」

　ああ、これは〝やさしい〟というニオイだ。

10 おまじないのヒミツ

文：麻枝准



　昼休みの資料室。

「では、今日も、おまじないですね？」

　そこには、いつものように食後のコーヒーをいただく俺たちと、おまじない百科を開く宮沢有紀寧の姿があった。

「いやっ」

　春原が手でそれを制する。

「いつも、僕たちだけ楽しませてもらってて悪いよ、有紀寧ちゃん」

「いえ、おふたりに楽しんでいただければなによりですよ」

「いやいや、今日は有紀寧ちゃんがおまじないをする日にしよう。ほら、本貸して」

　身を乗り出し、ひょいと本を奪い去ってしまう。いつも痛い目に遭ってるからか、あるいは好奇心からか。

　どちらにしろ、自分とは関係なくなったようで、この昼休みはゆっくり過ごせそうだ。

「僕らが前にやったの、やってみてよ。えーと、どこだ……」

「はい？　なんでしょう？」

「あ、あった。これ。あなたのことを好きな人がわかるおまじない！」

　ぎくり、と俺は体を強ばらす。

「今から言う呪文を唱えた後、校舎の廊下をぐるり一周してくる。その途中で話しかけられた人……それが、あなたのことを想ってる人っていうやつ」

「そんな……恥ずかしいですよ！」

　困ったように照れ笑いを浮かべる宮沢。

かわいい……が、止めなければ。

「おい、嫌がってんだから、やめてやれ」

「お、なんだ、岡崎。さては照れてるな？　自分が真っ先に出会ってしまうんじゃないか、とか考えてんだろ？」

「俺は絶対、この資料室から出ないからな……」

図星をつかれて、俺は意地を張る。

「ふん、クールガイを気取りやがって」

「それに誰にも声をかけられなかったら、悲しいじゃないですか」

宮沢が苦笑いをしながら。

「いや、僕がそうだったんだけどね……」

「あはは……それは失礼……」

こういうところが宮沢は天然だった。

「大丈夫、有紀寧ちゃんには少なくとも僕がいるからさ！」

「本当ですか？　だったら、安心ですね」

結局阻止できなかった。

「それでは、両手の親指と人差し指でハートマークを作って、それを胸に当ててください」

春原が説明し、宮沢が言われた通りにする。いつかとは立場が逆転した光景。

胸の前でハートマークを作る宮沢はとてもかわいらしかった。

「オモイオモワレフリフラレ、オモイオモワレフリフラレ、オモイオモワレフリフラレ……」

そのポーズのまま教えられた呪文を唱える。

　ちなみに宮沢が所持しているおまじない百科のおまじないは、必ず効果を発揮するという恐ろしいシロモノだった。

「では行ってきます」

　声に我に返ると、宮沢が資料室を後にしたところだった。

「さて、何人現れるかなぁ」

「なんだ、おまえ、それでライバルの数を見定めようって魂胆か？」

「まあね。僕ひとりだったら、そのままコクっちゃうよ、へへ」

　にたりと笑う。

「じゃ、そろそろ行こうよ」

「え？　どこへ」

「どこって、有紀寧ちゃんと遭遇しにだよ。早く行かないと戻ってきちゃうよ？」

「それはおまじないの内容を知ってるから取れる行動であって、それじゃ好きな証明になんないだろ」

「好きなのは自分でわかってるからいいんだよ。自発的に動かないで、会えるわけないじゃんっ」

「いや、偶然が起きるからこそ、おまじないなんじゃないのか？」

「どんな偶然が起きるってのさ」



「いや、そこまでは……」

　その時。じじ、と校内スピーカーの電源が入った音がした。

『３□Ｄ岡崎朋也、春原陽平。至急職員室まで来なさい』

　そう告げた。

「こえーっ！」

　ふたりで目を見合わせる。

「やっぱりホンモノだな、あのおまじない百科……」

「ほら、いこうぜ、今度は偶然できた用だし」

「いやだ、いかない」

「うおぉっ！　まじであの強力なおまじないに逆らう気かよ……」

「このまま宮沢と顔を合わしたら癪しゃくだからな……」

「あんっ！」

　春原がいきなり女みたいな悲鳴を上げて、内股になる。

「どうした」

「いや、なんだか……尿意が……」

「マジかよ……」

　これもおまじないの効果なのか？

「う……」

　俺のほうは胃に胸焼けのような違和感。吐き気を催してきた……。

　これも同じくおまじないの効果なのだろうか……怖ろしい……。

「うわ、目に何か入った！　虫だ！　しかも両目！　ぎゃーっ！」

　春原がぼたぼたと両目から涙をこぼし始める。

「さらに追い打ちのように尿意が！　うわああぁぁーっ！」

　泣き叫びながら必死に内股で尿を堪える春原。

　ここらで許してあげてください、と頼みたくなるくらい情けない姿だ。

　俺のほうは頭痛までしてきて、立ってられなくなる。

「おまえたち、見つけたぞっ！　職員室まで連行だ！」

　さらに教師の声まで錯さく綜そうする。

　なんだ……、この……まじないの力は……。

「ぎゃー……」

「うあー……」

　そして、涙を流し続ける春原と具合を悪くした俺が教師に連行されていく途中で手を伸ばしてすがったのが、そこにいた宮沢なのだった。

「おふたりだったとは、照れてしまいますね」

「いや、俺たちは純粋に助けてほしくて声かけたんだけど……」

「でも、これで僕の愛が証明されたね！」

「泣きながら言うなよ」

「先生の言うことは聞かないとダメですよ？　その後、介抱でもなんでもしますので」

　その後、午後の授業が始まるまで、遅刻のことで、担任にみっちり絞られることに。

　放課後の資料室。

　宮沢は机に向かって、懸命に、10円玉二枚を縦に重ねようとしている。

　その姿もかなりかわいらしい。

　が……これも強力なおまじないのひとつだ。

　意中の人と体育倉庫に閉じこめられてしまう、というまたとんでもないもの。

　さっきのまじないの結果に気をよくした（するか普通？）春原が、宮沢なら自分を選んでくれるに違いない、と鼻息荒く頼み込んだものだった。

　あれだけの目に遭ってながら、健気なものだと感心する。

「あ……やりました、できましたっ」

　宮沢が両手を握って、ガッツポーズ。

　その前には、絶妙なバランスで縦に並ぶ二枚の10円玉。

「オーケー、じゃ、呪文をどうぞ」

「スピードノキアヌリーブスノゴトク……スピードノキアヌリーブスノゴトク……スピードノキアヌリーブスノゴトク……」

　宮沢がおまじないを呟くと、10円玉は音を立てて崩れた。

「成功、ですね」

「よし、じゃ、いこうか、有紀寧ちゃん」

「こらこら、あたかも選ばれたかのように一緒にいくな」

　宮沢を連れていこうとする春原の首根っこを引っ張る。

「え、だって、僕のこと思い描いてくれたよね？」

「それは、内緒です」

　春原の問いかけに、眉を寄せて、曖あい昧まいな笑顔で返す。

　宮沢には俺たち以外に、もっと親しい仲間が何十人といるんだ。俺たちである可能性のほうが低いぐらいだが、それでも、やっぱり自分じゃないとがっかりしそうだ。

　昼のおまじないで、ふたりともが宮沢に好意を寄せていると判明した後だけに、なおさら。

　それで別の男を選ばれていたら、立つ瀬なし、というものだ。

「わたしは、体育倉庫の前に立っていればいいんでしょうか？」



「俺のときはそうだったけど」

「ではいってきます」

　宮沢が出ていくと、資料室には春原とふたりきりになる。

「どうだ、なにか予兆は？」

　いや、と春原は悲しげに首を振る。

「よし、俺が目潰ししてやろう」

「なんでだよっ」

「俺は今無性におまえに目潰しをしたい。これは、おまじないの力じゃないのか？　そして、ぎゃー！　となったおまえは、どこに駆け込む？」

「体育倉庫か、なるほど！　って、んなとこ駆け込まねーよっっ!!」

「ばれたか……」

　時間が経っても、何も起こらない。

「ほんとに僕じゃないのかなあ……」

　春原はショックの色を隠せないでいる。

「みたいだな。俺でもないようだし」

「お昼の俺たちが馬鹿みたいじゃん。ふたりとも振られたってことだよ？」

「言うなよ、わかってるから」

「くそー……こうなったらもう負けでいいから、相手の顔見にいこうぜ、どんなイケメンが有紀寧ちゃんの心をゲットできたのかをさぁ！　気になるだろ!?」

「ものすごい負け犬っぷりだな……」

　表に出て、グラウンドまで回り込む。

　体育倉庫の扉は閉ざされていた。春原が必死になって押したり引いたりするも、徒労に終わる。

「今この中で、有紀寧ちゃんと、イケメンがあられもない状況に!?　くそ――っ！」

「まだ見てないのにイケメン言うな」

「じゃ、見てから言うよ」

　体育倉庫の壁に沿って歩き出す。

「どうやって」

「後ろ。フェンス登ったら、窓から見えるんだ」

「へぇ」

　知らなかった。その後に続く。

　春原の言う通り、高い位置に小さな窓があった。

　春原は裸足になって、フェンスによじ登る。窓がある位置までくると、両足を開いて、忍者のように壁とフェンスの間に自分の体を固定させた。

　ズボンの後ろポケットから十徳ナイフのようなものを取り出して、それを小窓の隙間に差し込む。

　かちりと音がした。解錠に成功したようだ。

　ナイフをしまうと、窓に手を伸ばす。

「へへ……」

　変質者にしか見えない。

　開いたわずかの隙間に、顔を寄せていく。

「お、有紀寧ちゃん、発見。話し声が聞こえる……」

「相手は」

「んー……？　どれどれぇ〜？」

　変質者よろしく、いろんな角度から舐めるように覗き込む。

「いないねぇ……有紀寧ちゃん、ひとりだよ」

「んなわけあるかよ、あのおまじないだぞ？　まだ来てないんじゃないのか」

「でも、話してるよ」

「誰とだよ」

「さぁ」

　相手がいない。なのに話している？　なんだそれは。独り言か？

「もしかしてさ……」

　春原が内緒話のように小声で言う。

「僕に告白する練習をひとりでしてるんじゃない？」

「おまえ、生きてるの楽しそうでいいなあ」

　その根拠のないポジティブさは羨望に値する。

「ここに本人がいるってのに、あほな子だなあ、有紀寧ちゃんは。よし、いくぜ」

「どこに？」

「中に」

「どうやって」

「この窓から」

「それ、やばくね？」

「やばくないって。よし、颯さっ爽そうと登場するよ、有紀寧ちゃん」

　あの小窓から這はい出てくる春原は、きっと妖怪か悪魔みたいだろう。

「なにやってんの、あんたたちっ！」

「うわぁ」

　女の怒鳴り声が春原を驚かせた。

　掃除当番なのか、大きなポリバケツを抱えた杏が横から俺たちを睨みつけていた。

「覗き⁉」

　俺は関係ないから、と身を引く。

「あ、ちょっと待って、辞書投げる気でしょ？　今、やばいって、見ての通り受け身取れないからさっ」

「あ、そ。じゃ、クッションあげる」

　春原の真下に、ポリバケツを置く。中身は生ゴミだろうか、生臭い匂いがここまで漂ってくる。



　杏は俺と反対方向に離れていって、振り返る。

「さて、何発もつかしら？」

　その手には、辞書。ワインドアップに構える。いつも持ち歩いてるのだろうか。

「え、ちょっと待って、わけわかんないよ、当たって落ちたら、僕生ゴミの中に直行だよ？」

「じゃ、がんばって耐えなさい。せーのっ」

　しゅっ……ずごんっ！

　痛々しいゲームを背に、俺は体育倉庫の正面に戻る。

　相手がいない。なのに話している。その真実を明らかにしたい。

　俺は無駄と知りながらも、ドアノブに手をかける。

　がらがらと音を立て、それは開いた。

　拍子抜けした。

　中に傾いた陽の光が差し込む。

　その先に、宮沢がひとりでしゃがみこんでいた。

　確かに話し相手はいない。

「邪魔したか？」

「いえ、もう終わりましたから」

　立ち上がり、ゆっくりと振り返る。

　その目にはうっすらと涙が浮かんでいた。

　その手がかりで、謎が解けた気がした。

　彼女が逢おう瀬せを求めた相手……その正体。

　そんな不思議なことがあるのだろうか？

いや、不思議なことなんて、これまでいくつでもあったか……。

そのことに今さら気づいた。

『彼』は、そうしてずっと、彼女と遊んでいたんだろう。

不良になって家に居場所がなくなってからも、彼女のもとを訪ねてきたように。

俺は宮沢を優しく抱き留める。

遠くで、ぎゃ！　という悲鳴が聞こえた。

「なんでしょう？」

「なんでもない」

気にかけた宮沢の頭を撫でて、安心させる。

悲鳴は強行突破に失敗した春原のものだろう。

もし、俺がここにいることも、『彼』の力なのだとしたら……。



俺は、認めてもらえたのだろうか？

彼女の大事な人に。

今はもう亡き人に。

そして、その日を境におまじないの力は弱まっていった。

それは、二度目の決別なのだと思った。

でも宮沢は、悲しい顔は決して見せなかった。

おまじないの力が発揮されようが、されまいが関係なく俺たちは笑っていた。

　季節は移ろい、秋。

　俺はデートの待ち合わせで、街角にひとり立っていた。

　相手はもちろん宮沢だ（いまだに下の名前で呼ぶのは恥ずかしい）。

　街頭の出店に並ぶ『おまじないグッズ』を冷やかしながら時間を潰す。

　こんなもの、全部まがい物だ。

　そして、宮沢の大切に持つおまじない百科も、今はそのひとつだ。

　隣から、賑やかな女子の声が聞こえてくる。

　他校の生徒だろうか。衣替えしたての制服が目にまぶしい。しばらく見とれてしまう。

　か――――――んっ！

　頭に缶が当たった。

　髪を撫でながら振り返ると、ちょうど宮沢がやってきたところだった。

「すみません、遅くなってしまいましたー……待ちましたか？」

　無垢な笑みを浮かべてそんなことを訊く奴が、缶を投げるわけもなく……。

　俺は周囲をうかがう。

「どうかしましたか？」

「いや……」

　……まだ、いるんじゃないのか？

11 ふたりの思い出

文：麻枝准



「あなたが芳野祐介先輩かしら」

　あたしが目の前に立って話しかけようとも、ギターを弾くことを止めない。

「ねっ」

　そのネックを弦ごと掴んで、強引に演奏を止める。

「………」

　ようやく現実に返ってきて、あたしの顔を見てくれた。

「……邪魔だ」

「それは失礼。でもあなたに話があるのよ。いつになっても演奏をやめないから。こっちも忙しいし」

「なんだ」

　艶のある低い声。顔もきれいだし、いかにももてそうだな、と癪しゃくになる。

「去年の創立者祭、飛び入り参加で、プログラムを無茶苦茶にしたという前科があるので、前もって注意しにきたの」

　前科者は黙って聞いている。

「出るなら、ちゃんと部活に所属して、プログラムに従って出てください。それが無理なら出ないでください」

「そんなこと言われても困る」

「どうして」

「俺は歌いたい時に歌うんだ。そん時になってみないとわからない」

「は……？　わからない……？」

　その返答に唖あ然ぜんとしているうちに、相手はまたギターを弾き始めていた。

「こらっ、まだ終わってないっ」

　もう一度ネックを摑む。

「なんだ……」

「そんな適当な返答じゃ帰れないの。出るなら出る、出ないなら出ない、どっちか決めて」

「そんなこと言われても困る。俺は歌いたい時に歌うんだ。そん時になってみないとわからない」

　なんだ？　こいつには再生機能がついているのか？

　馬鹿にされてるようでふつふつと怒りがこみ上げてくる。

　その神経を逆さか撫なでするように、相手はギターをまたつま弾き始める。

「こっちだって困るのよっ！　出るのか、出ないのか、それ以外の返答は認めない！」

　そう大きな声で怒鳴りつけるしかなかった。

「………」

　芳野祐介は手を止め、しばらく目を伏せて考え込む。ようやくこちらの真剣さが伝わったようだ。

　長いまつげの並ぶまぶたが、また開いた。そして決断の表情であたしを見た。

「そんなこと言われても困る。俺は歌いたい時に歌うんだ」

「うあああぁぁあぁぁぁあぁぁあぁぁぁ──っ！」

　キレた。

　そいつの首根っこをひっつかんで、教室を後にする。

　ずりずりと廊下を引きずって歩く。

「うおっ、芳野先輩が女に引きずられてるぞっ」

「やるなぁ……あれ、誰だっけ」

「新任の生徒会長、相楽って子よ……」

　なんかいろいろ言われてるが気にせず進む。

　辿りついたのは、軽音楽部の部室。

　そのドアの前、ギターやドラムの音が聞こえてくる。

　意味をなさない形だけのノックの後、ドアを開け放つ。

「うおおぉぉぉぉぉおおおぉぉぉ――――っ！」



　そこには、あたしがここまで引きずってきたはずの、芳野祐介がギターを手に絶叫していた。

　自分の手を見る。すでに何も摑んでいない。

「人があなたのために頭下げて、入れてもらおうとしてんのに……」

　勝手に体が動いて助走していた。

「先回りするなああぁぁぁ━━━っ！」

　床を蹴って、ドロップキックを放つ。

　芳野祐介の体がギターごと派手に吹っ飛んだ。

　床を滑った後、むくりと起きあがり、こちらを見る。

「なんだ、生理か。それは勝手だが、俺に八つ当たりするな」

　寄っていって、襟を摑んで立ち上がらせる。

「あんたが、あたしを怒らせてるのよ……」

「俺が？　初対面のあんたとの間に一体何が？」

「その初対面からの短時間でずいぶんあったわ……」

　軽音楽部の演奏は止んでいた。まあ、今の騒動を前に続いていたほうが不自然だけど。

　あたしは、生徒会長として軽音楽部の面々に頭を下げる。



　一曲でいいから、創立者祭の発表会にこの人を加えてあげてくれませんか、と。

　相手はたじろいでいる様子だった。

「たぶん、曲が先輩には合わないんじゃないかと……」

　部長だろうか、ドラムを叩いていた子がそう恐る恐る口にした。

「曲？」

「音楽性、と言うか……」

「さっき、合ってたじゃない」

「いや、あんな咆ほう哮こうするような曲じゃないんで……」

「具体的になにやるの？」

　部長の口から挙がったのは、有名な女性ボーカルのバンド名だった。あたしも知っているが、確かに咆哮するようなバンドではない。

　じゃあ、部室の隅に隠れるように立っている女の子がボーカルか。

「去年の先輩たちは、ピストルズとかやってたんで、入れたと思うんですが……」

　よくわからないが、そっちは吠えてもいい音楽なのだろう。

「そっちはできないの？」

「今から練習になるんで、間に合わないです」

　あたしは腕組みし、どうしたものかと思案する。

　恐らく何もせずに当日を迎えれば、また軽音楽部の舞台は乗っ取られてしまう。あたしの手から逃れ、いつの間にか部室の中心で雄叫びをあげていた先ほどの一連の行動からも、それは容易に想像できた。

　乗っ取られるよりは、先に一曲与えてあげておくほうが得策だろう。

「じゃ、今練習してるバンドの歌でいいから、一曲、あの人に歌わせてあげてくれない？」

「それで、今年は何事もなくすむんだったら……」

　軽音楽部のリーダーはそう譲歩してくれた。

「ありがとう」

　芳野祐介の問題が片付いたからといって、仕事が終わったわけじゃない。

　試し刷りの終わったプログラムを片手に文化部の出し物にミスがないか、演目の順番は本当に合っているかなども調べないといけない。それが終わったら、当日の警備をお願いしてる風紀委員会に出ないと……。

　頭の片隅でやらなければいけない仕事をそらんじながら、あたしは文化部棟を歩き回って確認をしていた。

　すると、通りがかった軽音楽部の部室から騒がしい声が聞こえてくる。

　またか、と思いドアを開けると、案の定、芳野祐介が部員と揉めていた。

　あたしを認めた部員のひとりが、次のように訴える。

「この人、間奏になると、ドラッグにいかれてぶくぶく太り始めたとか語り始めるんですっ」

「そっちのほうがギリギリな感じがするだろ」

　あたしは芳野祐介の背後に回って、その首を締め上げる。

「そんなギリギリ感いらないのよっ」

「いてぇーよっ」

　芳野祐介はあたしの手首を掴むと、いとも簡単に引きはがしてしまう。

　その時、あたしは気づいた。あ、あいつとは違うんだって。

　女みたいに華きゃ奢しゃだったあいつとは。

「どうした、痛かったか」

　ぼーっとしていたのか、そんなふうに気遣われてしまう。

「ううん……」

　首を振った後、他の打開策を講ずる。

　軽音楽部にはこれ以上迷惑はかけられない。芳野祐介の手を摑んで、廊下に引きずり出す。

「軽音楽部に入れてもらうのが無理だったら、他の部に泣きつくしかないわね……」

「泣きつく？　どうして」

「自分の立場をちゃんとわきまえなさい。現状あなたが、創立者祭の舞台に立つには、どこかの文芸部の助っ人、という形だけなのよ」

　あたしは芳野祐介を引きずって、いろんな文芸部を回った。

　どこかで一曲歌わせてあげてくれないか、と。

　でも、どの部からも、絶叫の入るような品のない曲は要らないと断られた。

　彼の絶叫ソングは文化部の間では有名らしい。

　後ろを歩く芳野祐介は、肩を落としているのだろうか、静かだった。

「落ち込まないでね」

　そう振り返る。

　ん？　と芳野祐介は不思議そうな顔をした。

　あたしは自分を馬鹿だと思った。

　この人は元々口数が少なく、そして、こんなことで落ち込むような手合いでもなかった。

それはあいつと過ごしていた時間の……癖のようなものだった。

「あんたのほうこそ、俺なんかのために時間を潰していていいのか？　もっとあんたを必要としている人間がいるんじゃないのか」

その言葉が胸に突き刺さる。

あたしは代わりの誰かの世話を焼いて……それで気を紛らわせていたのだろうか。

……違う。

あいつの代わりになんて誰もなれない。あいつは、あんな奴だったから……ただ純粋で、それ以外に取り柄なんて何ひとつないような、そんな奴だったから、あたしは好きになったんだ。

「歌をプレゼントしよう」

脈絡のなさに、あたしはその言葉の意味を理解できずにいた。

理解するまで彼は黙って待っていた。

理解すると、それはまたあたしの神経を逆撫でする冗談のひとつと受け取った。

「結構」

けど、彼は譲らずに続ける。

「歌は救いにはならない。だが、支えにはなる」

あたしは泣きそうになる。

あたしが支えなんて必要としていること。

それがばれたのが、悔しい。

自分でも認めたくなかったことなのに。

芳野祐介はギターケースからギターを取り出し、準備を終えていた。

何本かつま弾く。ストラップにつけた小さなアンプからきれいな

音がした。

　今ラブソングなんて歌われたら、あたしはどうなってしまうかわからない。

　怖かった。逃げ出したくなった。

「ワン、ツ、うおおぉぉぉぉぉおおおぉぉぉ――――っ！」

　どぐしっ！　と芳野祐介を蹴り飛ばしていた。

「そんな絶叫が支えになるかっ」

「悪い。今初めて真剣に悪いと思った。選曲を誤った」

「あんたのセンスじゃ、何歌ったって同じよ」

「今度は大丈夫だ」

「あたし、忙しいのよ。おひとりでどうぞ」

　あたしは芳野祐介を残し、階段を上がり、生徒会室へ。

　階段の途中で、軽音楽部の部長と鉢合わせになる。

　お疲れさま、と頭を下げ合う。

　そのまま通り過ぎようとしたが、あの話どうなりましたか、と向こうから話しかけてきた。

「あのって……芳野祐介？」

「ええ」

「どこでも門前払いよ。自業自得ね。今、一階でひとりで歌ってる。あいつにはそれがお似合いよ」

「そうですか……」

　部長は重苦しくため息をついた。

「気になってんの？」

「ええ……追い出すようなことして悪いことしたなって。でも、芳野先輩も、悪気はなかったはずだし、音楽が好きなのは一緒ですしね」

「あんたいい奴ねぇ」

　あんな奴にかける情けが残っているとは。あたしのそれはさっきすべて消え失せたところだ。

「それで僕だけでもよかったら、一緒にやろうと思い直して。ドラムだけだったら、少しの時間で合わせられる自信あるんです」

「ギターとドラムだけ？」

「ええ。僕が軽音楽部の部長として、彼を助っ人として呼んだということにすれば、話は通るんですよね？」

「そりゃ、まあ……」

「それに僕も、激しい音楽、好きなほうなんです」

「あ、そ……」

　こんな簡単に解決してしまうなんて。あの男を引きずり歩き回った今日一日はなんだったんだ？

　どっと疲れが出て、階段の手すりにもたれてしまう。

「じゃあ、悪いけど、一曲だけお願い」

「はい」

「一曲だけよ？　二曲以上歌わせたら止めに入るから」

　創立者祭当日。朝からあたしは雑務に忙殺されていた。

「会長、来賓さんからの花束、どこに置きます？」

「あ、それ、事務室の前に飾っておいて」

　ばたばたと走り回り、急いで指示を出す。

「裏門の設営から、パンフレットが足らないって来てるんですが」

「生徒会室に予備があるから、誰か持っていってあげて」

　あれだけ準備をしたのに、山のようなトラブルが舞い込んでくる。

　廊下や中庭では、創立者祭を思い思いに楽しんでいる生徒と一般客が見える。

　その中のひとりが話しかけてきた。

「やっと美佐枝見つけた」

　親友のサキだった。隣にユキもいて、こいつはクレープを食べている。

「礼言いなさいよ、そうやってあんたたちが楽しんでいられるのも、あたしたちのおかげよ？」

　足を止めて一息つく。

「そりゃご苦労様。でもあたしたちものんきに遊んでるだけじゃないよ。ね？」

　サキがユキに目配せ。ユキはクレープを食べたまま、頷く。

「じゃ、急ぐから」

　それだけの会話を交わして、その場を去る。

「会長、そろそろ軽音部の発表なんですけど……」

「はいはい、今行くからっ」

　芳野祐介が暴走しないとも限らない。だから、あらかじめスケジュールに体育館を見張れるよう時間を割いておいたのだ。

　体育館は用意されたパイプ椅子が足らず、立ち見客が出るほどの盛況ぶりだ。

　スピーカーから響くのは、音のチェックをしているのだろうか、ノイズまじりのギターの音。

　ちょうど今から始まるようだった。

　明るい女の子のボーカルで会場は賑わい、拍手の内に軽音楽部の発表が終わる。

　そして舞台袖からギターを片手に芳野祐介が出てきた。

　事情を知らない観客はざわついているが、一部から拍手が聞こえてきた。校内では有名人だから、もしかしたらファンがいてもおかしくはない。

　部長がドラムの調整をして、芳野祐介と頷き合う。速いカウントが小さく響き、スピーカーから歪んだギターの音と、それに負けないほどの特徴のある芳野祐介の声が轟いた。

　騒然とする場内は、ドラムとシンクロし、リズムのある喧騒となっていく。

　振り絞るようなシャウトで曲が終わり、それにかぶさるように割れんばかりの拍手。

　軽音楽部には悪いけど、それより大きな喝かっ采さいだった。

　ぱらぱらと拍手が止み、照明が落とされる。

　が、まだ芳野祐介に退く気配はない。

「ではもう一曲」

　マイクを通してそう伝えた。

　結局こうなるのか。

　あたしは幕を下ろす指示を出すために、人混みを掻き分けて、楽屋となっている体育倉庫へ向かって歩き出す。

「これからやる曲は、新しい生徒会長さんに捧げます。えーと、名前はなんだっけな……」

　客席から、さがらーと声があがる。

「ああ、佐川さんか」

　どこまで人の神経を逆撫でするやつなんだ。

「では、新生徒会長の佐川さんに捧げます。できたらみんなで歌ってほしい。約束で俺が歌えるのは一曲までだから」

　しまった、と思った。

　二曲以上歌ってはいけないと釘は差しておいたが、ギターを弾いてはいけないとは言ってなかった。

　完全にあたしの落ち度だった。これでは、強引に止めることもできないじゃないか。

「みんなよく知ってる歌だから。有名な映画の主題歌だ。歌詞は、えーと、よろしく」

　彼が舞台袖に顔を向ける。そこには、スケッチブックを抱えた女生徒ふたりが立っていた。

　サキとユキだった。

　スケッチブックをめくると、そこには英語の詞がマジックで書き綴ってあった。

　あたしの知らないところで、あいつらは……。あたしは、立ちつくし、ため息をつくしかなかった。

「ワンッ、ツ！」

　スタッカートの利いたイントロが始まる。

　馴染み深い低音のライン。それは彼の言葉通り、誰でも知っている歌だった。

　みんなが思い思いにそのスタンド・バイ・ミーを口ずさむ。



やがて大きな合唱となって、体育館に響き渡った。

あたしは顔を伏せて、それを聴いていた。

芳野祐介は知っていたのか。いや、知らないはずだ。

でも、その歌は、あたしの心の奥深くまで届く。

それが……あいつの言葉なんじゃないかと思うほどに。

『……いつまでもあたしのことを好きでいてください』

そう伝えたら、泣きながら、ありがとうと言って……

そして、それっきりいなくなったあいつの思いのようで……

あたしはぽたぽたと床に涙を落とした。

いつまでも溢れてきて、止まらなかった。

僕は怖くないよ　君がいてくれたら

君が僕のそばにいてくれたらね



12 先生の思い出

文：麻枝准



縁側に腰を下ろし、庭を眺めていた。

独り身には広すぎる庭だ。

けど今日はじき、ふさわしいほどに賑やかになるだろう。

かつての教え子が、家族を連れて、遊びに来るのだ。

「わー、広くて素敵な庭ですっ、池までありますっ、フナですっ、エサあげてもいいですかっ」

「あーもう、ふぅちゃん、テンション上がりすぎよ、まずは挨拶が先でしょっ？」

「こんにちは、初めまして、風子です……って、行ってしまいましたっ」

「フナにじゃなく、こちら、幸村先生にっ」

ふさわしいどころか、この庭でも持て余し気味である。

「お騒がせしてすみません。おじゃまします」

丁寧にお辞儀する彼女が伊吹公子。わたしの教え子だった。

庭を駆け回っているのが、彼女の妹で、名を風子。長い入院生活を終え、今そうして元気でいる姿を見ることは、なによりもうれしい。

「初めまして、芳野です」

公子さんの隣に立つのが、公子さんの婚約相手の芳野さん。

「初めまして、幸村です」

話には聞いていたが、確かに美青年だ。穏やかな印象で、きっちりとした挨拶をくれた。公子さんも良い相手を見つけたものだ。

「さあ、お茶を煎いれたので、こっちでくつろぐといい」

縁側に座布団と、昨日買ってきた洋菓子を並べ、紅茶を煎れる。

　爺には似合わんが、若い者にはいいだろうと買ってきた品。

「むくつけき手ですまんがの。こっちも遠慮なく食べるといい……」

　公子さんと芳野さんはすぐ座布団に腰を下ろしてくれたが、ひとりだけは姿すら見あたらなかった。

　庭を見回すと、池のそばで背中を丸めて座り込み、こっちの様子を窺うかがっていた。

　まるで子犬が警戒でもしているようでおかしい。

「ふぅちゃん、なにしてるの、こっちきなさい」

「やさしい人ですっ。おねぇちゃんの話とは違いますっ、なにか裏があるに違いありませんっ」

「ふむ……違うとな？」

「おねぇちゃんは、幸村先生はもっと厳しくて、すごく強い人だって言ってましたっ」

「ふぅちゃんっ」

「ふむ……」

　厳しくて強い人、か。それは間違ってはなかろう。

　それが迷いながら、苦しみながらも、教員生活で貫いた姿勢だ。

「でも、おねぇちゃんは嘘はつかないです」

「……強いかどうかはともかく、怒り方は厳しいとは言われていたの」

「本当ですかっ。風子、厳しく怒られますかっ」

　跳ねるようにして、今度は植木の後ろに隠れてしまった。

「大丈夫、怒ったりはせん……」

「校庭でちぎっては投げたりしませんか？」

「そんなことはしやせん……大丈夫だから、こっちにきて食べなさい」

「風子、甘いものには興味がないのでつられません……でも、疲れたので座ります」

　おずおずと木陰から出てきて、縁側に座った。公子さんとわしの間に空けられた場所へと。

「そんなこと言わずに食べてみなさい、ふぅちゃん絶対気に入るから」

　公子さんの手から、妹の口へと洋菓子が運ばれる。



　ぱくり。

「んーっ、なんですかこれはっ、とてもおいしいですっ、そのおいしさの秘密は……とろけるような甘さですっ！」

「でしょ？」

「もっとあるから、たんと食べていきなさい」

　もぐもぐ……

　風子はご機嫌な様子で、犬のしっぽのように両足をぷらぷら振りながらお菓子を頬張る。

「しかし校庭での話なんぞもしおったのかの……」

「はい、おねぇちゃんが楽しそうに話してくれました。風子、先生の昔の話、聞きたいです」

「……ふむ」

　懐かしい話だった。記憶の隅に残っていた、若かりし頃の姿。

　公子さんを見ると、ばつが悪そうにうなだれていた。

　気にしなくてもよい、と頷くと、わしはひとつずつ記憶を解き始めた。



「確か、昭和の中頃だったの……」

　高度経済成長の最中に、わしは教職に就いた。

　赴任したのは、地元の工業高校。

　教育どころか、授業もままならないほど生徒たちは荒すさんでいた。

　先輩の先生方は半ば諦め、生活指導の先生は病気療養中という有様だった。

　若かったわしが生活指導という役職についたのも、そういう一面があったからなのだろう。

「あの頃はわしも生徒も無茶をしよってな……」

　校内までバイクを乗り入れ、廊下を暴走する。

　板書をしていると、黒板に投げナイフが刺さることもあった。

　そういった奴らをひとりひとり捕まえ、指導する。

　こらえ性がなく、時には鉄拳も振るった。

　夜中に呼び出され、校庭で決闘まがいのこともした。

「そうですよね。前に一度お会いした、確か……高木さんですよね」

「そうだったかの……」

「ほら、学校の近くまで来られたからご挨拶にって。一九〇センチくらいある大きな方で」

「……ああ」

　そうだった。わしの指導に最後まで反抗して。

　負けず嫌いで、何度も何度も喧嘩を挑まれて。

「三〇人くらいで囲んでも、先生びくともせずに全員ちぎっては投げて叩きのめしたって笑っていらしたじゃないですか」

「……あいつはいちいち大げさだからの」

　でもそんな奴らはまだましだった。喧嘩するほどの気力が有り余っていたのだから。

　オイルショックを挟み、世の中が平静に向かう頃、無気力な生徒が増え、登校拒否のあり方が変わっていった。家に乗り込んで両親に直接会いに行ったことなど数え切れないほどある。

「生徒指導室にご両親を呼んで説教なさったこともあったそうですが」

「……今にして思えば、恥ずかしい話だがの」

　無気力になる理由は様々だ。家族の問題や、学力の低下からの不登校、いじめ、孤立など。

　不良のレッテルを貼られ誰の話も聞かないと思われていても、大人が決めつけていただけで、諦めなければ話は通じた。

　一晩中町を探し回り、追いかけたこともある。

　家庭に問題があるなら、誤解を恐れず生徒だけでなく両親とも話し、時には対峙した。

　そうして、どんな子供も、この３年間は、挫くじけさせまいと思った。

　教え子は全員、卒業させてみせた。

「私はそこが先生の一番尊敬するところです」

「学生生活の三年間は、人生の縮図、というやつですね」

　公子さんの後に続き、芳野さんが初めて口を開いた。

「卒業という目標、その途中で挫折してしまっては、その後に待つ大きな人生でも挫折してしまうかもしれない。その考えは目から鱗と申しますか、深く感銘を受けました」

「ふむ……だが、それが正しかったのか、その頃はまだわかりかねておった………単に教師としての自己満足を押しつけているのではないか、思い悩む時期もあった」

「先生でも、悩まれるんですね」

「当然、人間だからの」

「それに答えを出してくれたのは、卒業生たち、なんですよね」

「ふむ。だが、その道に迷っている途中で背中を後押ししてくれたのは……」

　うつむき、目を細めて、地面のその向こうを見る。

「妻の言葉だった」

　仕事馬鹿だったわしは、彼女を看取ることもできなかった。

　職員室で電話を受け、彼女の最期を知った。

　その時も、学校を辞めてしまいたいと泣き言を口にする生徒を□しっ咤たしている最中だった。

　わしは亭主関白というやつで、妻のつまらぬ過ちに怒鳴り散らすことも多かった。本当に、最後の最後まで、こんな形で……幸せだった瞬間があったのか、自信がない。

　最期ぐらいは、そばにいてやりたかった。看取ってやりたかった。

　それが皮肉にも、疑問を抱いていた己の教育方針のせいで叶わなかった。その電話を受けた直後には、もうなにもかもがどうでもよくなった。自己満足の道徳よりも、もっと大事にすべきものがあったはずだ、と。

　葬儀の後、彼女の枕の下から、わし宛への手紙が出てきた。

　彼女はわしが、逝ってしまう時にそばにはいないことを予測していたのだ。最後まで本当に情けない夫だった。

　封を切って、手紙を広げた。

　性格同様の几き帳ちょう面めんな字が並んでいた。

　あなたより先に寝てはいけない

　あなたより後に起きてもいけない

　そんな流行歌のような暮らしでした

　あなたと一緒にいて、それは辛いときもあった

　あなたの憤りを理不尽に感じるときもあった

　あなたから離れたいと思ったときもあった

　でもね、大丈夫。自信をもってください

　あなたは間違っていません

　だって、あなたと一緒に過ごしてきたこの人生は、

　あなたのおかげでいい人生だったと今いえるから

　最後に、あなたより先に逝ってごめんなさい

　これだけは歌の通りにはいきませんでした

　わしは誰もいない病室でひとり男泣きをした。泣き明かした後は、もう迷いのない自分でいた。

　話し終えると、壮年の自分が遠くに消え、入れ替わり地面とそれを踏みしめる老いてやせ細った自分の足が浮かび上がってきた。

「すみません、そんな話を……」

　公子さんが言葉に詰まり、頭を下げた。

「なに、年寄りの昔話だ。なんてことない……」

「んがーっ、それはかなじぃおはなじでずっ」

　その手前、風子の顔は涙でぐしゃぐしゃになっていた。

「あー、もう、ふぅちゃん、鼻水があごから垂れて女の子としては大変な顔になってるよ？　拭こうね」

　かいがいしく妹の鼻をテッシュで拭く公子さん。親子のような姉妹だと苦笑せずにはいられない。

　その風子がとんでもないことを口にする。

「とても感動してしまいましたので、風子が奥さんの代わりになり

ます。風子に亭主関白してくださいっ」

「そんなこと言っちゃってまた………とても厳しいからふぅちゃんには無理よ？　ふぅちゃん、毎日わたしより先に寝て、わたしより遅く起きるでしょ？」

「はい、家ではかなり遠慮なしにがーがー寝させてもらっちゃってます」

　悪びれもせず言い切る風子だが、その素直さは微笑ましくもあった。すると芳野さんが、呆れまじりに笑いながら言った。

「それにあの歌の歌詞には、料理はうまく作れ、いつも綺麗でいろ、という節がある、できるのか？」

「う、痛いところつかれました。ぶっちゃけ、そこは避けて通りたいです」

「ぶっちゃけすぎだ。基本だろ……」

「料理は勉強中、お化粧はまだ、だもんね」

　姉と義兄に揚げ足を取られ、からかうように頭を撫でられている風子。これもまたおかしい。

「もーっ、まるで風子が妻としてはまだまだ未熟みたいにいうふたりですっ」

「いや、自信があるほうが、おねぇちゃん、びっくりだけど」

「でも、それでもですっ」

　ぴょこんと、立ち上がって、出し抜けにわしのほうを向いた。

「風子、すごく若いので絶対先には死にません。なので、先生の手を握り、先生のために涙をこぼすができますっ」

　それは歌の主人公が、妻を娶めとる前に最後に約束させることだった。

　じんわり胸に温かさが広がる。

　さすがは公子さんの妹さんだ。とてもいい子である。

「ありがとう」

　笑顔でそれだけを伝えた。

　日が陰りだし、わしはアルバムを閉じた。

　公子さんたちに、孫の写真を見せていた。

　子供たちはなかなか帰省できないでいた。ここからはるか遠くの地で忙しく働いている。

　その代わりか、孫の写真やビデオを何度となく送ってくれていた。

「お正月はお子さんたちと過ごされるのですか？」

「どうだろうの……あいつは忙しいからの……」

　会いたくないわけではないが、わざわざ忙しい中戻ってきてもらうのも気が引けた。



「では、いつか一緒に住まわれる予定ですとか」

「いや、妻の墓がこっちにあるからの……」

「ひとりでさぞ寂しいでしょう？」

「風子、代理妻なので、お正月来ます」

「いや、大丈夫……ご家族で過ごしなさい」

　わしはひとり納得顔で頷く。

「それに、ひとりでも、楽しみがあるからの……」

　公子さんが辞去を申し出たので、わしは門の前まで見送ることにした。

　しきりに遠慮していたが、年寄りの我わが侭ままと押し切る。

「……いつでも遊びにきなさい」

「はい、風子、いつでも来ちゃいます。今度はフナにエサをあげますっ」

　子供は風の子という言葉を思い出す。最後まで元気な子だ。

「……ふむ」

　東の空はもう青黒く染まっていた。

　大きく手を振る風子と、振り返ってはお辞儀をするふたり。

　そして、手を繋ぐ姿。

　深い夕映えを歩く影が消えるまで、ずっと見ていた。

　テレビには「おじいちゃんへ」とかしこまって喋る孫が映っていた。

　帰れない詫びを言いつつ、最近あったことをたどたどしく言う。

　どこか行楽に出かけたのか、地平線の広がる草原を駆け回る姿もあった。

　わしは目を細めながら、一枚一枚届けられた年賀状を、めくる。

　四〇歳を過ぎてやっと結婚しました、との報告がある。

　もう三人目です、と子供に囲まれた賑やかな写真付きの葉書もある。

　修業を終え、独立をした奴もいる。

　子供がもう大学を卒業し、教職を選んだとの書き込みもあった。

　そして、新しい記憶の中にいるふたりからも。

　金髪は黒く染められ、同僚に囲まれている写真に、「ジジィも長生きしろよ！」と相変わらずの汚い字。

　雰囲気に似ず端正な字と、可愛らしい字で書き添えられた年賀状には「娘も来年度から幼稚園です。ぜひ遊びに来てください」とあった。

　こいつらは手のかかった息子みたいなものだ。



　そばにいないが、こうして覚えていてくれる。

　もういつ逝ってもさほど未練はない。

　それでも、まだ覚えてくれている人がいるならそれを楽しみに生きるとしよう。

13
四年前の因縁

文：魁



「勝平さん、今日は未来と向き合う日のようです」

　椋さんがタロットカードを並べながら笑顔でそう言った。

　頬が引きつるのがわかった。

「どうしたんですか？　足、痛みますか？」

「あ、ううん、平気平気。術後経過もいい感じだし、今日もリハビリ頑張んないとね、あはは」

　ボクは頬の引きつりを覆い隠すように笑ってみせる。

　最近わかってきたことがある。

　最初は偶然かなぁ……と、次はたまたまだろうなあ……と、じきにわざとなのかなぁ……と、そう思っていた。

　けど、なんてことはなかった。単純な答えだった。

　椋さんの占いは……当たらないんだ……。

　窓の外を遠い目で眺めてみる。

「今日は未来を想像しちゃいけない日かぁ……」

「え？　なにか言いましたか？」

「ううん、なんでもないよ」

「そうですか。ではそろそろリハビリに行きませんか？」

「うん、そうだね。早くひとりで歩けるように頑張らないとね」

　ボクは体を起こすと、ベッドの横に立てかけておいた松葉杖を手にした。

　椋さんが立ち上がろうとするボクを支えてくれる。

「ありがとう」

「はい」

　リハビリ用のトレーニングルームまで行くこと自体が、今のボクにはリハビリの一環になっている。

　椋さんもそれをわかっているから、必要以上にはボクに手を貸さない。

　ボクは椋さんに見守られながら、病院の廊下を松葉杖を使いながらゆっくりと歩く。

「柊………勝平……？」

　不意に名前を呼ばれた。女の人の声……。

「え……？」

　ボクと椋さんは振り返る。

　そこにはズボンタイプの白衣……リハビリセンターのスタッフ看護師さんがいた。

　長い髪を動きやすいようにポニーテールでまとめているけど、こんな人は見たことがない。

「あんた、柊勝平よね？」

「う、うん、そうだけど……？　キミは？　もしかして新しい担当の人かな？」

「んなっ！　ま………まさかあんた……私のこと忘れてるんじゃないでしょうね……？　っていうか、忘れてる物言いよねソレ？」

「え……？　え……??」

「うーわぁ〜……本気で忘れちゃってるよ………予想ついてただけにムカつく〜」

「えっと、その…誰？　どこかで会ったかな……？」



「……四年前、私の大切な物を奪ってそのまま逃げたくせに……」

「！　!?」

　よくわからないけど、今、危険なセリフを言われた気がするっ。

　ボクは恐る恐る隣を見る。

「どうしたんですか？」

　振り向く椋さんは笑顔だった。微動だにしない笑顔だった……。

　とても………怖い……。早くここから離れないと。

「え……えっと、リ、リハビリ行かなきゃ、先急ぐんで、じゃ」

「あら、ちょうどいいわ。私もトレーニングルームに戻るところなの。今日からトレーナーになるのよ。あんたのリハビリの担当になるように上の人に言ってみるわ」

　うわわぁ……な、なんなんだろうこの人、ボクになにか恨みがあるんだろうか??

　凄く恐いよ。

　椋さんはなにも言ってくれない時が一番恐いんだから……。

「ほら、行きましょ」

「わ、わ、ちょ……ひとりで歩けるから別に肩は……わ、うわっ」

　椋さんが、椋さんが見てるのにそんな密着しないでよ～っ。

　私はトレーニングルームに入ると、壁際のイスに座った。

　スポーツトレーナーの資格も、看護師の資格もまだ持っていない私は、ただ見ていることしかできない。

　勝平さんの頑張る姿を、見ていることしかできない。

　今日ほどそれを歯がゆく思ったことはなかった……。

……勝平さんは、さっき出会った女の人と話をしながらリハビリを頑張っている。

「あんた、急速冷凍術を受けたのよね？　じゃあもう一度走るの？」

「それは無理だよ。いくら運動ができるようになると言っても、走ることをやめて時間が経ちすぎてる」

「ふーん、まあ足が残ったってことだけでも十分か」

「そうだね。普通に動く分には問題ないって聞いてるし」

「じゃあリハビリ頑張んないとね。はい、この平均棒、ゆっくりでいいから三往復ね」

「うん」

「にしても……随分気合の入ったリハビリメニューよね？　無理してもいいことなんかないわよ？」

「ううん、早く歩きたいんだ。自分の足で歩いて、届けたい物があるから」

「大事な物？」

「うん、とてもね」

資格さえ取っていれば、あそこで勝平さんと立っているのは私なんだろうな……。

でも……あの人は勝平さんにとってどういう人なのかな……。

四年前って言っていたけど……。

私の知らない勝平さんをあの人は知っている……。

とても気になる……。

…………ひょっとして、昔の彼女さん……?!

「隣、いい？」

「ふぇ？」

　突然声をかけられて慌てる。

　さっきまで勝平さんの隣に居たはずなのに。

「よいしょっと」

　女の人は私の返事をまたずに隣に座った。

「改めまして、こんにちは。私、冬木って言うの」

「こ、こんにちは……藤林です。あの……勝平さんの隣でサポートしなくてもいいんですか……？」

「んー、本当はしなきゃいけないんだけど、ま、大丈夫でしょ。あまり柊にくっついてると、あなたのシワ、取れなくなっちゃいそうだし」

　彼女は言いながら、自分の眉間をちょんちょんと突っついた。

　私は慌てて眉間を手で隠す。

　顔が熱くなる。きっと真っ赤になっている。

「あははは、可愛い反応。あなたってからかい甲斐あるわ」

「う……うう〜……」

「あなた、柊の彼女さん？」

「あ……ぅ……ぇ……えっと……はい」

　しどろもどろに答えてしまう。自信が持てないでいるみたいで恥ずかしい。

「……あ、あの、冬木さん……」

「ん？　なぁに？」

「冬木さんは……その……勝平さんとどういう関係……だったんでしょうか？」

「初めてのヒト♪」

　間髪入れない返答。

　その答えに、身体の中を嫌な物がこみ上げた。

　熱いのに鳥肌が立つような、例えようのない不快感。

　喉が痙けい攣れんしたみたいにひくついて、喋ることも息を飲むこともできない。

　そして眼が熱い……。

「あー、うそうそ、ゴメン、そんな泣きそうな顔しないで、ね？」

　冬木さんが慌てた顔で、両手を合わせながら謝る。

「まあ、初めてといっても、あなたが考えているようなのじゃないから」

　そう言いながら視線を勝平さんに向けた。

　懐かしむような眼差しと、口元には微かな笑み。

「聞きたい？　昔の柊のこと……っていうか私との……因縁」

　私は黙って頷く。

　冬木さんは勝平さんを見ると……なにかを蔑むような歪いびつな笑みを浮かべた。

「そう………四年前………彼は私から色んな物を奪ったのよ……」

　ボクは平行棒の真ん中辺りで休憩しながらふたりを見る。

　……うーん……椋さんと冬木さん、一体何を話しているんだろう……。

「けど……冬木さんかぁ………、こんなとこで会うなんてなぁ……」

　四年前……ボクも若かったなぁ〜。

　あの頃は足もまだ全然平気で、記録もグングン伸ばしている最中だった。

　秋の新人戦、自分の出番の前にトイレに行ったんだけど……それが失敗だったなあ……。

　集合場所に戻ったらみんな移動しちゃってた。

　どこに行けばいいのかわからずウロウロしていたんだけど、誰かを捜しているみたいな係の人がいたから、声をかけてみた。

　係の人はボクの胸元のゼッケンを見るや否や、手を取り……。

「ようやく見つけた。ほら冬木くん、早くしないとスタートだよ」

「え……？　ふゆ……？」

「ん？　あ、ゼッケンを裏表逆につけちゃってるんだね、でももう時間がないからそのままおいで」

「あ、あの、ちょ…….え？　ボクは………」

「ほら、早く早く」

「わ、わわわっ、どこに？　ボ、ボク、出番が──……」

「そうだよ、出番だよ、ほら、急ぐよ」

「まぁ、トイレに行ってて道に迷ってしまった私もマヌケなんだけどさ……」

　冬木さんは過去の自分を蔑むように自嘲的な笑みを浮かべる。

「なんとかトラックの入り口まで戻ってきたわ……そしたらちょうどアナウンスが流れたのよ。『４コースの冬木選手、大会記録更新』ってね……。アレよ、ちょっと待ったーって感じ？　今ここにいる私は何よって感じだったわ」

　目元が前髪で隠れた状態で、プルプルと肩を震わせている。

「慌ててトラックに戻ろうとした時、そこで出会ったのよ……柊とは」

　冬木さんは勝平さんを見ると、ため息を吐いた。

「最初は女の子かと思ったのよねえ……まあ、今でも十分間違われるとは思うけどさ。どうもみんなから逃げてきたみたいで、すごく慌ててた。私のゼッケン見て、名前に気づいたんだと思うけど、ゴメンて言って走っていったのよ。こっちは一体なにごとかわかんないってのに……」

　ここでさらに大きくため息。

「走ってもいないのに、表彰台のてっぺんに登るなんて屈辱よね……」

「そ……そうですね」

　震える声に私はなんて声をかけていいのかわからず、無難な相槌を返しておく。

「でもねっ！」

　冬木さんは勢いよく顔を上げると、そのまま私の両肩を掴んだ。

「なにが屈辱って、その後よ！　その後！　周りの声！」

「え、えっと、な、なにがあったんですか……？」

「〰〰……『あれ？　もっと可愛くなかったっけ？』って声がしたのよ……」

　言ってガクリと項垂れる。

　その様に私もなんて声をかけていいのか本当にわからなくなった……。

　あ……なんか冬木さんが椋さんの肩掴んだまま項垂れている。

　そう言えば、あの時もあんな感じだったなぁ……。

ボクが水道のとこで汗を拭いてる時に、凄い顔して来たっけ。

「ちょっとあんた！」

「え？　あっ！　ほ、本物！」

「なにが本物よ！　どういうつもりよ。人の出番乗っ取るなんて！」

「だ、だってしょうがなかったんだよ。係の人が間違えちゃうんだもん」

「冬木がひっくり返って木冬に見えて、柊？　そんなの納得いかないわよっ」

「あ～……そういえば係の人メガネしてたかも……」

「言い訳にもなってないっ！　私の記録どうしてくれるのよっ！」

「そんなこと言われても……」

「はぁ～……そりゃ優勝狙う気だったけどあんなタイム出せるわけないじゃない～」

「あ、あの、先にちょっと汗流して良いかな？」

「………え？　汗？」



「よいしょっと」

「きゃ！　ちょっちょっ！　あんたどこで脱ぐつも…………えええええ!?」

「うん？」

「あ……ああ……えっと………えっと……あんた……胸……なさ過ぎない……？」

「……？　普通だと思うけど……？」

「……ひょっとしなくても……男……？」

「ボクは男だ──！」

「いやぁ～……まいったわ………絶対女の子だと思ってたもん……」

「そ、そうですか」

「男の子に見とれたのなんて後にも先にもあの時だけよ」

「勝平さん、綺麗な身体をしていますから」

「ふぅ～ん」

　私の言葉に冬木さんは意味深な視線を向けてきた。

　それがなにを意味するのかわかり、私は顔を真っ赤にする。

「あ、あの、変な意味じゃなくて、その、病室で身体を拭いたりするので、それで……その……」

「あはは、わかったわかった。だからそんな必死な顔しなくていいよ」

「ぅ……ぅ～……」

「ま、そんなかなり最悪な出会いなのよ、柊とは」

　冬木さんは笑顔で昔を懐かしむように語る。

「ちなみに、その後、私は柊狙ってたから」

　急に真面目な顔になってそう言い放った。

「え……？」

「大会で会うたびに、いろんな話をするようになって……徐々に惹かれていったの」

　そう言いながら冬木さんは勝平さんを見つめる。

　その視線に私は例えようのない不安を感じた。

「ちなみにね、フラれたから」

「え？」

「見事にフラれちゃったの、私」

「…………」

「うん？　どうしたの、また泣きそうな顔して？」

「……すみません……」

「なんで謝るの？」

「……あなたがフラれたと聞かされて……私、ホッとしてしまいました……」

　泣きそうな顔で言う私を、冬木さんはきょとんとした顔で見ている。

「あはは、藤林さんが柊の彼女になれたワケがわかった気がしたわ」

「え……？」

「私がフラれた時の言葉、教えてあげよっか？」

「よっと……ふぅ〜……」

　平行棒の端で息を整える。

　ふたりはなにを話して……あっ！　な、なんか椋さんが泣きそうな顔している！

　なんでだろう………やっぱり冬木さん……ボクのこと恨んでるのかな……。

　そもそも冬木さんとはボク、出会いからかなり悪い感じだったし……。

　しかも……フっちゃ てるしなぁ……

　あの時の言葉も……今思えばきつかったかもしれないし……。

「あのさ、柊」

「うん？　なに？」

「この大会で私は引退なの」

「そっか、三年だもんね」

「あんたと会う機会……なくなっちゃうわね……」

「んー、まぁ家とか遠いもんね」

「あのさ、賭け……しない？」

「賭け？」

「ええ。この大会で、私があんたの記録……あの時の記録を超えることができたら……。わ、私と付き合って……」

「無理だよ、ボクの記録を超えるなんて」

　返答所要時間０・２秒。

　……走る前からダメだしだったもんなぁ……。

　そう言うつもりじゃなかったんだけど、よくよく考えるとそうとしか取れないや。

　結局、ボクの記録は超えることできなかったけど。

　そりゃ……男子の記録を超えるのはちょっと無理あるよね……。

「大会で優勝したのに、素直に喜べなかったわ」

　冬木さんは肩を竦めながら笑ってみせる。

「えっと……勝平さんはあまり先のことを考えて話をしない人なので……その…」

「うん、わかってる。ちゃんと後で来たわよ、私のとこに。そしてちゃんと言ってくれたの」

「……言ってくれた……？」

「そ。お付き合いできません、てね」

「ボクには、人を好きになるとかそう言ったことがよくわからないんだ。友達としてなら平気なんだけど、それ以上の気持ちを持つのは……なんて言うかな、恐いんだ」

　そう告げた時の冬木さんの顔、驚いてた。

　ボクは生い立ちを話した。

　孤児であるということを。

　ゆっくりと、冬木さんの隣に座って話した。

「男の人と女の人が愛し合って生まれるのが子供。でもその子供を捨てる人がいる。ボクの中には、そんな人達の血が流れているんだ……」

　自分の血を悔やむようにボクは言葉を吐いた。

　けど、冬木さんはそんなボクの類を両手で挟んで、自分の方に向かせた。

「親は親、あんたはあんたでしょ？　反面教師って知ってる？　ああなりたくないってお手本。柊はなりたくない物を身近に知ってるんじゃない。ならきっと誰よりも優しくなれるわよ」

　冬木さんはすごく真面目な顔で、□咤するように言った。

　そんなことを言われたのは初めてだった。

　ボクは思わず感嘆のため息を吐いた。

「いつか来るのかな……人を好きになることが恐くなくなる日って……」

「今がダメでもいつかは巡り会うわよ。ま、私じゃなかったのは残念だけどさ」

　冬木さんは、目の端に光る物を携えながら笑顔で言ってくれた。

「そんな感じで、私と柊はそれっきり。ま、ちょっとした恋心を奪われたってわけよ」

　語り終えた冬木さんは、清々しい笑顔で言った。

　私は胸の前で強く手を握る。

　そして頭を下げた。

「……ありがとうございます」

「え？　な、なに？　今度はお礼？」

「勝平さん、きっと冬木さんの言葉に救われたと思います。とても感謝してると思います。それまでそんなこと言われた事なかったと思いますし………その……なんて言えばいいかよくわからないんですけど……嬉しかったと思います」

「あ、あはは、やっぱ良い子ね、あんたって。そんな子だから柊も好きになったんじゃないかな」

「い、いえ、私なんて、冬木さんに比べれば、ちっとも……」

「あっ、じゃあ柊とっていいんだ」

「だ、だめですっ！」

　思わず声を荒げる私を見て冬木さんは笑った。

　私は顔を真っ赤にする。

「素直ね〜。そんなあなたに良いこと教えてげよっか」

「え？」

「柊のリハビリメニュー結構ハードでしょ？　早く自分の足で歩けるようになりたいみたいなんだけど、なんでかっていうと—……」

「……またなにか話してるよ……」

　平行棒のメニューを一本多くこなした後、休憩をしながら二人を見た。

　息を整えながら考えていた。

　今日は、過去と向き合う日みたいだ、と。

　やっぱり椋さんの占いは当たらないけど、悪いことじゃない。

　とても大切な過去と再会できた。

『親は親、あんたはあんたでしょ？　反面教師って知ってる？　ああなりたくないってお手本。柊はなりたくない物を身近に知ってるんじゃない。ならきっと誰よりも優しくなれるわよ』

　ボクは優しくなれているのかな。

　でも、優しくありたいとは思っている。

　そして、好きな人と並んで歩きたい。

　だから、まずは自分の足で歩けるようになろう。

　そして届けるんだ。

　未来を共に歩むための誓いの言葉を、指輪と一緒に。

14
古河ベイカーズ再結成

文：麻枝准



「てめえ、野球しねぇか」

　声。すぐ正面。

　見覚えのある男が立っていた。忘れるはずがない。

「うわっ、草野球の男っ」

　春原が隣で声をあげ、腰が引けるように俺の後ろへ隠れた。やれやれ、と思いながら俺は言い返した。

「前にしただろ」

「もう一回だよ」

「やだね。あれはあれで楽しかったけどさ、疲れた。二度とする気おきねぇや」

「そんなこと言ってもいいのかねぇ」

「罰ゲームは前の野球で終わってるだろ。まだ続いてるなんてずるいこと言うなよ」

「岡崎っ、この人に逆らうとやべえよっ」

　春原が後ろから言う。どうでもいいが、うっとうしいので腕を引っ張るのは止めてほしい。

「おまえ、超ビビリな。アレがついてるなら、少しは言い返してやれ」

「あ、ああ、てめえっ、お手柔らかに頼みますっ！」

「ふん……」

　鼻で笑った後、取り出すは、一葉の写真。

「……これ、ばらまかれたいかい」

「ああっ、ぜんぜんお手柔らかじゃない雰囲気っ！」

「なんだよ、それ」

「てめぇらが、女子がプールに入っている隙に下着を盗もうと更衣室に入っていこうとしてる写真」

「え？」

　まったく身に覚えがない。

「見てみるかい」

　俺は投げつけられた写真を拾い上げる。

　更衣室のドアを開けている春原と、その後ろにそっぽを向いて立っている俺が映っていた。

「うん、確かに更衣室だ。入ろうとしてるねぇ」

　春原が脇から。

「これ、俺、関係ないじゃんっ」

「てめえらの仲は周知の事実だ。見張りをしてるようにしか見えないだろうな」

「ぐあ……てめえっ、なんで俺の知らないうちに、下着なんて盗もうとしてんだよっ」

　怒りの矛先を春原に向ける。

「いや、してないよっ、この時は、中から誰かに呼ばれたから開けてみただけだって！」

「なに……」

　苦々しく、オッサンのほうを見る。

　その口がにやりと笑う。

「古河ベイカーズ、招集だ」

「こんな受験シーズン真っ盛りな時に付き合ってくれるお人好しなんていないわよ」

　杏が一蹴。傍らで開いていた参考書から目も離そうとしない。

「えーっ、それじゃあ、僕らが校内で変態呼ばわりされちまうよっ」

「おまえなんかいいじゃないかよっ、俺なんて変態じゃないんだぞっ」

「僕だって変態じゃないよっ！」

「ええ〜っ」

「そこ、ええ〜っ、言うなっ！」

　春原がキレかけたところで、杏は溜息を吐いてから顔を上げた。

「で、どうするの、集めてみるの？」

「やんないと、俺まで変態だし。おまえはどうすんの」

「まあ、他のメンバーが集まったらやってあげてもいいけど」

「じゃあ、付き合ってくれよ。こいつとふたりで頼んで回っても、望みは薄そうだ」

　俺は素直に頭を下げた。杏は仕方なさそうに肩をす参考書を鞄に仕舞った。

「よし、いこうぜっ！　こういうの、ドリカム状態って言うんだよね、へへっ」

「キモイこと言わないでよ……」

「すんげぇ忙しそうなんだけど」

　生徒会室、中心に机をまとめ、六人の男女が向かい合っていた。様々なプリントが机を埋め、それぞれが何かを言いながらもメモを取る手を止めようとしない。

「なんだ、きみたちは？」

その中のひとりがドア越しに覗き込んでいる俺たちを見て訊く。

「智代ー」

教壇を背にして座っている智代に向かって、俺は手を開いてみせた。

「なんだ、おまえたちか。どうした？」

「おまえに話があるんだ」

「そうか。悪いが、今、話し合いの最中なんだ。待っててもらえないか？」

俺たちは教室の隅にしゃがみ込んで、話し合いが終わるのを待つことにする。

あの日、草野球を共にしたメンバーはこうして、それぞれの日常に戻っていった。

今はもう、道も目標もばらばらなんだ。今また、一瞬だけでも、その道が交わるのだろうか。

「……で、次の議題に移るわけだが」

智代は手元にあったプリントをめくった。

「生活指導より最近、校内が汚いと苦情が来ている。生徒会で対策を打てとのことだが、何か意見はないか」

「はい」

眼鏡をかけた男子生徒が手を上げた。校章から二年生とわかった。智代は無言で頷く。

「質問なんだけど、どこが汚いって言ってる？」

「裏庭、グラウンド、三年生の教室および廊下、学食と出てる」

智代がメモを読みながら言った。

「そしたら、担当場所のクラス担任に言ってもらうとか」

「それくらいすでに言ってるだろう」

　別の学級委員が言う。

「生徒会主導で放課後、チェックを行うとか」

「副会長、できるか？　なんなら私と副会長で回ってもいいと思うが」

　智代が傍らに座ってノートを取っていた男子生徒へ促した。

「できなくはないけど、掃除の時間内にしなきゃ意味がないと思うよ。綺麗にするんじゃなくて、掃除をしてもらうのが目的なんだからね。でも、僕たちも掃除しなきゃいけないんじゃないかな」

　シャーペンをくるくると回しながら副会長が答えた。

　若干の間を空け、副会長はこう付け加えた。

「誰かがチェックしないと、同じことが起こるからさ、各クラスの美化委員とかに回ってもらうのは？　各クラスで一人ずつなら無茶なるじゃないし」

　小難しい話し合いが延々と続いていく。

「そういやさ」

　俺は思い出したように、隣の春原に向けて呟く。

「おまえ、なんか集めてたよな……あれなんだっけ」

「え？　なんのこと？」

「ほら、コーヒーについてるシール。集めると、なんかもらえるんだろ？」

「ああ、ウルトラカッコイイロゴの入ったジャンパーが当たるんだ。あれ着て登校したら、やばいね、モテモテだよ」

「もう応募したのか？」

「もうがんがん送りまくってるよ。学食で売ってるコーヒーだからさ、探せばいくらでも見つかるんだよね。裏庭、グラウンド、三年

生の教室および廊下のゴミ箱はそりゃ漁りまくったね。毎日のようにさ。まだやってるよ。なに？　シールくれるの？　ラッキーッ……ごぶううううっ！」



　杏が顔面のへこんだ春原を、生徒会の連中に突き出す。

「はい、犯人」

「というわけなんだが」

　話し合いが終わった後の生徒会室で、俺は智代に事情を話した。

「そうか、それは不ふ憫びんだな。確かにおまえは、そういうことをしそうにない」

「だよねっ」

「おまえはしそうだ」

「ええ〜っ！」

　春原には目もくれず断言。

「だが、この話、何か引っかかるな」

　智代はそう続ける。

「なにが」

「あの男……そんな卑怯な手を使ってまで、私利私欲を満たすような人間には見えなかった」

「ああ、それには同意だわ」

　杏が賛同し、俺も頷いた。

「そういやさ、あの人、別れ際、異常なぐらいむせてたよね」

　智代が大きく目を見開いて、春原を驚いたような顔で見る。

「病気……か？」

「だったら、気管……肺だねぇ」

「そういや、ヘビースモーカーだもんね……」

「若く見えて、結構歳いってるんだよね……」

「いや、ちょっと待て、それはなんでも飛躍しすぎじゃね？」

「でもなんだか嫌な予感がするんだ……」

「じゃ、娘の古河にそれとなく訊いてみようよ」

「おまえのそれとなくは恐らく、恐ろしいまでにストレートだから、女性陣に任せろ」

　Ｂ組へとって帰ると、ちょうど下校しようとした古河を捕まえることができた。

「みなさん、おそろいでどうしたんでしょうか」

「野球しようぜ！」

「おまえ主旨変わってるし、おまえが訊くなって言ってるだろ」

　智代が一歩前に進み出る。

「おまえの、お父さんはその……お元気か？」

　微妙な笑みを浮かべて訊く。

「え、お父さん、ですか」

　言いよどむ。とたん、緊張が走る。

「ここのところは、どうも調子が悪いようです。風邪でもないのに、よく咳き込んじゃってます。でも、大丈夫だ、このことは誰にも言うなって……あ、言ってしまいましたっ」

「うわあああああっ！」

　春原が悲鳴をあげて、俺たちの肩を抱き寄せ、古河から引き離す。

「やっぱりそうだよっ、隠してんだよっ、重い病気なんだよっ」

「それでも野球をしようってことは……」

「やっぱり最後に好きなことを……この町、最強のチームで……」

「あるいは、娘の目に自分の勇姿を焼きつけておこうと……。」

「前の試合は、すぐベンチだったからなぁ……」

「だったら素直に頼めばいいのに……こんな卑劣なやり方をしなくても……」

「ああ見えてさ……照れ屋なんだよ……」

「やべ、僕、泣きそうだよっ」

「泣くなっ、嘘を突き通させてやるんだっ」

「わかったよ、僕、最後まで笑ってるよ……」

「古河ベイカーズ、最後の試合だ……俺たちは最後までチームメイ

トだ……あの人のな」

　手を合わせて、一致団結。

　俺と智代と杏は、学生寮の美佐枝さんの部屋へ。

「やーよ、忙しいもん」

「この通りだっ！」

　智代が頭を下げる。

「ダメなら、土下座だってするっ」

「わあ、だめっ、女の子がそんなことしちゃダメだって！」

「じゃあ、引き受けてくれるのか…？」

「引き受けないわけにはいかないじゃない、もう……」

　春原と落ち合う。

「芽衣ちゃんはどうだった？」

「芳野さんが来るんだったら、来るってさ」

「相変わらず、兄の威厳ゼロだな」

　夕日が山の陰に隠れる頃、俺たちは駅前で叫んでいた。

「よ・し・の！　よ・し・の！　って、女性陣さぼってんじゃねーよ！」

「う、悪いけど、辞退………」

「てめえ、人の命がかかってんだぞ……旅の恥なんてかき捨てろ！」

　春原が熱く吼えた。

「他に方法あるでしょ、普通に考えたらさぁ……」

「あと、ことわざの使いどころ間違ってるからな」

「これ以外方法はねーんだよっ！　ほら、人手が足りないんだから、手伝ってくれよ！」

「やるしかないのか……」

「こうなったら、ヤケね……」

「よ・し・の！　よ・し・の！」

　手拍子と共に芳野コールを連呼し、町を練り歩く不気味な男女４人組。

　やがて、春原の体がひょいと持ち上げられる。

　その先には、芳野祐介の端正な横顔。

　春原ひとり、芳野祐介のステージに迎えられたんだ……悔しいぜ。

「喧嘩売ってんのか、このやろおおおおっ！」

　違った。

「あ、芳野さん、探してたんだ……」

「人の名前を連呼しやがって嫌がらせかっ！　お前に名刺渡してあるだろっ、事務所に連絡よこせ！」

「え……」

　浮いている春原の背後に目を光らせる杏。

「今は止めない」

　無慈悲な智代。杏が大きく振りかぶる。俺は恐怖で目を背けた。

「うわあああああああああ……」

　嫌々ながらも、芳野さんは駅前のベンチで俺たちの話を聞いてくれた。

「で、なんの用だ」

「やぎゅぶうぼぶべっ」

「腫れが引くまでおまえはしゃべるな」

「このメンバーだ、また野球だろ……お断りだ。おまえらみたいな学生じゃないんだ。仕事で忙しいんだ」

「わたしたちだって、受験で忙しいわよっ」

「だったらなんだってっていうんだ」

「それは…」

「………………」

　一同黙り込む。誰も目を合わせようとしない。

「なんなんだ、このしんみり感はっ、おまえらに一体なにがっ!?」

「オッサンが……」

　俺は苦々しく重い口を開いた。

「……もうすぐ死ぬ」

「なにぃっ!?　あの古河パンの親父がか……!?」

「最後の思い出に……俺たちとまた野球したいんだって……あの人、それを選んでくれたんだ……」

「そうか……わかったよ…こんな俺でよければ、最後の思い出に参加させてくれ」

　芳野さんは立ち上がり、目に光るものを浮かべながら語りだした。

「仕事なんてクビになろうがまた探せばいい。だが、かけがえのない時間は、二度と取り戻せやしない。俺は……かけがえのない時間

をみんなと共に過ごすことを選ぼう……」

「ありがとう、芳野さん……」

　いつもの通学路。

　既に夜となっており、街灯に照らされた歩道を俺たちは歩いていた。

「これで全員揃ったな……よくもまあ、こんな時期に揃えられたもんだ」

「そうだねぇ、いい友達を持って僕幸せだよ」

「いや、おまえの人望で集まった奴はひとりもいないから、勝手に幸せを感じるな」

「あれ……」

　俺が突っ込んだところで、杏が不穏な声をあげる。

「人数おかしいことない？　古河さんのお父さん入れて、数えてみてよ……」

「あ……」

　杏の言葉に春原が気づく。

「11人いる！」

「どこをどう数えたら11人もいんのよっ！」

「えぇ？　僕と岡崎でしょ、杏、智代、芳野さん、美佐枝さん、芽衣、斉藤、古河のお父さん、なんだ、ちゃんと９人じゃん」

「斉藤って誰よ……」

「あ、あいつは、メンバーじゃなかったのか……じゃあ……あれ？　ひとり足んないよ！」

「古河は？」

「あれはお父さんと交代だったから、スタメンにはいなかった」

「じゃあ、もうひとりは誰なんだ？」

「まあ、僕がいるんだしさ、後は人数合わせで誰でもいいんじゃない」

　ぼかぁっ！

「いってぇなぁ！　なんで殴られなきゃいけないんだよっ！」

「それ言ったら殴るって言ってあっただろ、すんげぇ前だけど」

「すんげぇ前だったら無効にしろよっ！」

「ん……なんだ、これは」

　ひとり後ろを歩いていた智代が不意に声をあげて、立ち止まっていた。

「なになに、お、手裏剣じゃん」

　その智代の手には、星形の彫刻のようなもの。

　皆で覗き込む。

　表面にはマジックペンで文字が書かれていた。

「えーと……塩水に十分浸した後、撫でながら風子とお呼びください……？」

「なんだよ、そうすりゃ何かが召喚でもされるのか？」

　バリバリ……ドゴンッ！

「うわぁっ」

　曇ってもいなかったのに、突然目の前に稲妻が落ちた。

　そこに人影。ゆらりと振りかえる。

「風子参上」

「いや、まだ塩水に浸してないし、撫でてないし、呼んでもない……」

「これは失礼……早とちりしました………インパクトある登場シーンが台なしです……」

「あ、そ」

「遅いから、もう帰んなさい」

「はい。それでは……」

　その姿が闇夜に消える。

「風子か……」

　その名前を呟いてみる。

「あ、思い出した、あいつが最後のメンバーじゃん」

「そういわれてみると、そうだな。どうして忘れていたんだろ……」

「もう一回呼んでみようぜ」

「でも、塩水ないし」

「いや、かなり適当なので来てくれそうじゃん」

「風子ちゃーん」

　春原が名前だけ呼んでみる。

　バリバリ………ドゴンッ！

「風子……参上」

「ほらね」

「塩水いらないなら書くなよ……」

「風子ちゃん、野球する？」

「はい………なんとなく楽しかったので、またやってみたいです」

「オーケー、また呼ぶよ」

「それでは」

　また姿を消す。

「どーでもいいが、すごい友達がいるな、俺たち」

　こうして、またあの日と同じメンバーが揃う。

　オッサンの最後の試合を飾るために。

　その日はどこまでも続く青い空。

　それを遠くまで見渡せるグラウンドに、俺たちは会していた。

　……たくさんの小学生と共に。

「あー、この人たちがコーチ。それぞれのポジションを教えてくれるからなー」

　オッサンは拡声器を使い、そう俺たちを紹介した。

「えっと………これってなに？」

　杏が俺の脇をつつく。

「んーと…もしかして、あれ？」

　春原が背後に立つ黒板を肩越しに指さす。

　そこには、第一回古河野球教室の文字。

「あー……試合じゃなかったんだ………」

「でも、これがあの人の最後の夢なんだ……そう考えると泣けるよ……」

　しかし……最後の夢に、第一回って、書くだろうか……。

　それにすごく元気そうだ。

　揚々とトスバッティングを始めている。

「ばーか、大きい声出すんじゃねぇっ！」

　病気のことを訊いた俺をオッサンはグローブで口元を隠して罵倒する。

「ありゃあ、早苗のパンのせいだ……」

　目の端には、レジャーシートを敷いて声援を送る健気な早苗さんの姿。

「今は無事だが……そんな姿バレたら、私のパンは副作用付きなんですねーっとか言って、また泣き出されちまうだろ……だから俺ひとりで処分しておいた……」

　ぽかーん。

　オッサンは清々しい顔でグラウンドを見渡す。

　そこでは、すでにメンバーたちが、子供たちに守備を教えていた。

「どうやったか知らないが、よくあの日のメンバー集められたな。よくやった。おまえはファーストか、コーチ頼むぜ」

　ぽんっ、と背中をグローブで叩かれる。

　ああ、なんだろう、この感覚。

　俺は忘れかけていた。

　含み笑いでそれを噛みしめた後、俺はグラウンドでコーチングするチームメイトを端から眺めていく。

　オッサンの病気はみんなの思い過ごしでした、なんて今さら伝えたらどうなるか考えながら。

「とりあえずファーストに投げてみろ。間に合うかもしれない。そ

れをセンターゴロというんだぞ」

「目をつむって、適当にえいっと飛んでください。そうすれば、グローブに入ってます。そんなもんです。なめてかかってください」

「ボールは真心だ。真心を受け取り、相手に手渡すと思え」

「後ろにそらせたら殺される…キャッチャーてのは、そういう生死をかけたポジションなんだよ。ビビリは帰りな」

　きっと、何も変わらない。

　一斉にコケて、そして笑い合った後、またそれぞれのポジションに戻っていくんだろう。



いいや、ほっとけ。

グローブを拾い上げ、ファーストキャンバスに向かう。そこにはたくさんの子供たちが待ち受けている。

「わりぃ、待たせたなーっ」

見上げれば舞う白球と青空。

そして、あの日と同じ匂い。

15 みんなで銭湯

文：魁



「はぁー〰……」

　自然と息が漏れた。

　身体から空気が漏れていき、代わりに、湯の温もりがじわりと身体に染みてくる。

　筋肉の疲れが溶け出して拡散していくようだった。

「足を伸ばして肩まで浸かれる風呂っていいなぁー」

「だろう。たまには銭湯もいいだろっ」

　オッサンは俺の前で仁王立ちしながら笑う。

「……頼むから人の前に立つなら前を隠してくれ……」

「かっ、自分がチンケだからってひがんでんじゃねぇぞ、小僧が」

　別にひがんでいない。

　オッサンは、俺の非難めいた視線を気に留めず、頭にタオルを乗せて一気に肩まで湯船に浸かると……。

「はぁー〰……やっぱ風呂入る時はこのスタイルだな。タオルを湯につけるのは礼に反する。あと掛け湯は三回以上だ。これも譲れない。あと、水をコップ一杯飲んでから入ると湯当たりしにくくなるぞ」

　矢継ぎ早に風呂道を説き始めた……。

　俺はオッサンの言葉を右から左に聞き流しながら、水滴だらけの天井を見上げる。

　……なんでこんなところに来ることになったんだろう……。

　遡さかのぼること三〇分ほど前……。

「てめぇら、いい汗かいただろう。今日の礼に、風呂をおごってやる」

　第一回古河野球教室を終え、小学生たちの背中を見送り終えた矢先のオッサンの言葉。

「お風呂って銭湯？」

「そうだ。ジャグジーに電気風呂に露天風呂、サウナと全部そろっているぞ」

　杏の言葉に応えるオッサン。

「できればそのまま家に帰ってシャワーだけでいいんだけど……」

「あたしも寮の仕事残ってるし……」

「行こう！　銭湯に行こう！　行きましょうっ！」

　春原は突然高らかに声を上げ、反論しようとしていた声を遮さえぎった。

　そしてオッサンを除いた他全員で円陣を組ませる。

「ちょっ……なんなのよっ」

「僕……わかっちゃったんだ……」

「何がだ？」

「……この人の本当の最後の望みは、仲間との裸の付き合いだったんだよ……」

　春原が円陣の隙間からオッサンを見ながら涙ぐむ。

　みんなもなぜここにあ集まったのかを思い出し目を伏せ、黙った。

　そうか……まだ病気だと思っているんだ。

　そして今に至る……。

「な、なぁ、岡崎……。」

　鼻息荒くした春原がある方向を凝視しながら声を掛けてくる。

「なんだよ？」

「お、女の子って脱ぐのも遅いもんなんだね」

「……は？」

「だってさ、ほら、向こうから声が聞こえてこないんだよ？」

「おまえな……何を期待して……」

「期待するでしょっ！　あんたしないの？　それ男として絶対間違ってます！」

「……おまえに男としてダメ出しされるのって傷つくな……」

「今のはてめぇがヘタレだな。そっちの金髪のほうが正論だぞ」

「そうッスよね。男なら声聞いて、いろんなこと想像しちゃうもんスよね」

「ああ、そうだな」

　オッサンはジャブジャブお湯を波立たせながら春原のほうへ移動する。

「けどな、早苗と渚の声聞いて何想像する気だ？　あぁん？」

「ひっ、ひぃっ！　お、奥さんと娘さんの声を聞いて因数分解を想像したいと思いますっ」

「じゃあ肩まで浸かって九九を一の段から順番に言ってけ」

「はっ、はいっ！　いんいちがいち、いんにがにっ、いんさんがさんっ」

「ふぅ……ところで芳野さんは銭湯って来たことあるんですか？」

　俺は少し離れたところで目を閉じている芳野さんに声をかける。

「銭湯か……」



　彼はゆっくり目を開けると、遠い場所を見つめながら語り始めた。

「雪の降る空の下、冷え切った指先を、吐く息で温めながら大切な人が出てくるのを待つ……そんな些細なことが幸せだと思える時間がある……」

　顔に手をやり、何かに陶酔してしまう。

　そっとしておこう。

　カララ……。

　壁一枚隔てて戸の開く音。そしてエコーのかかった声。

『これが銭湯か。不思議な場所だな』

『とても広いお風呂ですね』

『んー！　すごいです！　お風呂がたくさんあります！　泳いでしまいそうですっ！』

『なに、あんた達、銭湯初めて？』

『うん、初めてだ』

『都会にはお風呂屋さんがあるって聞いていましたけど、本当なんですね』

『私は家族で何度か来たことがあります。お父さんが足を伸ばせるお風呂がいいと言うので』

『風子一番風呂に入りますっ。もう我慢できません』

　パタタタタタ

『あーっ！　こら走らない！　滑って危ないわよ！　あと前くらい隠しなさい！　それとお湯に入る前にちゃんと掛け湯しなさい

よっ！　あと湯船にタオルつけちゃ駄目だからね。　あっ水コップ一杯飲んだ？　湯当たりしなくなるんだから飲みなさい』

　杏の声が響く。

「向こうにも銭湯ってもんをわかってる奴がいるじゃねぇか」

　オッサンが壁越しに杏を認めていた。

「岡崎……どうしよう……」

「あん？」

「この壁一枚向こうに女友達が裸でいるんだよね……僕興奮してきちゃった」

「てめぇ九九はどうしたぁ！」

「ひぃっ！　すみません七の段で躓つまずいてしまいますっ」

　カララ……

『はぁ〜、若い子達は元気ねぇ』

『あら、美佐枝さんもまだ十分若いですよ。私なんてもうおばちゃんですから』

『全然そうは見えないんですけどねぇ。本当に一児の母なのかも疑わしいくらいだし』

『嬉しいことを言ってくれますね』

　どうやら早苗さんと美佐枝さんも入ってきたようだ。

　隣も全員が浴場に揃ったらしい。

『うっわぁ〜』

　突然、芽衣ちゃんの声が響く。

『美佐枝さんの胸、大きいと思っていたけど脱いでも凄いんですね』

　女湯から聞こえてきたその言葉に思わず固まってしまった。

　九九を暗唱していた春原も、口を開けたまま止まっている。

　芳野さんも顔に手を添えたまま動かない。

　オッサンだけがニヤニヤしている。

『大きくてもいいことなんてないわよ？　邪魔だし肩凝るし男共は変な目でしか見ないし』

『それでもないよりはあるほうがいいと思いますよ。コツとかあるんですか？　大きくなるコツとか』

『コツ？　コツねぇ……』

『えっ！　あるの?!』

　杏の声がやや離れた場所からした。

『お豆腐をたくさん食べれば大きくなるって聞いたことはあるかしらねぇ』

『わかりました。今日から毎日食べますっ』

　芽衣ちゃんは決意に満ちた返事をした。

『豆腐、豆腐かぁ……』

『大きければよいというものではないと思うのだが』

『……そりゃあんたはそれ以上いらないでしょ……』

『私はもう少し欲しいです』

これは古河か……。

『あなたもないというわけではないと思うが？』

『それでも……もうすこしあると嬉しいです』

『無理よ渚。持ってる人にはわからない悩みだから』



『そういうものなのだろうか。複雑なんだな』

『ええ、複雑なのよ。………にしてもあんたもホントかなりあるわねえ……』

『正直邪魔だと思うことがある。どこかのバカにからかわれるネタ

にもなったしな。私はあなたくらいが理想だ』

『……いまいち褒められてる気がしないわねえ……』

「岡崎……どうしよう……僕お風呂から出られないよ」

「茹だるまで入ってろ」

「っていうか、やっぱり智代のって本物だったんだね」

「ああ、そういうことだな」

「そう言えばあんた『柔らかくて温かかった』とかって言ってましたよね!?」

「あ〜……」

　ほっぺたをつまんでごまかした時のことか……。

「ああーっ！　言いたい、揉むと大きくなるよって言いたいっ！」

「言ってみろよ。もしかしたら『じゃあ陽平が大きくして』って頼みにくるかもよ？」

「マジっすか？」

「言わなきゃ可能性はゼロだろ」

「そ、そうだよね、えっと、なんて言えばいいんだっけ？」

「僕の大きくしてあげるよ」

「あ、なるほど、それって無駄な部分省いてていいね。って僕、変態ですか！」

　ちっ、気づいたか。

『風子ちゃん、身体洗ってあげましょうか？』

　不意に聞こえてきたのは早苗さんの声。

　耳をすましてみ——…ようとしたけれど、オッサンの目が怖かったので、湯を両手で顔にかけてごまかす。

　けど、春原がだらしなく口を開けながら女湯のほうを見ていた。

　そんな彼の背後にオッサンが立つ。俺は顔を背け、次に起こる惨劇から目をそらした。

『大丈夫です。風子もう一人で洗うことができます』

『ちゃんと背中も洗えますか？』

『大丈夫です、むしろ私が早苗さんを洗って差し上げますっ』

『あら、それじゃあお願いしようかしら』

『任せてくださいっ。タオルはお肌によくないので手でしっかりと洗いますっ』

『普通にタオルでいいですよ』

『風子のやさしさは時として理解されないようです』

『タオルを使ってやさしく洗ってください』

『前向きに検討してみます』

『お願いしますね』

　ほほえましいやり取りだ。

『わっ、すごいですっ！　早苗さんのおっぱい、おねえちゃんより大きいです』

　ビクッと芳野さんが反応した。

　大きく目を見開いて女風呂のほうを見つめている。

『触ってもよいですか？』

『馬っ鹿野郎！　早苗のおっぱいに触っていいのは俺様だけだぁ!!』

　オッサンが女風呂に向かって叫ぶ。

『いいですよ』

『早苗ぇーっ！』

　オッサン撃沈。

『うわっなに、声筒抜け』

『どうやらそのようだ』

　しかも声が通ることまでバレてしまう。

『朋也〜聞こえる〜』

　杏が壁越しに声を掛けてきた。

「……ああ、聞こえるぞー」

『うっわぁ〜……盗み聞きしてたんでしょ〜』

「失礼なことをいうな。聞かされていただけだー」

　エコーがかった会話。

　互いが裸で、壁一枚隔てた状態。

　妙な気恥ずかしさがあったが、同時に変に落ち着いている自分がいることに気づく。

　ああ、こういう時間も悪くないんだな、と思った。

『陽平〜』

「はっ、はいっ！　なんでしょうかっ！」

『変な想像してたらハッ倒すからね〜』

「なんで僕には辛い言葉しかくれないんですかっ！」

「そういうキャラなんだよ、おまえは」

「くそー！　全裸でそっちに突入するぞ、こらー！」

「よせ、春原、指さされて笑われるだけだぞ」

「笑われるほど粗末じゃねぇよ！　なんなら見せましょうか?!」

「あぁん？　どれ？」

　オッサンが春原の背後からのぞき込み……。

「…………」

　切ない顔をした。

「いっそ笑ってくださいっ！」

『さーって、身体でもあーらおーっと〜』

「わざわざ口に出して行くなーっ！」

　杏は絶対この状況を楽しんでいる……。

『私は髪を洗おう』

　智代まで……。

『手伝いましょうか？　それだけ長いと大変そうですし』

『それは助かる』

　智代と古河は髪を洗うようだ。

「髪長い人って洗うの大変そうだな」

　俺は自分の髪を指で摘つまみながら呟く。

「そうだな、よく昔は手伝ってやったな」

「手伝うほどの長い髪じゃなかったが洗ってあげると、嬉しそうだった」

　オッサンと芳野さんが懐かしむように答える。

　男として何か置いてけぼりをくらった気分だった。

「僕も昔は芽衣の頭を洗ってあげたんだけどねぇ」

「どんだけ昔のことだよ」



「六年……もっと前くらいかな……？　ある日を境にお兄ちゃんとはもうお風呂に入らないって言われてさ、思春期って奴だったなのかな。あれって意外とショックなんだよねぇ」

　つーか、普通男のほうから一人で入るって言い出すもんだと思うんだがな。

「わかるぜ……その気持ち……」

　オッサンが珍しく春原に同調している。

「渚を風呂に入れるのは俺の日課だったんだ……なのに突然、よそよそしくなってなぁ。そしてとうとう、もうお父さんとはお風呂に入りません、てな」

「ちなみにいつまで一緒に入ってたんスか？」

「高一の終わりまでだ」

『う、嘘ですっ 小学校の四年の時から入っていないですっ』

　古河の必死な声が女湯から飛んできた。

「ちっ、娘を持つ男親の気持ちを理解してくれる奴なんてここにはいねぇな。温泉行っても俺は一人だし、混浴の宿とっても、早苗しか入ってこねぇ」

「十分うらやましいんですけど」

「俺は渚と風呂に入りてぇんだっ！」

　こまったお父さんだ……。

　将来娘が生まれたとしても、こうはなるまい。

『はぁ～さてと、あたしはサウナでも入ろうかしらね』

『では私もご一緒します』

「風子もサウナ行きたいです。汗をかいて早苗さんみたいになります」

『あんま無理しちゃダメよ？』

『それは風子がナイスバディになることをおそれての言葉ですね。わかりました、その挑戦受けました。どちらが長く入っていられるか勝負です』

『………』

『どうしたの芽衣ちゃん？』

「あ、杏さん……このお風呂なんですけど、すごい勢いで泡がでてるんです」

『ジャグジーバスよ。知らない？』

「……これがジャグジーバスですか……話にしか聞いたことはなかったですけど……都会の銭湯はやっぱり違うんですね」

『入らないの？』

『……痛くないんですか？』

『噴出ノズルのとこまで行くとちょっと勢い強いけどね。でも逆に、そこに肩とか腰を当ててマッサージ代わりにするって入り方もあるわよ』

『奥が深いんですね、銭湯って』

『ほら、入った入った』

「あ、ちょっと待ってください、まだ心の準備がっ……あっ……わぁっ！」

　どぶんっ

「ああっ！　芽衣が杏にいじめられているっ！」

「お兄ちゃん助けに行ってやれ」

「いえ、僕まだお風呂からあがれないんです」

「……おまえスケベなのに純情なのな……」

「さてと、俺も身体を洗うか」

　湯で顔を赤くさせたオッサンは、湯船から出るとカランのある所まで行く。

　俺はその様子を湯船に浸かりながらボーっと眺める。

　……あの人も前を隠さず堂々と歩く人だな……。まあ立派だからよいのかもしれないけど。

「なぁ岡崎」

「あん？」

「あの人、あとどのくらいの命なんだろうね」

「……」

「脅されたり、無茶なことさせられたり、正直良い思い出じゃないはずなんだ。でもどうしてだろう。嫌じゃなかったんだ。あの人と一緒にいると楽しかったんだ……」

「……あ、ああそうだな……」

　いつまで黙っているのか、少し考える必要があるのかもしれない。

「僕、あの人の背中流してくるよ」

「ああ、行ってらっしゃい」

　春原はタオルで前を隠しながら、オッサンの所へ向かう。

「岡崎」

　芳野さんが声をかけてきた。

「あの人、本当に病気なのか？」

　ああ、気づく人はやっぱり気づいているんだ。

「……いえ、その……実は……」

　俺はオッサンの咳の理由を話す。

「なるほどな。とんだ勘違いだ」

「すみません、仕事まで休んでもらったのに」

「いや、構わない。こういった時間も遠い将来、良い思い出になるだろう」

「そうッスね」

　勘違いから始まり、人を集めて、小学生相手に野球を教えて、銭湯に行く。

　こんな体験、そうあるもんじゃない。

「てめえ、背中流すんならもっとしっかり力入れろっ！」

「すみませんっ……なんか目の前がかすんじゃって……」

「うぉっ！　てめえ何泣いてんだ?!」

「うっ……ひっく……僕、貴方のこと忘れませんからあー！」

「や、やめろ！　裸で抱きつくなっ！　気持ち悪い！　こらっ！はなれっ……ろっ！」

　泡まみれの男が二人、カランの前で取っ組み合う。

「ああいうのもいい思い出ッスね」

「ああ、かけがえのない時間だ」

「で、勘違いだって？」

　風呂上がり、まだ湿った髪をタオルで押さえたまま、フルーツ牛乳を片手に持った杏があきれ顔でそう言った。

「みたいだな」

「早とちりもいいとこだ」

「病気……か？　って言ったの、おまえだからな」

　牛乳を持つ智代にツッコミを入れておく。

「それでも面白かったからいいです。芳野さんにも逢えましたし」

　イチゴ牛乳を持つ芽衣ちゃんが芳野さんの隣で満足そうに笑う。

「め、芽衣。いくら芳野さんとはいえ、お風呂上がりの女の子がその……くっつきすぎじゃないかなぁーなんて……」

　同じくイチゴ牛乳を持っている春原がオロオロしていた。

「ところでオッサンは？」

「お父さんは、私のパンは副作用付きなんですねーっと叫んでいたお母さんを追いかけて外に行きました」

「あ、そぉ」

　結局は追いかけるはめになったんだな。

「はぁはぁ……戻ってきたぞ」

　息を荒くしたオッサンが眉間にシワを寄せながら、コーヒー牛乳を手に現れる。

　隣には泣きやんだ早苗さんもいる。手にはコーヒー牛乳。

「ったく、てめえらがそんな理由で集まってたとはよ」

　自分が病気扱いされ、しかも死んでしまうことを前提に集まられていたんだから気分のいい話ではない。

「ありがとよ」

　ニッ、と無邪気な笑みで言った。

「いい奴等ばっかりじゃねぇか。こんな奴等と野球してたなんて一生誇れるぜ」

　みんながその笑顔を呆然と見る。

　ああ、そうか。

　なんてことはない。こんな人だからみんな集まったんだ。

　病気とかそんなことは関係なかったんだ。

「何はともあれ、第一回古河野球教室お疲れサンっ」

　それぞれ手にしたさまざまな牛乳で乾杯する。

　次があるのかはわからないけど、もしあるのだとしたらみんなは集まるだろうか。

　その時になってみないとわからないけれど、それでもきっと……。

　俺達は何かしらの形で、思い出を重ねる。




16
町の思い
文：麻枝准

　夏の太陽は一緒に思えるけど、ここのは強さが違う。

　バスを降りてから、もう一時間くらい歩いていた。

　雲ひとつないお日さまの下を、ママから借りた日傘を差して。

『Ou seul allez-vous la fille?（お嬢ちゃん、ひとりでどこ行くんだい？）』

　大きなトラクターに乗っているおじいさんが声をかけてきた。

　隣ではあたしと同じように日傘をさしたおばあさん。ちょっと慌てたけど、あたしは覚えたての言葉をはっきりと口にした。

『Il va au gisement de lavande.（ラベンダー畑に行くの）』

　おじいさんは笑って、あたしをトラクターに乗せてくれた。

　地平線まで広がる、紫色のじゅうたん。

　後ろの山すそには、気の遠くなるくらい古くからある白い町並み。

　ここでしか見られないものがある。

　でも、人の温かさと毎日を大事に暮らしている風景は、どの町も変わらない。

　事の発端は、汐と渚の会話だった。

「しおちゃん、もうすぐ夏休みですね」

「うん」

台所から、母親の渚が汐に話しかけていた。

汐も料理は好きらしく、嬉しそうに渚を手伝っている。

「どこか行きたいところはありますか？」

「うん……あるんだけど……」

「じゃあ、パパにお願いしてみるといいです」

いつの頃からか、渚は俺のことをパパと呼ぶようになっている。

「大丈夫かな？」

「パパ、大丈夫ですよね？」

深皿を居間に持ってきた渚が聞いてきた。

「そうだな。どっか行きたいところあるのか？」

「……パパ、あのね」

汐は俺の正面に正座する。相当突飛なことを言おうとしているのか、その目に決心の色が宿っている。

「なんだ、海外か？」

先に問う。

予想は的中。汐はこくっと頷く。

「さすが朋也くんです。しおちゃんのことよくわかってます」

キッチンで振り返って渚が笑顔で言う。

「我が娘のことだから、それぐらい当然だ。そうしてやる甲斐性も今じゃあるしな。で、どこにいきたいんだ？」

俺は汐に続けて訊く。

「ハワイで泳ぎたいのか？　オーストラリアでコアラか？　あるいはパリの凱旋門か」

　再び汐は頷く。三つともに。

「欲張りな奴だな、どれかにしろ」

「だって、ぜんぶだもん」

「はぁ？」

「ハワイもオーストラリアもパリも、ぜんぶ。世界の国ぜんぶ」

「世界ぜんぶ!?」

　危うく湯飲みを落としそうになる。

「うん、ひとりで世界をぐるっとまわって、いろんな町を見たいの」

　大きな目で俺を見つめ、正座した膝の上では決意の程を表すかのように、しっかりと拳が握り締められていた。

「おまえな……まだ小学生だろうが」

「歳なんて関係ないもん。あたしはそう決めたんだから」

　はっきりとした口調。それは母親譲りの頑固さだった。

　答えようがなく、お互いに黙りこむ。

　とはいえ、頭ごなしに否定しても始まらない。

「……でもな、なんで世界一周なんだ？　どうしてそう思ったんだ？」

「ずっと考えてたの。世界を、いろんな町を見て、いろんな人と出会いたいって」

「いろんな町は見てきたじゃないか。これまでだって、いろんなところに行ってきた」

「ううん、もっと広い世界。最初はテレビだったの。ヨーロッパの小さな町を紹介してて、みんな穏やかに暮らしてた」

　汐の大きな瞳が熱を帯びる。

「授業で習った世界が本当にあるんだってわかった気がして、すごくうれしかった。だから、もっと知りたいって思って、図書室で借りた本で調べて。そしたら、いつか知らない町を自分の目で見て、いろんな人と話してみたいって思うようになったの」

　汐は、本やテレビで知った光景を思い浮かべたのだろう。

　そういえば、難しい漢字が読めずに教えてとせがまれた本には、いつも様々な町並みやその土地の文化が載っていた。

　俺は唸っていたが、同時に驚いてもいた。

　まだ何も知らない子供だと思っていた汐が、ここまで自分の考えを固めていた。

　しかし……

「いきなり世界一周と言われてもなあ……」

　いくらなんでも突飛すぎると思う。

「ひとり旅は慣れてるし」

「海外はぜんぜん違うと思うぞ？」

「ぜんぜん違ったとしても、適応する自信もあるし」

　なんとも快活に育ったものだと思う。

　渚ができなかったことを叶え続けるように、汐は人並み以上に逞たくましく育っていた。

　学芸会では、いつだって主役で、大立ち回りを演じてきた。

　いつか渚の父親であるオッサンが口にした言葉を思い出す。

　自分たちの夢は娘である渚に託した、と。

　今、渚は、それを汐に託しているのだろう。

　汐が夢をひとつ叶えては、渚は生きる幸せを感じる。

　渚らしく、慎ましくも、かいがいしく。

「ね、パパ、いいでしょ？」

　その渚の元気版が俺の膝にしがみついている。

「渚はどうなんだ」

　キッチンに向けて訊く。

「わたしは、しおちゃんがしたいようにさせてあげたいです」

　愚問だった。



　山道を登る電車に揺られて。

　有名な場所だから、訪れる人も多いみたい。

　陽気なイメージはそのままで、誰もが人懐っこくあたしに話しかけてくる。

　言葉はあまりわからなかったけど、気がついたらココナッツジュースを持ってた。

　ひとくち飲んでみた。甘いけど、すごくおいしい。

「E tasty muito!（とてもおいしい！）」

　上手く通じたかどうかわからないけど、みんなとても喜んでくれた。

　三〇分くらいで目的地に着いた。足元には雲があった。

　遠くには海が見え、あれだけ大きかった高層ビルが小さく見えている。

　後ろにそびえ立つ両手を広げた石像が、あたしを励ましているように思えた。

　週末に訪れた古河家で、俺は汐の旅行のことを渚の両親に相談していた。

「さすが俺の孫だな。スケールが違うぜ」

　止めるどころかけしかけられた。

「無責任に言うなよ」

　居間では、オッサンの膝に乗って汐が撫でられている。

　古河家にくると、決まってそのポジションに収まるのがなんとも悔しい。

「ほら、アッキー、もっと言ってやって」

「小学生で世界一周ったあ、豪気な話じゃねえか。俺にもそんな度胸はねえな。すげぇな、汐は。大物になるな！　それに比べておまえの父親はなんだ、虫けらか！」

　ひどい言われようだ。

「こんなチンケな父親は嫌だってよ。うちの子になるか？　よし、今日から古河汐だ！」

「そうだよ、パパ、許可してくれないと、アッキーの子になるもん」

「くそー、ふたりがかりで脅しやがって……」

「ごめんなさいね、朋也さん」

　隣では早苗さんがオッサンの悪ふざけを詫びている。

「それにいいこともあるだろ。おまえらなかなかふたりきりになれなかったんじゃねぇのか？」

「え？　なんのこと……？」

　隣では、渚が恥ずかしげに俯うつむいていた。

「……そのことは考えなくてもいいです」

　なんの話だかよくわからない。

「なんだ、てめぇの亭主はもう干からびちまったのか？」

「ああ、いえ……」

　そこで止めに入るべきだったのだ。次の言葉で俺はそう悔いることになる。

「ちゃんとそういう時間作って、しちゃってます……エッチなこと……」

　渚の爆弾発言ｐａｒｔ……えー、いくつだ？　もう覚えてねぇ……。

　そこではっと気づく。いつもの古河家のペースに巻き込まれてし

まっているではないか（かつてはアホアホトライアングルと呼んでいたが、今ではアホアホスクウェアとなり、強化されている）。

「ただ、心配なんだよっ」

　慌てて、本題である汐の旅行の話に戻す。

「旅行中の日本人って盗難に遭いやすいって聞いたこともあるし、危険すぎるって」

「てめぇ、俺の孫を甘くみんなよ……体は鍛えてあんぜ？」

　確かに、汐は幼少時からオッサンに鍛えられ、歳不相応な高い身体能力を持つに至っている。運動会のトラック競技では負け知らず。リレーではアンカーを任され、五人をごぼう抜きし、クラスを逆転優勝に導いた記憶もまだ新しい。

　その逞しさはわかる。

　でも一方で、こうしてオッサンの膝で丸まる汐は、年相応の可愛らしい女の子のままで……。

　どうして、そんな過酷な挑戦を始めようと言い出すのか、さっぱりわからない。

　その場は、もう少し考えてください、というしかなかった。

「で、朋也、答えは出たのか」

　ちゃぶ台にはイカさきと佃煮、手には日本酒。

　時刻は午前〇時を回っている。渚と汐は、早苗さんと一緒に寝ていた。

　気が向いたときに、俺はこうしてオッサンと差し向かって酒を酌み交わすことにしている。

「何がだよ」

「汐の旅行だ。もう忘れちまったのか？」

「考えてるよ。だから、オッサンに相談しにきたんじゃないか」

「ま、頭ごなしに否定しなかっただけ褒めてやる」

「当たりまえだろ。大事な問題だ」

　コップから、一口飲む。じんわりと広がる熱さが心地良い。

「心配なのはわかる。俺も親だからな」

　オッサンは、俺のコップに一升瓶から直に注いでくれた。

「でも、あいつは、何かを担っている気がしてならねぇんだ」

「なにって、なんだよ？」

「それがわかれば世話ねぇんだが……」

　しばしオッサンは黙ってイカを噛み切ることに集中した。

「なんつーか……渚の運命を、引き継いだってのかな……」

　ぽつりと思い出したように切り出した。

「渚の……運命？」

「てめぇには話したろ。幼い時あいつは命を落としかけて……何もない自然の中でまた目覚めたこと……」

「ああ……」

「そして、汐にも似たようなことがあった。神隠しのように消えちまった後……同じ場所……その時はもう病院が建っていたが……そこで眠っていた」

　あの時の俺は取り乱していて、詳しくは思い出せない。ただ、俺は本当に汐を失ってしまったと思ったんだ。

「………………」

　口の中が乾ききっていた。アルコールのせいだろうか。

「今回の汐の旅も、何かそれと関係あるような気がしてならねぇ」

　いや、そんなはずはない、と俺は思った。

「なぁ、オッサン。俺たちはさ、この町を愛し、この町に育まれてきた……それは渚も言っていたことだ」

「ああ、そうとも」

「だったら、どうしてその町から突き放すようなことをしなきゃならないんだ？」

「突き放す？」

「違うのか？」

「ああ。もし、汐がこの町と深く関わりがあるっていうんなら、この旅は……」

　オッサンは一度話をそこで止め、コップを一気に傾け、ぐびっと喉を鳴らして飲んだ。そして深い息継ぎの後、言った。

「町にとっても同じ、成長の旅になるんじゃねぇのか？」

　まだ顔を出したばかりの陽射しは柔らかい。

　しっかりと靴紐を結び、帽子をかぶりなおす。

　背負っているのは、汐の小さな体からはみ出るほどの大きなリュックサック。

　キーホルダーがわりにつけられた四つのお守り。

「朋也くん、見送りにこれなくて残念です……」

「仕事だから、仕方ないだろ」

　俺は今日も仕事だから、汐を空港まで見送りにいけない。

　渚と早苗さん、オッサンが送ってくれる手はずになっていた。

「用意ができたんなら、いくぜ」

　戸口の向こうで、オッサンがタバコをふかしながらそう急せかす。

「いや、最後にいくつか注意だ。車には気をつけるんだぞ？　変な人についていったりしちゃダメだぞ？　それから……」

「いちいち細かいんだよ」

　オッサンが俺を止める。

「しっかし、おまえ心配性だな」

　心配のしすぎ、とはわかっているが止められない。

「大丈夫だ、おまえらの子だからな」

「……そっか……そうだな」

　俺は、荷物ごと汐を抱え、玄関を出た。

「大きくなったな」

「うん、今年四センチも伸びたよ」

　嬉しそうに伝えてくれる。

　ふと、空に何かが揺れて見えた。

　雪のような……いや、光だ。

　それが踊っている。

　まるで、この子の旅立ちを祝福するように。

　同時にオッサンの言葉を思い出す。

　……町にとっても同じ、成長の旅になるんじゃねぇのか。

ああ、そういうことか。

今、初めて納得できた。

人はいろんな人と出会い、別れを繰り返して成長していく。

それは町も同じことなんだ。

いろんな町と出会い、別れを繰り返していく。

これから旅をして、汐と町は共にそうして成長していくんだ。

光が踊っていた気持ちもわかる。

汐と同じ、たくさんの出会いが楽しみなんだな。

「どうしたんですか？」

立ち止まっている俺を不思議に思ったのか背中から渚の声。

「光が……」

そう言って指をさそうとしたが、すでにそれは消えていた。

「いや、なんでもない」

「そろそろ時間だぞ」

オッサンが俺の肩を叩いて、先をゆく。

「ああ」

降ろそうとした汐が、逆に俺の首に抱きついてきた。

「ごめんね、パパ」

耳元でそう囁く。

「いや、いいよ」

「好きだよ、パパ」

「ああ、俺もだ」

　汐が俺の頬にちょんと短いキスをする。

　ようやく俺の首を開放すると、地面に降り立ち、背筋を伸ばした。

「じゃあね、パパ」

　そう俺を振り返った。

「気をつけてな」

「うん、いってきます！」

　汐が歩き出す。

　その小さな体に、大きな期待と町の思いを詰め込んで。

Ｆｉｎ








































おもしろいによ
お願い


























































KOYO




KERO KERO


















has Come
And the














冬木



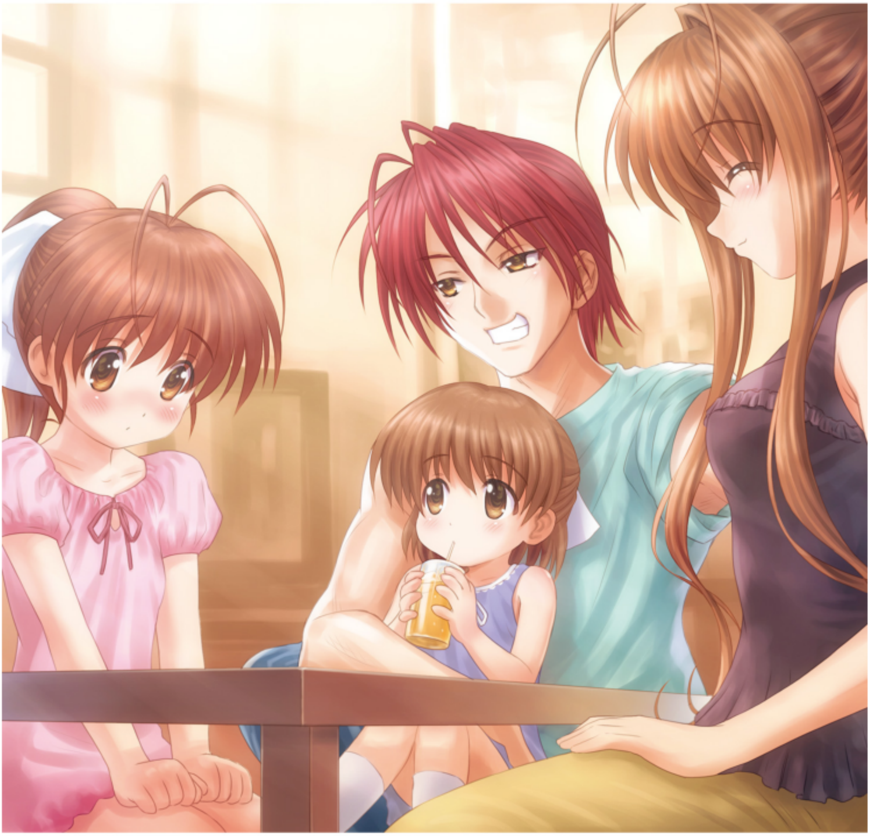
















Official Another Story

CLANNAD

-クラナド-

光見守る坂道で 新装版

Official Another Story

CLANNAD　□クラナド―

光見守る坂道で　新装版

Word　Key

Illustration　ごとP

Character Design　樋上いたる

2020年４月30日　発行

ver.001

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

『Official Another Story　CLANNAD　□クラナド―　光見守る坂道で　新装版』

2020年４月30日　初版発行

発行者　青柳昌行

発行　株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ

●お問い合わせ

https://www.kadokawa.co.jp/

（「お問い合わせ」へお進みください）

※内容によっては、お答えできない場合があります。

※サポートは日本国内のみとさせていただきます。

※Japanese text only

カバー・本文デザイン　アイダックデザイン